A Way for Future

未来につづく道

大地 生命 農業 芸術

「平成19年度 現代GP 地域環境・農業活用による大学教育の活性化
～ネットワーク型農学校が大学と地域社会の未来像を創造する～」補助事業
大地、生命、農業と芸術の融合による教育プログラム報告書

未来につづく道

九州大学現代GP　地域環境・農業活用による大学教育の活性化

大地・生命・農業と芸術の融合による教育プログラム報告書

九州大学は、地域の人々と関わり風土を慈しむ心を養う学生教育プログラムを始めました。「現代 GP 地域環境・農業活用による大学教育の活性化～ネットワーク型農学校が大学と地域社会の未来像を創造する～」という取組みです。現代 GP（Good Practice）とは、優れた大学教育プログラムを支援する制度です。その補助事業である「大地、生命、農業と芸術の融合による教育プログラム」の活動について報告します。

いのちを感じる、つまり生きているという実感はどこからくるのでしょう。私は「生きにくさ」の中にあると思っています。葛藤しながら何かと関わること。作り出すために時間と手間をかけること。社会的な苦しみを真実に理解し、思索し行動すること ….。これらを引き受けることは、自分自身のいのちと存在を確かにします。私たちを謙虚さと感謝で満たしてくれます。

私たちの社会システムを、いのちに寄り添うものにしていきませんか。ここでは農業と芸術、そして地域に関わることを切り口にその方法を考えます。地域とは単純な区画のことではありません。踏みしめる大地にしみ込んでいる出来事・時間・生命活動のすべてです。地域からいのちを生み出す「農」は重要です。食だけでなく、環境を保全し、文化そのものを育んできました。風土にいのちの循環がなければ、芸術も絶えるでしょう。グローバリゼーションが見落としてきた風土の循環を、もう一度みつめる必要があります。私は芸術によって培った思考や感性によって、農の問題に寄与したいと願っています。私たちの未来につづく道を、学生や地域のみなさんと共に学び、分かちあい、深めたいのです。

「未来につづく道」プログラムは、アートワークショップや講演会によって構成されています。講演会は農業の歴史的問題から、世界貧困や環境問題まで含む広い視野から問題提起されています。ぜひ自分の問題に引き寄せて考察してください。特別付記として、この取組みに到るまでの私自身の制作活動や、いのちと大地に関する講演録を収録しています。

＊この報告書は授業「命のあり方・尊さと食の連関」の参考資料にする予定です。

九州大学芸術工学研究院助教　知足（ともたり） 美加子

大地 命
生 業
農
芸 術

目次

授業報告「命のあり方、尊さと食の連関」1 ---------- 3

授業報告「命のあり方、尊さと食の連関」2 ---------- 4

受講生感想 ---------- 5

アート・ワークショップ　未来につづく道 ---------- 9

学生によるアート・ワークショップ　Design the Earth ---------- 10

波平恵美子氏 講演会 ---------- 11

普川容子氏 講演会 ---------- 30

田中 優氏 講演会 ---------- 47

特別付記　「未来につづく道」にいたるまで

農と芸術の協働（活動と作品） ---------- 53

安積遊歩氏 講演会（種の祈り） ---------- 75

貝澤耕一氏 講演会（二風谷プロジェクト） ---------- 95

豊かな未来築く 方策を考えよう

30日、九大で講演会

九州大学は三十日午後六時半から、地域の持続的発展を目指した教育プログラムの一環として、福岡市南区塩原四丁目の同大橋キャンパス51教室で、講演会「未来につづく道」を開く。講師は、環境や福祉問題に取り組む非政府組織（NGO）「未来バンク事業組合」理事長の田中優氏。

参加無料。

地域住民と学生が一緒に、豊かな未来を築く方法を考えるのが狙い。田中氏は、環境破壊や温暖化を引き起こす社会システムについて語る。

また、十月十日には特定非営利活動法人（NPO法人）「アジア太平洋資料センター」理事の普川容子氏が世界貧困について、同二十四日は文化人類学者の波平恵美子氏が農と命について、それぞれ前原市蒲志の「ハーブガーデン　ブティール倶楽部」で講演する。

申し込みは、同大大学院芸術工学研究院の知足美加子助教＝092（553）4465、tomotari@design.kyushu-u.ac.jp

2008年5月27日西日本新聞（朝刊）

少人数ゼミ「命のあり方、尊さ食の連関」　（風土と芸術、地産地消）

2 年間の現代 GP の活動をまとめ、授業化しました。農学部の中司先生・中野先生との分担です。私は前半部分を担当し、「命」の概念を様々な視点からとらえ、豊かにすることを目指しました。

まず、世代を越えた時間と風土に意識をつなげるために「未来につづく道アートワークショップ第 2 弾」を行いました。学生それぞれの現在、未来、過去、先祖や次世代のイメージを色に置き換えて（抽象化して）木の立方体を彩りました。少し色あせた作品（→p.9）が、彼らの色でよみがえりました。

糸島地域の方がメンバーである「福岡交響サクスフォン四重奏団」による演奏会も行われました。美しい 4 つのサクスフォンの音色は、青空と緑と人の心をひとつにしていきました。ハーブティーや、クッキー、農園のハーブを使った美味しい昼食は、地産地消の心地よさを感じさせました。

その後、ハーブガーデン経営者・小島忠義氏（前原市議会議員）による講演がありました。開発事業に携わってきた小島氏は、52 歳から心機一転しスローフード（地域や文化を大切にする食のありかた）をめざしハーブガーデン構想を具現化していきました。「夢はかなう。人生は変えられる」という小島氏の言葉は、五感で農園を感じた学生たちに響きました。

風の薫り、時間のゆるやかさ、自分と向き合って作ること、大地の恩恵を身体で感じ、本当の豊かさの意味を考えた一日でした。（2009 年、知足）

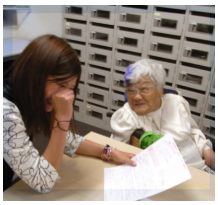
小島忠義氏講演

農園　音楽会

アート・ワークショップ

授業「命のあり方、尊さと食の連関」　（木村浩子氏講演会）

講師・木村浩子氏（72 才）は脳性麻痺をもつ画家です。沖縄とオーストラリアに民宿「土の宿」を経営し、平和と福祉の実現をめざしています。土はすべてを受け入れ、つなげていく。土の宿は、障がいをもつ人もそうでない人も、共にすごすことを大切にしています。「ほんとうの福祉とは、心と心のつながりから始まる」と、一言一言、絞り出すように全力で語りかける木村氏。受講者は驚くほどの集中力で、木村氏にむきあっていました。障がい者としての戦争体験など、数々の困難を越えた言葉はリアルに心に届くのです。それだけでなく、言いようのないあたたかさを彼女から感じている受講者は多かったです。市民大学受講生（地域の方々）からの質疑応答も活発でした。様々な経験を持つ人々が共に学ぶことで、想像の幅は広がり分かち合えることを改めて実感しました。（2009 年、知足）



木村浩子氏のドキュメント映画の一部を紹介

授業「命のあり方、尊さと食の連関」　（受講生による調査・発表）

少人数ゼミ「命のあり方命の概念を「つながり」という感覚でとらえなおし、命によりそう社会とは何かを学生たちは思索しました。風土や時間をテーマにした作品制作や、農園コンサート。スロー・フードの実践者、障がいをもつ当事者との出会い。目を背けたくなる社会問題に、学生達は心を開き、調査・発表を行いました。(テーマ : 世界貧困、環境問題、障がい者問題、先住民と文化、動物福祉）感じることから始まるリアルな「知」が、彼らに根を生やしていくにつれ、私の中の「未来」が鮮やかになっていくように感じました。（2009 年、知足）

受講生の感想

■ アート・ワークショップ、演奏会、小島忠義氏講演会

●アートワークショップでは、今まであまり考えてこなかった自分の祖先や子孫のことを考えることができて良い機会になりました。過去や未来を色や模様で表現するのは、なんだか哲学的でとても面白かったです。小島氏のお話では「あきらめずにやっていれば夢が叶うことの素晴らしさを目や耳で感じられ、いい経験になりました。

●いつの間にかルーティン化してしまった生活の中で、忘れかけていたものを思い出すことができたような気がします。「今」「自分」はこれまで、そしてこれからのあらゆるものがあって存在している。過去と未来の繋ぎ役でもあるんだな、ということをアートを通して感じました。緑いっぱいのハーブ園で、美しい演奏を聴き、心が安らぎました。愛情の反対は憎しみではなく無関心、と先生はおっしゃいます。現代社会の様々な社会問題（途上国との関係など）もこれが一番の原因なのだと思います。人はもちろん、自然や動物などあらゆるものに関心を持ってつながっていく。そう意識すればよりよい世界になっていくのかもしれません。

小島さんの「食が人間形成に深く関連していること」「日本に合ったスローフードの形を探す必要がある」というご意見に心から賛同します。夢を諦めずに繋ぎあげたこのハーブガーデンに「いること自体が幸せだ」とおっしゃっていた小島さん。これ以上の幸せはないと思います。知足先生が「贅沢はお金で買うものではなく、感じるもの」とおっしゃっていましたが、私も身近な幸せを感じていきたい。いろいろな命の上に、今の自分の命があるということを常に胸に留めて、感謝の心に満たされて毎日を送りたいです。とても有意義な一日でした。

●屋外で絵の具を使って描いたことは素直に楽しかった。早めに仕上げて演奏をもっとしっかり聴きたかった。現在迷っていることがあるが小島さんの話を聞いて、とりあえず行動しようと思った。

●自分は美術が苦手だったのですが、未来の自分や過去の自分を想像すると、意外にイメージが湧いてきて楽しかったです。また（2年前彩色したものの）上に重ねて描いていくことで、つながりを感じました。小島さんのお話では50代で仕事を変える実行力や勇気を感じて、自分自身も勇気を得ることができました。スローフードについて、日本食が海外で注目されていますが、日本ではファーストフードなど他国の食文化によって軽んじられています。日本食をもっと大切にしたいと思いました。

●今日の野外授業で、ゆっくりとした、そして温かい時間を過ごせたことが本当にうれしかったです。毎日の「ギリギリ」で一生懸命になっている間に、あえて「ゆとり」の時間を過ごす必要性を感じました。今の自分を裏切らないような未来を作っていきたいです。「食の大切さ」について、これからもっと学んでいきたいです。

●暑くて大変だったけど、自分のことをいろいろと考えながら制作し、いい経験になったと思う。演奏もとてもきれいで、のんびりした時間を過ごせてよかった。バジルがとてもおいしかった。自分の力でこんなきれいなハーブガーデンを作られた小島さんは、本当にすごいと思った。私も自分の夢に向かってあきらめずに努力していきたい。

●今日の授業で小島さんのお話を聞けて、大変よかったです。聞いているうちに元気というか、何か目に見えない力を得たような気がします。自分の夢に向かって何をすればいいか悩んでいるところでした。「夢を実現したいという強い心を保ち続けることが大切だ」と小島さんから教わり勇気づけられました。地図をみて「一般の人はなかなか来ないだろうな」と思っていたら、たくさんの人がいて驚きました。行き方を聞いたコンビニでも、詳しくハーブ園のことを教えてもらい、地域の方々にここがよく知られていることがわかりました。このような場所をつくった小島さんはすごいと思いました。

●アートワークショップでは、中に手紙が入った箱に色を塗った。知らない方の作品だが、何か思いが伝わってくるようなつながりを感じた。ハーブ園を実際に作るまでの話はとてもためになった。風が気持ちよくて、空気もおいしい。本当に幸せな気持ちになれた。夢はあきらめなければ叶うというお話は、ずっと忘れないでいたい。

●高校に美術の授業がなかったので、久しぶりの雰囲気で楽しかったです。貴重なお時間ありがとうございました。パスタおいしかったです。

●木箱の彩色を通して、時間とともに朽ちていく寂しさ、そして受け継がれていく想いの大切さを学びました。現在や未来を色で表現することに戸惑いはありましたが、自分のもつ色のイメージで描くことにしました。小島さんのお話で、反対を受けてでも自分のやりたいことを実行する勇気が、私にもほしいと思いました。年をとっても新しいことは始められる、そのことを実行した小島さんはすごい方です。

●木に自分の好きな色を塗ったことで、私が今ここに来ているという証を残せてうれしかったです。ハーブもバジルもおいしかったです。私はまだ夢を持っていないのですが、小島さんのように自分のやりたいことを仕事にできる人をみると、本当に憧れますし、うらやましいです。

●地産地消って本当にいいな、とパスタを食べて思いました。旬のものを食べられるし、新鮮だし、体にいいし。そして何より感謝の気持ちが普段より大きかったです。食関係の仕事につきたいので、今日は本当にいい経験でした。

受講生の感想

■ 木村浩子氏講演会

●大学で最も得ることが多い授業でした。知識面だけでなく、心の栄養としての元気をいただきました。福祉というと、何かをしてあげなくてはならない。それが親切なのだ、と私は思っていましたが、それが変わりました。「福祉とは一緒に素直に生活していくことなのだ」と。当たり前だけど、なぜ気づかなかったのだろう。心に大きな収穫がありました。本当に出会いに感謝です。

●胸がいっぱいになりました。木村さん、そしてこのような機会を設けてくださった先生方に本当に感謝します。「障害はその人個人にあるのではなく、社会にあるもの」という言葉を思い出しました。正直、普段の自分の生活では、障害のある方々と触れ合う機会も「障害」について考えることも忘れています。もしかしたら現代社会は、そのような障害の壁があることさえ見えなくしているのかもしれません。

●今まで「福祉」といえば、制度や法律ばかりを考えていましたが、それ以上に大切なことは心で語ることだと知りました。「相手の痛み、苦しさを自分のことのように感じ、心の中で受け止めること」「たまたま障害があったわけです」「大切な命を授かった同じ人間」木村さんの言葉が胸に響きます。人の生きる力をとても感じました。今日からの自分の人生の励みになりました。様々な苦労や経験をなさった木村さんだからこそ、このようなお話ができ、私たちの胸に響かせることができたのだと思います。

●戦争時に障害を持った方の体験など、普段表立って伝えられないお話を聞くことができ、とてもよい時間を過ごせました。木村さんの「本当の福祉は心でしか語れない」という言葉を聞きました。「土の宿」の映像をみて、本当に心でつながっている感じがしました。不自由なく動ける人と、障害をもった方とが、何も特別に考えることなく自然に一緒に過ごしている姿をみて、「心の福祉」とはこのようなことかと思いました。また木村さんが力強く一言一言はなされる姿は、そのまま心に響いてきました。いつかきっと土の宿を訪れてみたいと思います

●木村さんのお話をきけて、すごくあたたかい気持ちになれました。それは、木村さんがもつ力強さだったり、思いの強さだったり、経験であり、笑顔だったと思います。戦争の経験や差別を乗り越えて、そしてすてきな仲間と土の宿を作られたこと、いろいろな面で学ばせていただきました。本当にありがとうございます。

●戦時中に障害を持った子供たちが「足手まといになるから殺せ」といわれたこと。そのような話の実際をもっと掘り下げていきたい。

●「沖縄には“かわいそう”という言葉はない」ということ「福祉とは他人の心の痛みを、自分の心の痛みとして感じること」という木村さんのお話が印象的でした。土の宿も実際に障害のある方の暮らしにやさしい作りですばらしかったです。ただそれだけでなく一緒に生活する人の空気がとてもやさしくて、何度でもいってみたいと思いました。

●発表（学生グループの）に関しては言いたいことがあまり言えませんでしたが、調べることで様々な視野が広がり、楽しかったです。木村浩子さんは、必死に、全力で、心から、伝えたいことを話されていたので、その姿に感動しました。木村さんがおっしゃっていたこと一つ一つが“リアル”なのです。たとえ話し方がゆっくりで、聞き取りにくかったとしても、直に私たちの胸に木村さんの思いが伝わってくるんですよね。すばらしい方だと思います。おしゃれで、髪もかわいい。いききとしていらっしゃって、とてもうらやましく感じられました。これからも、もっともっと木村さんらしいやりかたで、問題を訴えていってほしいです。

●命は大事である、という当たり前のことを、命の危険に会った方からいわれ、それが真実であると改めて感じました。

●土地柄というものの力はすごいのだな、と思った。沖縄は海や食べ物で良いイメージでいっぱいのところ。そして何より人がいい。本当に行きたくなりました。一方で沖縄は過去の戦争においても知られているところ。沖縄に行くということは。それらに無関心ではいられない。

●「本当の福祉とは、人間の心を通してしか語れない」という言葉に、ハッとさせられました。普段福祉について考える際、私は法律や施設の充実の必要性を考えていましたが、この言葉で最も大切な人と人のつながりを知りました。私は災害や福祉の現場で活躍するロボットの研究をしたいと思っています。介護ロボットのニュースをみて「これだ」と思っていましたが、今回のお話を聞いて、もっと考えなければならないと感じました。木村さんのお話は一言一句に力を感じました。話の中に何か強い光のようなものを感じました。年を重ねた時に、木村さんのような力強い話ができるように生きていきたいと思いました。

受講生の感想

■ 受講生による調査・発表

●他のグループの発表や自分たちの調査を通じて、自分はいかに世の中の真実について知らないか、を知った。強く記憶に残ったのは、先住民についての発表で「実際にアイヌの人々に会ってみることが大切」ということである。例えば、私は本やネットで環境問題について知った。しかし、それは単に知識であり、実際に当事者に会わなければならないと思った。どのグループもよく調べていて、よくまとめられており、よく考えていた。非常に質の高い授業を受けることができてよかった。先生、ためになる授業をしていただいてありがとうございました。

●命と一言にいっても様々な問題がつきまとっていることを聞くのは、決していい気分でないこともあったけど、それでも知ることができたのは嬉しく、このセミナーを選んでよかったと思いました。環境に関しても他国を責めることができないようなことを、日本も行ってきました。しかし何もしないまま問題は解決するはずもないので、解決策をどこかでみつけなくてはいけません。正直、人であれ（少年兵の問題）動物であれ「殺される」という事態に関わるのは辛く、調べたくないとも思いました。でもここで逃げたら私はただの偽善者だ、と思い、自分にむち打って調査しました。みんなに問題を知らせることができ、ホッとしたと同時に嬉しく思います。

●動物福祉の話を聞いて、保健所から一般譲渡会でもらった私のペットも、５日で殺処分される可能性があったかと思うと、すごく悲しくなりました。あるメディアで取り上げられた犬には、飼育希望者が殺到したと聞きましたが、本当に人はマスコミに流されやすく、エゴの固まりだと思います。本当に助けが必要な動物はたくさんいるのに、なぜそちらには目を向けないのでしょう。それくらい難しい問題なのでしょうが。犬は私たちに飼われて幸せなのだろうか、とたまに思います。

●リサイクルの話が私にとっては衝撃的でした。今まで、レジ袋を断ったり、ペットボトルをリサイクルしたりして、いいことをした気になっていました。本当にしなくてはいけないことは、ものを大切にすることなど、もっと身近なことなのだな、と思いました。保健所の話もショックでした。私たちの生活があるのは、たくさんの“動物”の犠牲のおかげで、そのことは絶対に忘れてはいけないと思いました。

●無意識のうちに自分たち人間のことだけ、豊かな国に住んでいる人々のことだけ、日本人のことだけ考えて生

きているとしたら、それは恐ろしいことだと思います。いろいろと自分のことを見直せて、とてもいい機会になりました。

●全ての問題が繋がっているようで、いろいろな視点から問題をみていくことの重大さがわかった。何気なく生きている今の生活も、何かの上に成り立っている、ということを深く考えさせられる発表だった。一人一人が今の生活について考えることが、世界で起こっている問題の解決に繋がっているような気がして、自分も何かできるかもしれない、と勇気づけられた。

●どの発表も新鮮だった。既成概念をそのまま受け入れて発表するのではなく、新たな視点から見つめているところがすごいな、と思った。今、世間に出回っている考え方は正しいものもあるだろうが、間違っていることもあるはず。そのためには少数でも声をあげなくては、と思う。何が真実かを自分なりの視点から考えること、ともかく知ることが大切、それに気づかされた授業だった。

●非常に難しかった。どうしたらいいのか、わからないことばかりだった。ただ表面的な独善だけはだめだろうと考えた。問題提起までは、ある意味簡単だ。その次の一歩を踏み出さなくてはならないはず。忘れがちになってしまう問題に、再び目を向けられたことに感謝したい。

●リサイクルの話は聞いていて楽しかった。動物福祉と少年兵問題の根本は同じような気がする。

●アイヌ文化に関しては高校時代に学んでいたのですが、この発表は「知ること」が大切と言っていたので、自分自身で調べたいと思いました。またリサイクルの問題は知らないことが多く、エコとうたわれていることの本質がエコではない事実に驚きました。様々な発表を聞き、簡単に答えがでないことばかりで、葛藤の連続でした。普段は考えもしないことばかりでしたが、自分の将来にきっと繋がると思います。

●私は動物実験についての発表にショックを受けました。理学部生物学科なので、学科内に動物実験を行う人が出てくるかと思うと、複雑な気持ちになります。クラスメイトも、化粧品のためのウサギの動物実験について知らない人が多かったです。動物と虫の命の重さの違いはどうなのでしょう。食肉用の動物の権利を考えても、私はベジタリアンにはなれないと思います。動物実験には、きれいになりたい、長生きがしたいという人間の欲求が現れています。やはり先住民問題においても共通しますが、大切なことは「事実を知る」ということです。

●今回の発表は新たな知識を多く与えてもらい、とても価値あるものでした。一番考えさせられたのは動物福祉でしょうか。映画「猿の惑星」を思い出しました。私たちは今、動物たちを自分たちよりも劣っているとみなし、利用して殺しています。もし逆の立場だったらどうなのでしょう。私たちは自分の身に苦痛が与えられない限り、真の理解はできないのです。人間の進化は動物の苦しみの上にしか成り立たないものなのでしょうか？人は動物との付き合い方を、これからも模索していく必要があるでしょう。今回の授業を通して、命に大して新しい考え方が得られ、本当によかったです。ありがとうございました。

●どの問題も複雑に絡み合っていて、一筋縄では解決に向かいません。本質や真実が見えにくくされている社会構造。自分は何ができるだろうかと考えます。「現状を知り、それについて考え、どんなに小さなことでも良いから行動する」ということが、現段階での私の答えです。物質的に恵まれた日本に住む私たちには、3秒に1人の子供が飢餓で命を落としているという現実が遠く感じられます。同じ地球に生まれてきているのに、その時代、国、地域、家庭の状況によって大部分の人生が決められてしまうのです。まず学び、考えることが、先進国に住む私たちの使命です。

命の重み尊さを知れば「多くの命の犠牲の上に、今この瞬間の自分が生かされている」ことを身体で“感じる”ことができれば、全ての命も、自分の命も簡単に扱うことはできないと思います。自他の命の尊さを知り、大切にしていけるような世の中になれば、現在の世界的社会問題も良い方向に向かうのではないしょうか。社会や世界を作っていくのは人間です。だからこそ「命の尊さ」を知った人間性の高い人々が増えれば、きっと世界は変わっていくと思います。知足先生の授業を通して、このようなことを学びました。将来の夢に繋がる「学び」でした。本当にありがとうございました。

未来につづく道ワークショップ１

風土の空間や時間軸の中で、今の自分がどこに立っているのか再確認してもらうワークショップです。生命を育む土を意識しながら、歩く速度で物事を感じ行動することの大切さに気づくことを目的としています。

木のキューブに彩色します。上面は今の自分、東面は未来の自分、西面は過去の自分、北面は（親を含む）先祖との繋がり、南面は次世代との繋がりとします。中には､その土地の記憶や思いを記した｢場への手紙｣をおさめます。

作品をハーブガーデン・プティール倶楽部の散策路わきに設置します。筑紫富士と呼ばれる可也山に散策路は向かっています。道の最初には、木と鉄で作られた彫刻（知足・作）をおきます。を配置する。これは生命活動と工業化社会が調和することを願うものです。また芸術作品に触れながら感じるという鑑賞教育も兼ねています。

土地の息吹を感じながら、未来に向かう新たな道をゆったりと歩いていく次世代がイメージを、参加者は共有しました。（2007 年、知足）

彫刻作品の搬入

触れて鑑賞しています

木のキューブづくり

作品内に手紙をいれ、散策路に沿って設置します

東風小学校の子供たち、地域の方々、学生たちで車座に

可也山にむかう「未来につづく道」

Design the Earth （学生たちのアート・ワークショップ）

世界地図をかたどったキャンドルが、水槽に浮かびます。そのひとつひとつの炎は世界で起きている社会問題（環境破壊・エネルギー問題・貧困など）つまり「崩壊」の暗示です。（このキャンドルはパラフィンで作っています。パラフィンの原料は石油です）

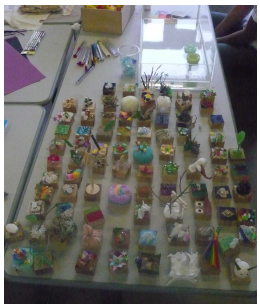
その崩壊を阻止するのは私たち一人一人です。

参加者はキャンドルのひとつを選び、その炎を消すという行為をします。そして、キャンドルを取り除いた部分に（事前のワークショップで制作された）木のブロックを置きます。このブロックは自然からの拾得物などで装飾されています。木のブロックは「風土」を、置きかえる行為は「再生」を象徴しています。

最後に参加してくださった方に、私たちから苗をプレゼント致します。この苗は「意識の持続」「未来へ命を受け継ぐこと」を願う私たちの気持ちが込められています。

2008 年、九州大学芸術工学部学生
（池浦和彦、今坂公昭、河津佳孝、松島優、山内賢幸）

「風土」をイメージした木のブロック制作



参加者に配布した麦の苗

300 個のキャンドルを作っています。
材料のパラフィン（原料は石油）です。

アクリル板で作った水槽に、キャンドルを地図の形に並べます。

制作中のメンバー

ポスター

普川容子氏講演会参加者に、キャンドルと木のブロックを置き換えてもらいます。

Design the Earth 展示風景

波平恵美子 （文化人類学者）

「農と命に関する文化人類学的考察」

本講演会は、波平氏の弛まぬ調査研究と鋭い洞察によって、「農」の概念に新しい光をあてるものとなった。

人類にとって農業の登場は非常に画期的であった。狩猟採集から農業中心の生活に移行することによって、人類は「予定する」「予測する」といった思考を獲得することになった。つまり先を考えて今を生きる思考及び行動パターンは、農業が人類に与えたものである。農業はより多くの勤労、高度な計画性・研究を求め、この方向性が工業化社会の基盤を形成した。縄文時代であっても初歩的な農業は行われていた。弥生期に農業が大規模になるに伴い、政治的命令系統や組織化が生じた。

波平氏は明治 20 年代の農業についても聞き取り調査を行っている。この頃まで江戸時代の高度な農業技術（品種改良、病虫害駆除等）が残っていたという。

日本の農業にとって最も大きな打撃は天災ではなく「工業立国に転換したこと」であった。工業化が与えたダメージとして、まず日本人の世界観（生命観）が変化したことがあげられる。死（枯）と再生（発芽）が展開する農地が減少したことで、日本人は死と生を感得することが難しくなった。生命観を基本とする生活文化を失ったのである。また土壌が軽視されるようになった。以前は土をなめて状態を確かめるほどだったが、機械化によって日本人は土そのものに触らなくなった。さらに市場経済の急速な価格変動は、農業の時間軸とは噛み合わず悲劇的な結果をもたらす。

しかし波平氏は、日本はその風土と栽培品種の多さから、農業従事者が絶えることはないであろうと言う。農業は死と再生を一体化させてくれる。自らの人生を越えたタイムスパンを具現化し、身体化するのが農業なのである。日本人にとって重要な農業を活性化するためには１）中間マージンをいかに少なくするか、２）農機にかけるコストをいかに下げるか（農機に費用がかかり過ぎる現状の改善）という点を考慮しなくてはならない。

質疑応答の中で再度マウント・ハーゲン・ガーデンのことがとりあげられ、「人間は人間がいないと寂しい、という考えはいかに貧しいか。彼女達は決して孤独ではありません。いつでも土と話していると考えられます。」と波平氏は語った。土は死を含有しながら命を生み出していく。土と対話し向き合うことを忘れるならば、人間は自らの命への洞察を失うのではないか。波平氏の言葉のひとつひとつが、大きな問いかけとなって私の心に刺さった。（知足）

2008 年 10 月 24 日

講演後、 参加者に麦の苗を配布（→p.00 Design the Earth ）

みなさん、こんばんは。波平恵美子 と申します。

私は九州芸術工科大学（現・九州大学芸術工学部）に 18 年間在職させていただきました。その前に、実は 6 年間非常勤講師でしたので、24 年間九州芸術工科大学とはご縁があったのです（その後、お茶の水女子大学勤務）。そこを辞めて 10 年半経ちましたけれども、芸術工学部と九州大学農学部との連携のプロジェクトに参加させていただく機会を与えてくださいました知足先生、それから諸先生方、本当にありがとうございます。そして、また何よりもこういう素晴らしいロケーション（ハーブガーデン）で、随分いろいろないい香りがしていますけれども、こんなすてきな雰囲気の中で話をさせていただいくことをありがたいと思います。今日は、与えられた 1 時間ほどの時間を 3 つにわけてお話しをさせていただきます。

人類にとって - 人間にとってと言ってもいいのですが - 人間という場合と人類という場合、文化人類学では慣習的に使い分けております。類人猿などという言葉を使いますように人間の生物的な面、つまり猿あるいはほ乳類などと隔絶した存在ではなく連続した存在であることを強調する場合に「人類」という言葉を使います。一方、猿だとかほかのほ乳類と絶対的に違う存在、つまり文化を持った唯一の生き物であるということを強調するときに「人間」というふうに言葉を使い分けます。60 分を 3 つに分け、最初の 20 分をパート 1 として「人類にとって農業とは」という話をいたします。

私は昭和 39 年（1964 年）から農山漁村の調査をしておりまして、現在でも調査を続けております。1964 年頃に生きておられた方たちからお話しを伺うことができました。直接の体験として伺った日本の農業といいますと、時代的には明治 20 年代の話になります。かつての日本の農業がどうであったのかということ。特に 1950 年代、工業生産が日本の中で大きく割合を占めることになり、産業構造がすっかり変わってしまってから今日までの農業の話。これがパート 2 です。つまり「かつての農業と現在の農業が、基本的にどういうふうに変わってきたのか」ということです。

それから、パート 3。これが一番重要なことですけれども、現在ほとんどの人が農業と関わらなくなってしまいました。農業というのはイメージであったり、自分が食べている食の安全であったりします。今は円高だから小麦の値段が安いけれど、つい最近までは円安で小麦の値段が非常に高騰し日本のパン食とか麺食というのはどうなるのだろう、などということを心配していました。そのくらいのことしか農業のことに関心を持たなくなった私たちが、今後農業というものから何を学ぶのか。これが主眼なのですが「農業というものをどんなふうに知ったり、考えたり、農業からどんなふうに未来を私たちが得るのか」。農業からしか私たちは未来を得ることができないというのが私の考えなのですけれども、そうしたことをパート 3 でお話ししてみたいと思います。なるべく、皆様方のご感想とか、ご質問とか、ここには農業のご専門の方たちがいらっしゃいますので「違うよ、それ、波平くん」と言っていただければ、今日、私は大変な収穫があることになるわけです。そのような構成にしたいと思います。

人類にとっての農業とは

これはどんなデータから話しているのかと言いますと、1 つは、考古学資料です。もう 1 つは本当にわずかなのですけれども、採取狩猟民が農耕するようになって

いくプロセスが文化人類学では観察されております。そのほんの一部ですけれども、私は 1984 年にパプアニューギニアを調査しました。パプアニューギニアの一部は当時、農業と採取狩猟の中間的な状態にありました。農業でもない、採取狩猟でもない、その中間のところで、いったい人はどんなふうに食料を得ているのか。おそらく縄文後期の人たちや、今から５～６万年前の人たちは、こういうふうにして農業を始めたのではないのかというものを見ることができます。そのようなデータから、人類にとって農業とはという話をしたいと思います。

人類にとって農業とは。これは画期的であったということは文化人類学の本にも、歴史の本にも書いております。ただ残念なことにこれらの本において「人間にとって画期的であった」というときにイメージされているものは灌漑用水を使った農業なのです。つまり、非常に組織化された労働力、あるいは命令系統、政治権力が成立した中での農業のことをいっているようです。けれども、農業のはじめはそうではありません。天水を使って灌漑用水とする場合もありました。かつて下から上まで千枚あるとかつていわれた山口県の大棚田地帯を調査したとき、観察すると、棚田とワラ束・板切れなどで天水の灌漑利用を可能にしていました。そうした非常に初歩的な灌漑用水もあることを考えますと、農業というのは何万年もかけて徐々に徐々に発達したものであった、ということが分かります。

非常に初歩的な農業であれ、中国あるいは古代エジプトで見られるような大灌漑設備を持った農業であれ、人類にとって大きな意味は何かといいますと、それは予定を立てることが必要である、予測をすることが極めて必要であるということ。そして、先のことを考えて今やるべきことを決める。これは、私たちの今の生き方そっくりなのです。つまり、今何をしなければいけないのかというのは、今やりたいことをやっているわけではないということです。それは 1 時間後、あるいは 1 年後、あるいは 10 年後のことなのか分かりませんけれども、多くの場合私たちが今やることというのは、先々のことから逆算して決めています。これは、何でもないことのように思いますけれども、決してそうではありません。これは農業と共に人間が - 決して本能ではないのですけれども - 本能といっていいほど文化を発達させると共に、人類から人間になっていくプロセスの中で獲得した能力でもあるし、癖でもあるし、業といっていいのかもしれません。つまり、何度も繰り返しますけれども「今何をやるのか」ということを決めるときに「今本当に何がやりたいのか」ということを自分に問うてみるというのではなく「何かのために」決める。その何かのためにというのは時間的には将来のためになのです。遠い将来のこともあるし、1 時間後のこともあるかも分かりません。これは農業と共に獲得した能力でもあるし、人類の苦労の種でもあったろうと思うのです。それはなぜなのかと言いますと、農業という行為は、品種というものを選んで、来年はこの種は使うまい、これだけを選んで苗を得て、育てて、実を取ろうとか。今のうちに草を抜いておかないとよく育たないだろうとか、あるいは、今のうちに間引いておかないと、という計画を立て行動の予測をし、逆算しながら今の自分の行動、行為、あるいは労力の配分を案配していく行為なのです。これは農業を通して染み込んでしまった人間の行動パターンであり、思考のパターンなのです。これが人間と農業、人類にとって、人類が生物学的なもの、動物的なものを次第に遠ざけていく発端であったろうと思います。非常に初歩的な農業を行う場合もそうしたことを考えるわけです。

例えば、パプアニューギニアという所はとても不思議な所で、高いところで2000mを越えるところまで人が住んでおり、下は海抜10メートルかその程度の低地に住んでいます。山の上に行くほど、農業が非常に進んでいます。文化人類学では高地の農地のことをマウント・ハーゲン・ガーデンという呼び方をします。農地はフィールズというのですが、英語でわざわざガーデンというのです。パプアニューギニアのものをたくさん読んでも必ずガーデンと出てくるので、なぜなのだろうと思っていました。1984年に行ってみますと、まさにそれは庭なのです。雑草1本生えていません。見事に栽培植物を、ランの好きな人がランを育てるようにといいましょうか、ここ（講演会場）はりっぱなハーブガーデンですがあんなふうに農業をやっているのです。女性だけが農業をやるのですが、女性にとって自分の農地というのは自分のすべてなのです。それをきれいに囲いまして、自分の世界をそこにつくるのです。小屋がけをして、2日も3日も畑で働く。畑で働いている時が自分の世界であり、自分の時間であり、その人のプライドのすべてがかかっているような、それはもう見事なものなのです。ところが、低地の熱帯雨林に来ますと、そこでは非常に初歩的な農業が行われています。バナナなどの野生のものの中の特に育ちのいいものだけを選んで、周りの草を取るだけなのです。見慣れないと、どこをどう農地にしているのか分かりません。しかしよく見ると、野生のバナナの中で特によく育っているものがあり、その下を見れば確かに草がない。そのくらいの農業なのです。本当にわずかな労力しか使いません。いい品種を選ぼうとか、来年はもっとここに肥料をやって、とかいうことはやりません。恐らく人間が農業を始めるときもそうであったでしょう。ただし、どんな初歩的な、貧弱な農業をやろうと、いったん農業をやり始めるとどういうことが起きるのかというと、人口が増えるのです。その人口が増えるということが、農業をより高度なもの、より規模の大きいもの、ある時期が来ると確実に一定の食料が手に入るように、より計画的に行うようになります。この循環系が起きてくるのです。

それをよく見いだすことができるのは、日本ではブッシュマンという名で知られている人たちです。カラハリ砂漠にほんの数十年前まで20～30人のグループで採取狩猟をしていた人たちが、政府の方針で定住して、農耕するようにと強制され、農耕するようになって変化をたどるようになります。その変化をつぶさに見ることができるのです。そうすると、人口が爆発的に増えます。カラハリ砂漠のクンと呼ばれる人々と数十年間一緒に住んでいるアメリカの人類学者がいます。その人の詳細な記録によりますと、採取狩猟をしている時代、クンの人々は4時間ぐらいしか労働しませんでした。それ以外の時間は何をしているのかというと、彼らは詩人であり、音楽家でもありますので、例えば星についての詩だとか、たくさんの詩を作っているのです。非常に単純な楽器。弓なのですけれども、自分の弓の弦を楽器にしているのですが、限りなくたくさんの詩を作り、たくさんの即興の歌を歌って過ごすというような生活。ところが、農耕になった途端に、同じ人々、同じグループが働くようになる。というか、働かないと農業はやっていけないのです。農業をやったことのない人々ですから、必ず十分な収穫があるとは限りませんので、政府の配給の食糧もありますが、それでも農業を始めた途端に、労働時間が倍ぐらいになってしまうのです。こうしたことを恐らく人間は長い間にわたって、徐々に、徐々に、変な言い方ですけれど文化が進んでいったということもできます。忙しい生活。そして、今やりたいことは何なのかという

と、常に未来を取り込んだ、将来の時間を取り込んだこと。そういう人生を送るようになったと。そして、さまざまな美しいものや巨大なものを作る技術だとか、生まれた赤ちゃんはほとんど育つとか、平均寿命が 80 年とか、そういう結果を手に入れることができました。良い、悪いということは文化人類学では断定しません。「こうでした」ということで、あとはみんなで判断しましょうということなのです。このようなことは、工業生産社会になりますと、もっと計画的になります。しかもそれがワンシーズンなどではありません。金融市場では、とにかく秒単位と言ってもいいくらい刻々と株価や為替市場の数字が出てきまして、どこでボタンを押すのかということで大きな得をするか損をするかということになります。まさに秒の単位で金銭価値が生まれてくるような、そんな時代なのです。歴史は決して後戻りをすることがありません。後戻りをさせる方法があれば、選択的に後戻りをさせたいようなことはたくさんありますけれども、歴史というものは後戻りはできない。けれども、歴史から学ぶことはできるわけです。これは、決して忘れてはならないことなのです。

NHK スペシャルで、最近非常に面白い番組を放映していました。それは、文字を読むことができない症状を持った人の話です。文字を読むことができないとはどういうことなのだろう。ごく一部なのですが、その人たちはものすごい努力をして文字を読んでいるのです。普通の努力ではとても文字は読めない。文字が読めないということはどういうことかというと、目が見えないわけではありません。NHK スペシャルの請け売りなのですが、部分的にだんだんと脳の機能が分かってきており、私たちが言葉をどういうふうに理解しているのかがわかってきました。脳は未だに「音」で理解しているというのです。言葉を音でしか理解していない。なぜ、文字を見て私たちが言葉を理解するのかというと、ここが非常に複雑なことなのですが、私たちは文字を見ると、それを一度、脳の中で音に変えているのだそうです。口に出さないだけで、音で認識している。そして言葉として理解する。文字というのは目から入る情報ですね。目から入った情報というのがそのまま文字として理解されているのではなく音として変換し、それが言語野と呼ばれる脳のところで言語として理解する。文字が読解できない症状の人たちは何に問題があるのかというと、文字が入ってきたときにその文字を音に変える所が非常に未発達というか、眠った状態になっているらしい。

人間は言葉を話す動物、言葉を理解し、言葉を話す動物ですが、恐らく言葉を獲得するまでに 10 万年ぐらいはかかっていると思うのです。しかし一般の人々が文字を読みそれを言語情報とするようになって、まだ数千年か、所によっては数百年なのです。私たちは人間の文化とはといいますけれども、人間の文化というのは、本当にテーブルの上に積もったほこりのようなもので、ふっと払ったらなくなるようなもの。その意味では、将来を見据えてしか今の行動がとれないなどというのは、恐らくこのテーブルで言うとこの木組みぐらいまでは行くのかもしれません。私たちが人類という場合、これもだんだんとより正確なっていくでしょうが 10 万年前からというと、あまり反対する人はいないだろうと思います。そして、その中で非常に初歩的な農業をするようになって 1 万年ちょっと。2 万年まではいかない。そうすると、私たちが人類から人間へとなっていく中で、農業というものは大変大きな意味を持ったビックな出来事であったことは確かなのです。

かつての農業と現在の農業

つい長々としゃべりましたが、パート 2 に無理矢理行きます。縄文時代というのが採取狩猟だけやっていたといわれていました。しかし縄文の遺跡がどんどん出てくるようになり、分析技術が進んできたということの方が大きいのかもしれませんが、明らかになったことがあります。それは「非常に初歩的な農業をやってきたことはまず間違いない」ということです。そうでなければ、いったいなぜあれほどまでに急速に、縄文から弥生文化になっていったのかということがよく分かりません。地域にもよりますけれども、恐らく縄文後期には、パプアニューギニアで見ることができた初歩的な農業をやっていたのです。その辺の草を取って生育のいいものだけを大事に育て、それが枯れようとすると川から水を汲んできて水をやるくらいの農業。そうしたことは、やっていたにまず間違いないだろうと。農業はこうした長い歴史をもっています。

明治 20 年代といいますと、皆さん方学生さんにとっては、昔、昔の大昔で「日本昔ばなし」の世界のように思われるかもしれませんけれども、私はその頃をまだ記憶をしている人たちに何十人もお会いしています。私にとっては「日本昔ばなし」でも何でもないのです。それは、かなりリアリティのある話なのです。明治 20 年代の農業というと、今から考えますと非常に遅れた農業のようでありますが、基本的には明治 20 年代も日本の江戸時代の農業をやっておりました。その江戸時代の農業というのはおそろしく進んだ農業だったのです。何が進んでいたのかといいますと、一つには非常によく品種改良を行っていたということです。それから、これは本当にわずかなことしかできませんでしたが、病虫害を駆除するための技術も研究されています。例えば、文書の中に藩が鯨油を何百樽も買っているというものがあります。その樽は小さなものではなくて「しと樽（4 斗樽）」といいまして、 1 斗は 18 リッターですからそれの 4 倍です。藩がその 4 斗樽で何百樽も買っているのです。それも随分遠くから船で運んで買っています。大変高価なものだったのですけれども、その鯨の脂はうんかの排除に用いられました。うんかというのは米にとって致命的な害虫なのです。うんかが発生したときに鯨油を田の水の上にまくのです。そうしますと、その上にうんかがぽとぽとと落ちてくる。栽培法について肥料について等、農業に関する書物がどれほど書かれていたのかというのと、それは驚くほどなのです。研究したものはその土地だけどれほどたくさんので、あるいはその藩だけで限定されるのではなくて、あっと言う間に全国に版木で刷られて行き渡ることがありました。逆にその藩で非常に大事にしているものは藩の外に出さないといった種の管理までやっていたわけです。

日本の農業のもう一つの特徴は、今でもそうですけれども、バリエーションが非常に豊富なのです。例えば付加価値を農業につけようということで、もう何十年も作られていない品種を探し出して商品化した作物は数倍の値段で売られようになっています。このように日本の農業は、地域限定の品種をたくさん持っているのです。これはたまたまできたというより、大事に育てていたということです。こうした農業を明治 20 年頃はそのまま継いでいました。昔は農業は勘に頼ってやっていた、という考えをまず捨てていただきたいのです。実は江戸時代末期から、日本は台湾や朝鮮半島から米を買っているのです。何も今に始まったことではありません。例えば、江戸奉行所が米を買ってよろしいでしょうかと伺いをた

てた文書があるのですけれども、そのように「外国からの米を買って日本の米と競合させないようにするにはどうしたらいいのか」など、今の農業と基本的には同じような問題を抱えながら解決していったのです。いってみれば、常に頭を使い、常に努力をしていました。そういう農業をやっていたということなのです。しかしながら日本の農業にとって何がいちばん問題であったのかといいますと、冷害とか、あるいは噴火とか、あるいはうんかの害とかということではありません。日本の農民たちは、それらのことは必ずそこで工夫して、研究して、努力次第で何としても元のレベルに戻していったのです。

どうしようもない日本の農業の大打撃は何であったのかというと、日本が工業立国になったことなのです。工業立国になろうと国全体、特に施政者が考えたのは、よくいわれるように日露戦争の頃からです。つまり今の新日鉄である昔の八幡製鉄所を造ったときだと、皆さん方は中学の歴史などで習ったかもしれません。それ以前から移行はあったわけですが。軽工業から重工業へと産業の中心が変わっていきます。しかしながら、本当に日本が工業立国になったのは 1930 年代、つまり日中戦争が始まるころです。これは農民の数からしても、特に農業を支えていたいわゆる篤農家、あるいは豪農と呼ばれる人々が存立できなくなったころだと考えられています。豪農とか庄屋とか、あるいは大地主ということばを聞くと、ひたすら搾取する人々のように考えられています。しかしながら今まで眠っていたか、あるいは無視されていたか。その人たちが日本の農業のレベルを上げていくために、どれほど私財を投じていたかは驚くほどなのです。そういう地主たちを 1930 年ごろから日本政府は徹底して地主として農業で財産を保持できないような政策をとり、たたくようになるのです。そして、もはや自分たちが農業をやってこれまでのような家計を保てなくなったということで、大地主たちが次第に自分たちの資産を株に替えていくようになるのです。国債だとか株に替えていくようになる。そして、もともと農村から上がってきた利益は農村に返すという循環系が切れてしまったのです。日本の農業、もっとも日本にとって日本の国民、日本列島に住む人一人一人にとって重要であったはずの農業の冬の時代は、こうして日中戦争のころから始まったのです。徹底して日本政府は農業に対して、冷や飯を食わせたのです。そして、戦後の食糧不足のときに農家は少しばかり闇値で潤うことになりますが、それがあっという間に高度成長経済の中で相対的な地位を下げていきます。農村が本当に潤って「あぁ、農民でよかった、百姓をしていてよかった」と思ったのは戦後 5 年くらいだったというのですね。朝鮮戦争が始まった途端に、また農村は経済的にみて不調になっていくわけです。

農業から得られる未来

こうして、日本の農業はいじめ抜かれたというのが、私が農村の調査をして得た感想なのです。私が調査してきた農村のどういうところを見てきたのかといいますと、部分的な調査をしたのは、大分県の国東半島、熊本県の菊池平野、奄美諸島のさとうきび栽培、日田郡（現・日田市）前津江村および安来市郊外。それから、四国の高知県の幡多郡。本州にいって安来市郊外。山口県はほぼ全県です。そして統合的な調査を行ったのは、福島県の会津地方と新潟県の農山村を調査で回りました。いろいろなタイプの農村で、様々な農業が行われており、それぞれが多様な変化をしています。1964 年から今日までに、農村の何が変わったかといいますと、まず専業がなくなった。そして、専業農家がなくなったということ

はどういうことかと言うと、農業のプロがいなくなったのです。専業農家というのは、農業のプロなのですね。この方々たちと各県や市 - 公的にはほとんど県なのですけれども - 農場試験場の指導員の人たちがセットになって、それぞれの地域の農業を活性化もするし、よりレベルの高いものへと持っていった。その専業農家の中には、必ず「何とかの神様」と呼ばれる人たちがいるのですね。そういう人たちには県を越えて教えを請いに来るわけです。実際今でも「こしひかりの神様」みたいな名前で呼ばれている人もいました。「こしひかり」が自主流通米になって値段が上がったときに、この方は秋田におられる方だったのですが、会津地方の人たちはツアーを組んでこの方に会いに行きました。土作りのところから全部見せて「自分は秋田だけどあなたたちは会津なのだからこういうふうに作りなさい」というアドバイスを与えるだけではなくて、実際に作っているところをわざわざ会津まで見に来て「こういうふうにしたらいいんだ」なんていうことを言ってくれたのだそうです。そういう人たちが各地にいました。スイカ栽培の神様もいるわけですね。大根栽培の神様もいる。ネギ栽培の神様もいる。そういう人たちが、もういなくなりつつあるということなのです。専業農家がいなくなるというのは、いろいろな意味で日本の農業のダメージなのです。

もう一つは、生命観が変わってくるのですね。生命観というと、分かるような分からないような、私はむしろ世界観といったほうが話しやすいのですけれども。つまり、自分を取り巻いている世界というもの、それは自分の身体も含めているのです。自分というものは、実はあるようでないようなものなのですね。身体がなければ自分はないわけですけれども、では身体は自分なのかというと自分であるようなないような。つまり、身体は自分のものでありますけれども、常に客体化されるものでもあります。「右手を出してごらんなさい」と言ったら即座に右手を出せます。「額を触ってごらんなさい」と言ったら即座に額を触ることができる。なぜ、できるのでしょう。それは、私の身体は常に客体化されている。客観化されているからなのです。ところが、その命令を聞いて認識しているものが私なのかというと、残念なのですがそれは脳なのです。情報処理しているのは耳であり脳。脳も身体ですから、私という存在はあるようなないような非常に不思議なものです。脳の動きは自分では認識できません。しかしながら、それがもしできたら「あ、ここが働いた」「ここが働いた」ということが分かるかもしれない。私という存在は、そんな不思議な存在であります。自分の身体も含めて、この私という存在を取り囲んでいるものが何であるかということを認識し、その取り囲んでいるものとこの不思議なものである私との関係性をとらえる。とらえた結果が世界観なのです。

世界観は常に動きます。状況が変わると常に動きます。例えば、私はもうすぐ66歳ですけれども、学生の皆さん方のときの私と、66歳の私の身体はまるで違うわけですね。身体が違うということは、私は変わっているわけなのです。このように、状況というものは変わると、世界観もどんどん変わります。もちろん、新たにもたらされる情報によっても変化します。例えば、「地球は青かった」なんていう言葉が、なぜあれほどまでに衝撃をもって迎えられたか。皆さんがたにとっては衝撃でも何でもないでしょうけれども、これは初めて人工衛星から地球を見たガガーリンという旧ソ連の宇宙飛行士が地球に送った言葉なのです。宇宙から見たら、一体、地球はどんなふうに見えるのだろう、と人々は思っていました。

それまでだれも見たことがなかったのです。彼は人間として初めて見たわけです。そのときの言葉というのは、今聞くとまるで詩のような言葉ですけれども、当時の世界の人々は衝撃を受けたのです。「地球は青い」一体、真っ黒な空間の中に浮かんでいる真っ青な球体というのは、そしてその上に乗っている私というのは一体どんな存在だろうと思った途端に、それを想像しただけで世界観が変わったわけです。

こうして自分が直接体験しなくても新しい情報のたった一つのフレーズで変わるような、世界観とはそんなものなのですね。こうした世界観の中の一つが生命観。農業をやった人間と見るだけの人間とでは生命観は違うわけですが、以前はその幾らかは共有できたのです。しかし 1964 年から今日まで 44 年の間に、生命観は絶対的に違ってきました。人間が「死と再生」という観念を得たのは農業を通してであると考えられます。農業は人間の行動パターンというものの最も基本的なものを浸透させ、人間の関係というものを複雑にし、権力とか権力支配というものを徹底して人間に教え込んだ。これが、おそらく農業だろうと考えられます。その中で最も大事なものはおそらく生命観であり、生命観を基本とする世界観です。

そうしたことが、今の日本の農業では無理なのです。今の農業は、種は自分ではほとんど取らずに購入します。苗はほとんど自分では作りません。苗も買います。ですから、今まで生えていたものが種を落とし、地面に落ちて、つまり枯れるということは死ぬことだと。しかしその個体は死んだのだけれども、そこから残った何かが、再び全く違う生命のサイクルというものを作り出していくということを感得することはできないようになっているのです。もう 1 つは土壌なのです。機械化するということは、どういうことかというと、土に触らないということなのです。土というのはなめろと言うのですね。「土はなめて、味を見ろ」と言われていました。本当に肥料がよく効いたかどうか、酸性土壌になっていないかどうか。ちょっとこれは有機肥料を入れないと、とか。私が農村に行ったときには化学肥料を使っていましたから、この化学肥料はよくないとかいうのをみんななめて覚えるのです。それから、田んぼは裸足で入りますので、粘りけといいましょうか、足を踏み込んだときのぬるっとした感じ。これくらい水を張っていて、この温度なのに足首がここまでしか入らないからもう一度代かき、粗起こしをやるかとか。まだちょっと水が冷たいから土の状態がよくないとか。土壌の状態が常に農業生産を支配するということ、収穫を支配するということがよく分かっていたのです。しかし今は水耕栽培のほうが清潔で管理化されて非常にいいということになっています。アグリビジネスでやっている人たちの言葉で代表されるような、まさにアグリカルチャーなのです。非常に人工化された農業になっております。

とはいえ、まだそんな農業をやっているのか、というような農業をやっている地域や人々もいることは確かなのです。いかに農業が人を育てるかとか、あるいは毎年人に怠るなとか。傲慢になるなとか、去年の経験は今年に使えないぞとか、常に空を見よ、風を聞け、見ておかないと失敗する、ということを知る哲学者のような農村の方たちを、私は何人も存じ上げています。その人は「私は何十年農業をやっても、今年はいい百姓やったとは一度として言えない」というようなこ

とを言うのです。「今年は何が悪かったのですか」と言ったら、収穫高のことはあまり言いません。収穫高で勝負するのではなくて、やはりできたものの味なのですね。ところが、農業が市場原理に動かされるようになりますと、味ではなくて収穫量とか見た目になっていくわけです。そうしますと土の味を見ながら、こういう味のものができるだろう、なんていうような、そういう農業をやっていられないのです。そういうことを知っていて、それは大事だと思っていても、それはやっていられないのです。日本の農業はもちろん、まだら模様です。すべてそういうふうになっているというわけではないのですけれども、大部分は機械化されて、非常に管理化された農業をやらなければだめなようになっています。そのように努力しても、例えば、次のようなことが起こるのです。

これは、山口県の例です。皆さんがたはほとんど今それを食べていると思うのですが、「ベニモミジ」というタマネギの品種があります。これは、10年くらい前まではほとんど見かけませんでしたけれども、今スーパーで売っているのもほとんどそうです。どんなタマネギかというと、完全に真ん丸です。そして、表の皮がきれいな赤い色をしています。皮は一枚むいたら、すぐ下から白いきれいな中身が出てきます。これはいためますと非常に甘みがあって、腐りにくくて、もう本当にたまねぎの優等生なのです。それは大事大事に作られ、非常にいい値段で売れました。ところで「ベニモミジ」という名称は何か変ですよね。紅葉だけで赤いという意味なのに、さらに紅がついている。そのくらいきれいなタマネギなのです。皆さんがたは多分それを食べていらっしゃる。「ベニモミジ」がいいというので、その農家は水田を畑に直しました。これは大変なことなのです。畑を水田にするのも大変ですけれども、水田を畑にするのも大変。1hの水田を完全につぶしまして、1hを全部ベニモミジにしたのです。おじいさんがまずそれをやっていて、息子さんもほかのいろいろな栽培植物を作っていたのですけれども、米とベニモミジだけにしたのですね。お孫さんは会社に勤めていたのですけれども、あまりにも労働時間が長いので農業をやりたいと言って会社辞めて、珍しく三世代、男が三世代で農業をやるほどの良い収入になったのです。しかし、その値段が確保できたのは、わずか2年なのですよ。なぜかと言いますと、あっという間に北海道でベニモミジを作り始めた。大体1世帯が10h作るのです。そして、山口県のそのタマネギは価格が一挙に3分の1になったのです。やっていられないのですよね。

農民として農業をやっていると、市場経済というのは、本当に鳥肌が立つほど怖いことなのです。なぜならば、土壌を変えていくところから言いますと、10年計画くらいなのです。少しずつ売って、これはいいと評判取っての末がそれですから。たまたま用事があって北海道に行ったときに、5hくらいベニモミジを作っている人に聞いたら、「いやあ、私たちも利益が上がっていません。中国から入ってくるようになりまして」という、それが、7年前くらいの話です。私は詳しく知っているのがたまたまタマネギなのですが、あらゆるところで起こってくると「本当に農業やってられない」という状態なのですね。それでも、やっぱり農業をあきらめない人たちがまだいます。どうしてそこまでやるのでしょうか。おそらくそれは日本人であったり日本列島に住んでいると、農業をやりたくなるのではないかと。ここ（講演会場）のオーナーの方にぜひお話を伺いたいのです。農業をやりたくなる、そのような環境といいましょうか、そんなものがあるので

はないかということが一つです。

それからいま一つ、日本の農業というのは、先ほども言いましたように、いろいろな品種があるのです。私はアメリカに丸三年、イギリスに９か月住んでいまして旅行もしましたが、それはもう何という単一栽培植物かというくらいに、バリエーション全くないのです。どこで買おうと、みんな同じ味なのです。つまり、いろいろなものを作っていないのです。商品価値がないからなのかあるからなのか、そこはよく分からないのですが。日本の農業に対して農産物にかけるコストを下げなさいとよくいわれます。そして、国際競争力をつけなさいといいます。ですけれども、日本の農業というのは、丁寧に丁寧にやる伝統を少なくとも 400 年くらい持っているわけですね。もっと前からそうだったのかも分かりません。ですから、果物を栽培しているところ、あるいは野菜を作っているところをごらんになればお分かりのように、今、人件費が最も高い中であれほどの手間ひまかけるとコストを下げることはできないだろう、と思うくらいに丁寧に作るわけです。私は、農業経済は全然分かりませんけれども、日本の農業コストを下げるとするならば、一つにはやはり中間マージンをいかに少なくするかということですね。中間マージンを、そして中間業者をいかに少なくするかと。これは、事故米というものがいつの間にか食品に紛れ込んだときに、信じられないくらい中間業者が米の売買にかかわっているということが明らかになったように、本当に中間マージンが多いということが一つ。

もう一つ、これは農業をやる側の人たちの機械化の考え方が重要だろうと思うのです。機械化のコストを抑えることができないのは、いろいろな理由があります。いろいろな理由がありますが、絶対的にやれる方法があります。それは、農業機械を作っている会社に儲けさせないということなのです。信じられないほど農業機械というのは高額なのです。それだけではありません。メンテナンスの方法を知らないと、大体５年で壊れてしまいます。ただひとつだけ私は例外を知っている農家があります。すべての農業機械が 20 年を越えている農家があります。どうやっているかというと、本当にすごいのですけれども、全部機械はシーズンが終了すると部品にばらすのです。機械を買ったときに説明書だけではなくて、ちゃんと工場から取り寄せたすべての仕様を全部もらうのです。ばらして、洗って、磨いて、オイルをつけて、ばらしたまま倉庫にしまっておくのです。シーズンがくると、それを自分たちで組み立てるのです。ゴム製のベルトやなんかは当然のことながら切れるのですが、それは部品としてちゃんと買うのです。「全部の機械が、私のところは 20 年たっています」というのですが、これだと機械貧乏をしなくていい。東北の方に行きますと、普通に田んぼの中を動いているコンバインは 800 万円です。これが５年しかもたないのです。そうすると、１年が百何十万円。つまり、１年間のローンが１ヘクタールの米代、１h というと昔の１町分で作った米の純益を上回るのです。はっきり言って、農業機械は儲け過ぎなのです。車の値段ぐらいに下げさせることができれば、少しはいいかなと思うのです。

最後に、命の問題に入ります。『いのちの文化人類学』という本を 1996 年に新潮社から出しました。そのいちばん冒頭の話が、「山桜を植える人」というエピソードなのです。この「山桜を植える人」というのは、作り話でも何でもあり

ません。昭和 40 年ですから 1965 年、大分県国東半島の真ん真ん中に岩戸寺という非常に由緒のあるお寺がありまして、村落が岩戸寺というところで調査していたのです。３月の末だったのですが、大体調査というのはルールがあって夕方４時以降長居してはいけないのです。農業というのは、いろいろな仕事がありますので。「本当に長い時間ありがとうございました」と帰ろうとすると、おじいさんが、山仕事の道具がずらっと並んだようなこんな幅広ベルトと脚半を着けて、どこか出かけるのです。「どこにお出かけですか。こんなにもう暗くなるのに」と言ったら、「いやあ、今からあそこの山に行く」と。すたすた歩けば 30 分ぐらいのところなのですね。「何をしに行くのですか」と言ったら、「いやあ、山桜の苗を植えに行くんだ」と言うのですね。「今日はちょうどいい。日ごろがいい。明日は雨が降る」と。

「前山」という言い方は全国各地にあるのですが、自分の家の庭先に立ったときに、真正面に見える山を前山と言いまして、非常に大事にするのです。借景と言いましょうか、庭のうちです。自分の庭のうちなのです。その前山に、あれが山桜、あれはもう 50 年、あれはもう 30 年、あれは何十年とか言って私に指して教えます。大体山桜というのは非常に運がいいと 100 年とか 200 年になります。大体寿命が 50 年ですね。というのは、それは回りの木が大きくなって、栄養を取ってしまって枯れるものですから。それで、その回りの木をこの前切っておいたと。あそこに苗を植えておくと、自分の孫が自分の年になったときに、ちょうど私のじいさんが植えた山桜を今自分が見ているように、自分の孫があれを見る、というのです。その人の孫が自分の年になるまで、もちろんその人はもはや生きていません。その人が 60 歳だとしますと、その人の頭の中には 60 年後があるのです。50 年後があるのですね。自分の未来は、自分の現在でもあるし、今見ている山桜は今から 50 年前に自分のおじいさんが植えたものなのです。その人は、過去と未来を自分の中に持っているのです。ですけれども、それは関連的なものではなくて、自分の前山に見える山桜というものを媒介として、見ているわけです。それは非常に具体的であるし、非常に神体化されている。つまり、いつも見えるわけですから。「ウグイスが鳴くころになったら、山桜ぱっと開くよね」というような、時間と空間がすべて一体となったようなものなのです。

農業というのは、先ほども言いましたように、非常にせわしない人生というものを人間に、変な言葉だとは思わないでください、たらし込んでしまったのですね。ろうそくのしずくを型にたらし込むように。人類という種に農業は計画的に行動しろと。それから、常に先々を考えて今を決めよとか言うような、私はＤＮＡということばを安易に使うのは嫌いなので使いませんが、人間の中にたらし込まれちゃったのですね。ですけれども、死と再生、あるいは時間というものを、過去と未来と現在とを一体のものにしてくれる非常に不思議なものの考え方と、それだけではありませんで、それを行動として、人を実行させるような力をも、農業は与えてくれたと考えております。

司会

もっともっと聞いていたいような気持ちになって、こう時間だといって途切らせるのが本当に惜しいくらい、引き込まれて聞いてしまいました。会場の皆さんの中から、何かこれを機会に語り合いたいというかたがいれば、遠慮なく手を挙げてください。

質問者

どうもありがとうございました。昔の人は産業としての農だけではなくて、例えば農閑期に何か織物を織るとか、薬を売りにとか、いろいろ全国を渡り歩いておられたわけです。何かもう少し違う見方で見ると当時の人の生き方というのもいろいろと見えてくると思うのです。その辺は何か農村を回られてみて、産業としての農としても面白いのですが、何かそういう生き方、人生の時間の循環のようなことで、いい話だなと思われたようなことがあれば、ご紹介いただくとありがたいと思います。

波平氏

どれをお話ししましょうかというぐらいたくさん例はあるのですが、日本の織物とか、いわゆる在村産業というものは、特に文化文政期以降非常に盛んに起きているのです。文化文政頃から、農村でも貨幣経済になってきますので、どうしても現金が欲しくていろいろなことをやっているのです。会津の私の調査地などは本当に典型的な水田農村なのですが、実はずいぶんいろいろな産業を在村の地場産業をやっているのです。私が知っているだけでも、木綿織り、木綿染め、なんと陶器まで作っているのです。茶碗まで作っているのです。それから、菜種油です。これでこの村は大変潤っているのです。これらは自分たちが余暇でやったのではなく、貨幣経済のためにやむをえずやったのです。ですから、農業だけやっていれば夜なべというのはせずに済むのに、いろいろなものを見ますと、現金収入を得るためにこの時期非常に労働量が増えたようです。それで農村の中の経済格差がとても大きくなっていて、地主が出てくるというような状態で、一つには決してのどかな在村の農業以外の産業というのは少なくとも文書、あるいは近世史などで書かれているのを見る限りでは、それほど牧歌的というか楽しいものではない。それでは楽しくないばかりだったか、つまり金を得るだけのための農業以外のためだったかというと、必ずしもそうではなくて、先ほども言いましたように農業というのはずっと同じことをやっているだけではないのです。ずっと同じことをやっているだろうというのは、農業を知らない人たちの偏見でありまして、常に何か新しいことをやっている。その、新しいことをやるときにはもう一つは飢饉・凶作の伝承というのはずっとありますから、凶作にいかに備えるかということは常に農業レベルを上げておかないと凶作に対応できません。ですから、標語ではありませんが「備えよ、常に」なのです。そうした中から、つまり危機管理といいますか、危機対応の中から、いろいろな楽しみ事を作っていくのです。

それはどういうことかといいますと、今、米俵一俵を持てるのが成人男子の標準になっている。「よっとこさ」という唯両手で持ち上げるだけの持ち方ではだめで、肩の上に乗せることができるという、身体技法まで含んでいました。ただ持てればいいというのではなく、つまり１人１人の体力の総和が村落の体力といいましょうか、労働力の総和になります。でも今それがクリアできればいいというものではなく、危機管理のためには常にそれより何割り増しかの労働量、個人においては何割り増しかの体力、あるいは何割り増しかの身体技法がないといけないのです。それが「祭り」なのです。祭りのときの荒業などは、今は本当に見られなくなりましたが、ものすごい荒業をやるのです。また、早食いとか大食い

とか、特に「持つ」とか「持って走る」とか。そういう祭りの中で、民俗学だとか宗教学は「神賑（しんしん）」と言います。「神の賑い」と書きます。賑わい。神様を喜ばせる。「オォッ」と、みている神様を喜ばせるようなことが祭りの中には必ず入っているのですが、そこが確かに楽しみ、娯楽でもあるように見えるのです。娯楽にしては、努力がすごいのです。その人たちがそう意識しているとは限らないのですが、見方を変えて客観的にみると、明らかに危機管理なのです。農業をしたことのない人や、農業の家ではなかった人には、農民というのはギリギリいっぱいの生活しているようで、農業がつまらなく見えるかもしれませんが、そうでないものをいろいろな形で埋め込んでいて、それが常に娯楽になるようなものであったようです。

質問者

先ほど、明治 20 年代とか、昔の農村を調査されたということですが、その時代のことをもう少し知りたいなというときにお薦めの本はありますか。

波平氏

明治 20 年代の調査をしたのではなく、明治 20 年にすでに農業をやっていた人の話を聞いているわけです。かろうじて民俗学の中に断片的に出てきます。それから、農業史という分野があります。これも本当に研究者が少なくなりましたけれども、農業史の中にはどういうふうに農業をやったかという技術は載っているのです。ただ、個人がどんなふうにしたかというのはないのです。例えば、どういうふうかというと、これは四国の農村で聞いた話ですが、男も女も自分と同じ体重の分だけの草を、夏の間毎日山へ行って午前中 3 回夕方 2 回、ですから、40 キロの女性がいたとしたら、その人は 40 キロの 5 回、200 キロを山からからって下りてくるのです。何をするのかというと、それを切って田んぼに埋め込むのです。ですから切って運んできただけではなくて、それを切って、足で踏んで、田の中に入れて、堆肥にするのです。牛の糞を入れて堆肥も作るのですが、それだけでは間に合わないので、生の草は発酵させていませんから、堆肥としてそれほど質のいいものかどうかわかりませんが、時期によっては非常によく発酵するとその土地の人たちは言っていました。こういうことを 7 月 8 月やるのです。その人たちの中に日露戦争に行った人がいまして、大変だったでしょう、と言いましたら、「いやいや、この村の草刈りに比べたらそれほどでもなかった」って言ったのです。そのくらいの重労働で、今は天国だ、とよく言いました。でもそれは、若者たちが連れ立って、若い女の子と男の子がいて、草を刈るまでの間ほんの少、5 分とか 10 分休んでいいのだそうです。鍬で露はついていますけれども 60 キロも刈りますから、5 分か 10 分は休むことを親が許してくれる。その間に公然と若い男と女がおしゃべりできるという楽しみがあった。あらゆるところに小さな楽しみを埋め込んでいたことが分かるのです。残念ですけれどもそうしたことが、書いてあるものは私の知る限り、研究書のかたちではどこにもないのです。

質問者

示唆溢れるお話でございました。先生のお話の中で、農業が一つの大きな循環をあれだけ生み出していたのに、結局それが工業化の過程あるいは、明治以降の近代化の過程でずたずたになってきたということを改めて知るわけですが、私は

もう一つ教えていただきたいことがあります。近代を手に入れていった私たちは、実は他者と一緒に生きあうということも、忘れざるを得ない、捨てざるを得なくなる。つまり、ある種の共同性とか、だれかと一緒になって何かをするとか、農業というのはそのいちばん大きなフィールドだったのだと思うのです。近代の呪縛のようなものどうやってもう一度私たち自身は克服していったらいいのでしょうか。逆に農業から克服するようなヒントを与えていただければと思います。

波平氏

私の今の段階でお答えできるかどうかわからないのですが、先ほど、パプアニューギニアの高地のマウントハーゲンのお話をしました。男の世界と女の世界が隔絶している文化として有名なのですが、男たちは四六時中一緒なのです。大体５歳になると男小屋、メンズハウスなどという言い方をしますけれども、とにかく男の子は４歳ぐらいまでしか母親と一緒にいません。５歳ぐらいになると父親がメンズハウスに連れ出して共同生活をするのです。何をするのも男は一緒なのです。女性はどうかというと本当に結婚するまでの若い間だけで、結婚するとほとんど一人なのです。農業は一人でするのです。そして自分のガーデンといわれるぐらい見事に作り上げた畑の中で、見るとあそこに女性ここにも女性という具合に、ぽつりぽつりいるわけです。３日間ぐらい小屋に泊って、家族と別居してでもやるわけです。その人たちの心の世界というのは、男性からは聞き取りをしているのですが、女性からはほとんど聞きとりをしていないので、実はわからないのです。他のデータなどと考え合わせて、日本の女性も畑で働くときにはものは言わない。一体彼女たちは孤独だったかというとそうではないのです。つまり、私たちは人と人との会話とか集まりがあって満足するとか、寂しさを忘れるとか思いがちですけれども、日本のお歳をとった農家の方からも聞いたのですが、いつでも何とでも話せるというのです。土と植物と。マウントハーゲンの女性たちは本当にプライドが高いのです。どんな時でも。男が暴力的で非常に男尊女卑の社会といわれていますけれども、マウントハーゲンの女の人の威風堂々とした態度を見ますと、あれは、男は女が怖くてメンズハウスで一緒に共同生活しているのではないかと思うくらいに、すごいです。あれだけの畑を作ること自体すごいですし、人間は人間がいないと寂しいという考えがいかに狭いか。

私は『いのちの文化人類学』の中で書いている、自分が好きな話のもう一つなのですが、南北アメリカ、すべてではありませんけれどもインディアン、南米ではインディオですが、ある人々が、アニマルメイトを持っているのです。アニマルメイトというのは信仰でして、先ほどの世界観なのですが、自分が生まれた時に自分を取り囲んでいる自然の中に、動物が一匹一緒に生まれるというのです。その人（動物）と自分とは生命が一緒なのです。自分が病気をした時はアニマルメイトが病気をしたから自分も病気をする。だから自分の病気治療をしただけでは治らないので、アニマルメイトを治療するために供物を持って、山の主というアニマルを全部支配している山の神のところに行って、どうぞ私のアニマルメイトの病気を治してやってくれと。つまり自分の治療とアニマルメイトの治療と一緒にしないといけない。アニマルメイトというのはレベルの違う存在でありまして、狭い世界で小さなグループですから絶えず葛藤があるわけです。決して和気あいあいではない。嫉妬もあれば競争もあれば妻を取られたとかということはしょっちゅうあるわけで、そういう死ぬか生きるかという時にはどうするかという

と、グループから離れた場所に行って、アニマルメイトに魂で呼び掛けるというのです。そうするとアニマルメイトは必ず、どうしなさいという答えをくれると信じられています。自分が死ぬときはアニマルメイトが死ぬというふうに、全く運命を共にする動物がいて人間の言葉は話さない、人間の姿ではない。自分は人間の空間に住んでいるけれども、山に住んでいるという存在を。本当に悩んで自殺しようかどうしようかというようなとき、あるいはあいつを殺そうかというようなときには、山の中に入っていって、何日間か座っていると、幻覚なのでしょうが、必ず、アニマルメイトが出てきて、こうしなさいと魂に話しかけるという信仰があります。そうした、日本の庭師などというのは、石にも木にも呼びかけて答えを得るようなそういう世界を持っているのだと思います。

中司先生（現代 GP 代表）

今日は皆さんと一緒に一受講生として、先生の非常に深い洞察をお聞きし、本当に勉強になりました。

まず、第一の灌漑用水、これが日本だけではなく農業を変えたのだと。これは本当にそう思いました。先生がお話になった 400 年前ぐらいから（この地方では 250 年ぐらい前から）灌漑において芸術的な大変素晴らしい農具が使われておりました。「踏み車」というのですが本当に優れた農具です。江戸時代の農業というのは素晴らしかった、強かった、進んでいたのだというお話ですね。正にそうなのです。ここ（福岡県）は土鋤きを中心とした筑前農法が発展したところなのです。これは素晴らしいものです。この筑前農法において代表的な林遠里氏の展示会を計画しています。筑前農法の勧農社からは、優秀な農村教師が 600 ～ 800 人程育っていきました。勧農社の『勧農新書』には宮崎安貞や貝原一軒、横井時敬など様々な知識人が名を連ねています。筑前農法は種や土を「生命」として扱う農法です。その農法が途切れたことは非常に残念なことです。

「山桜を植える人」のお話にも大変感銘を受けました。我々は自らをこえたタイムスパンと命の中で農業を見てきたのです。そのことをこれからも大切にしていかなくてはいけないのだ、ということを身にしみて感じました。どうもありがとうございました。

（2008 年、ハーブガーデン・プティール倶楽部にて）

波平　恵美子（なみひら　えみこ）
1942 年、福岡県生まれ。元・日本民族学会（現・日本文化人類学会）会長。お茶の水女子大学名誉教授。文化人類学専攻。九州大学教育学部卒業。テキサス大学大学院人類学研究科（1977 年、Pf.D 取得）。九州大学大学院博士課程単位取得満期退学。佐賀大学助教授、九州芸術工科大学（現・九州大学）教授、お茶の水女子大学教授を歴任。
日本文化論（日本民俗学）における「ハレ・ケ・ケガレ」という三項対置の概念を示した。主な著書に『病気と治療の文化人類学』（海潮社）『ケガレの構造』（青土社）『脳死、臓器移植、がん告知』（ベネッセ）『病と死の文化』『日本人の死のかたち』（朝日選書）『いのちの文化人類学』（新潮選書）『暮らしの中の文化人類学（平成版）』（出窓社）、編著に教科書として評価の高い『文化人類学』（医学書院）がある。

アンケート

参加総数　35 名　（うち回答者数 16 名）

満足	13 人	80%
やや満足	2 人	15%
普通	1 人	5%
やや不満	0 人	0%
不満	0 人	0%

■講演会感想

●農業と生命観の関係性について、すっきりと理解できたように思いました。とはいえ農業はおろか土に触れることすらしてこなかった私には理解しようにもできないことも痛感しました。文化の源である土に戻っていくことは人間にとって当然のことかもしれません。波平先生のお話を聞きながら全身全霊でいのちのサイクルをこの身にしみ込ませながら生きてみたい、そう思いました。（九州大学学生）

●農業をあえて壊してきたのは政府であったことを知り、残念な思いです。伝統的、創造的、計画的な農業の復活を願います。クン族のお話にロマンを感じました。（40 代、女性）

●「先のことを予測して今やることを考える」ということは当たり前だと思っていたので、それが農業から人類が得た考え方だということを知り、大変驚きました。山桜を植える人の話が心に残りました。（芸術工学部学生）

●日本の農業が日本人の文化、考え方、生き方などの与えてきたものの大きさを感じた。逆に農業が日本人の生活の中心ではなくなったので、日本人に合わない生活に変化してしまったのかもしれない。食や自然、命に対する意識も変わってしまったのかもしれない。それほど日本人と農業の関わりは深かった、そして今でも深いはずだと思う。種が教えてくれる循環という言葉が印象に残った。（九州大学芸術工学府学生）

●人は人と一緒にいないと寂しいものだと観念的に思っていましたが、マウント・ガーデンの話を聞いて、世界観が変化しました。死と再生、生命観など、自分と自分の周りの存在を農業から改めて考え直しました。これから農業に深く関わるわけではありませんが、今日のお話を聞いて、料理や食事をする時に考えることが少し変わりそうです。（芸術工学部学生）

●農によって生命観が変わった、あるいはたらし込まれたという発送は目から鱗でした。「アニマル・メイト」「山桜を植える人」が印象に残りました。（40 代、女性）

●コリンタッジの本から農業の負の面をたらし込まれておりましたが、脳が洗われました（30 代、男性）

●農業問題でぼんやり感じていたことが明確になった。食は生きる基本であり人の全てを司る、と強く感じた（50 代男性）

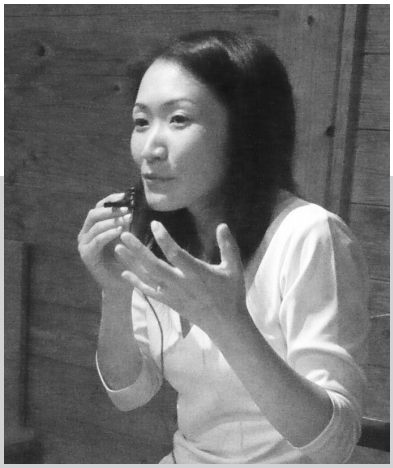
●農業には大きな変化が起こっていることがわかった。「農業」を知ることで「いのちの大切さ」を知ることができるという意味が少しわかった気がする。もっと深く農業について知りたいと思った（芸術情報設計学科学生）

●経済の基にあるのは農業だという考え方が理解しやすくなった。人の思考を変えることができるほどの大きな力を、農業に感じた。自分の専門分野に関する考え方が少し変わった気がする。（芸術情報設計学科学生）

●現在の農業が以前と比べいかに土と離れてきているか、循環していないかについて気づかされた。原点の農業に戻らなければならないと感じた。（芸術情報設計学科学生）

普川容子 （特活　アジア太平洋資料センター理事）

「世界貧困と債務の関係」



普川容子氏は、深刻な世界貧困問題について、その根源にある債務の構造を鋭く分析し提示した。

現在 14 億人の人々が 1 日 1.25 ドル以下で暮らす極度の貧困状態にある。そのうち 8 ～ 9 億人の人々が飢餓に苦しんでいる。この格差社会を解決する方法には 4 つあるという。1）援助の増額、2）貿易ルールの改善、3）気候変動（温暖化等）をくい止める努力、4）債務問題の解決。日本は世界の債務の 5 割を貸し付けている債権国である。債務を返済できない国に対しては「構造調整」が行われる。構造調整とは債務国に対して、関税をなくすこと、輸出を増やすこと（外貨獲得のため）、教育・医療への公的サポートを減らすこと、などを強いる。関税の問題によってハイチが決定的な農産問題に陥った例をあげ、日本も地産地消体制を整える必要性があるのではないか、と普川氏は提言した。

債務による公共事業から、途上国の国民側は殆ど利益を得ることはなかった。（プロジェクトは外資系企業が請け負う場合が多かった）にもかかわらず、途上国の国民が税金によって債務を返済しなくてはならなくなったのである。公共事業だけでない。軍需につぎ込まれる債務は全体の 30%を越える。紛争がさらに厳しい貧困状況をつくり出す。

日本人は自らが債権国であるという認識があまりに低い。特にアジア諸国と日本との債務についての認識には大きなズレがある。私達は自らの加害性を明確に認め、よりよき解決策を模索しなくてはならない

普川氏が語ったキーワードとして「環境債務」という言葉がある。先進国がこれまで行ってきた途上国への環境破壊を債務として実数化すると、現在貸し付けている金額を越える。つまり債務帳消しどころか、先進国側が環境債務を途上国に支払わなければならない、と彼女は語った。

債務による社会構造によって、あまりに「命」が粗末にされている。普川氏の講演は未来への重要な提言である。参加者の心を強く動かし、講演後活発な質疑応答が行われた。

普川氏講演会の内容と、九州大学芸術工学部 3 年生のチームによるアート・プロジェクト「Design the Earth」の表現、会場の雰囲気がうまく調和し意義ある時空間を創り出していた。（知足）

2008 年 10 月 10 日

普川氏も WS に参加（→Design the Earth ）

皆さん、こんばんは。

アジア太平洋資料センター（PARC）という創立35周年になる老舗のNGOの理事を務めております普川容子です。この世界貧困と債務の問題という、日本社会では非常にマイナーなテーマのために足を運んでいただいたことに、まず感謝をしたいと思います。ありがとうございます。

まず、貧困がどのようなレベルか皆さんご存じですか？数字でいうと、いわゆる極貧といわれている1日1.25ドル以下で生活する人は今、世界中に14億人いるといわれています。そのうちの8億人が毎日飢えの中で暮らしています。最近、食料価格が国際的に上がったことによって、プラス1億人がその飢餓の中に転落したといわれています。8億人プラス1億人で、今、この瞬間に9億人の人たちが飢えに苦しんでいるという状態にあるのです。毎日、1日1400人のお母さんたちが出産のために命を落としています。そして3秒に1人の子供が、予防可能もしくは治療可能な病気によって命を落としています。これほど命が軽んじられている時代はありません。9億人が飢餓に苦しむ一方で、10億人近くが肥満で苦しむ。このような格差のある社会は、歴史上始まって以来といわれています。そのような世界に、今私たちは生きているのです。

この許し難いレベルの世界貧困を解決するために、先進国が国際的にやらなくてはいけないことは主に四つあるといわれています。その内の一つは、まず(1)援助を増額しなさい。いわゆるODAといわれる政府開発援助です。

もう一つは、(2)貿易ルールを公正なものにしてください。現在の貿易ルールは先進国に有利になるように作られています。貧しい国も輸出入でもうけられるように、貿易ルールを変えてください、というのが二つ目です。

もう一つは、(3)気候変動を何とかしてください。先進国の暮らしぶり、産業発展、工業化によって、地球環境はどんどん破壊されています。気候変動によって、いちばん負担をうけるのは貧しい人たちです。津波が起きれば、貧しい人たちがその津波によって命を失います。気候変動は田畑に影響を与え、農業従事者を苦しめます。その気候変動は先進国側の責任が大きいのです。それが第3点目。

第4点目が、今日お話しする(4)債務の問題の改善。債務というのは簡単にいうと借金の問題です。日本を含む先進国が貧しい国々にお金を貸す、これを債務と呼びます。以上この4点が国際的に、先進国の責任として取り組まなければならないと言われていることです。

世界で最も借金（債務）を抱えている国というのが、アフリカを中心に41か国あるといわれています。その41か国のほとんどアフリカですが、これらの国に最もお金を貸し付けている国はどこだと思いますか。日本なのです。5割近くを日本が貸しています。アメリカかドイツだとおっしゃる方が多いのですが、大部分を日本が貸し付けているのです。文句なしのトップです。その次に、フランス、ドイツ、アメリカという順番になっています。

どうして貧しい国が先進国に借金をしているのでしょうか。貧しい国々への援助であるODAは、贈与ではないのです。援助額の半分弱が贈与ですが、あとの半分は貸し付けなのです。実は、援助というお金は「貧困を解決するために使ってください」とあげているのではありません。お金を貸しておいて「これをプロジェクトに利用し、儲かったら返してください」というものです。援助として差

し出されたお金が、途上国の借金となって残ってしまったというのが現状なのです。

債務とは

皆さん、ODA が借金だということを知っていた人、どのぐらいいますか？ヨーロッパ諸国の援助は基本的には贈与ですが、日本の場合は 50% 以上が貸し付けであり、債務国から利子を取って返してもらっています。

豊かな国々にお金を返すことの負担は、想像以上に大きいのです。1985 年に世界的に有名なミュージシャンが集まって「ライブエイド」というロックコンサートをやったことを知っている人いますか？ “We are the world. We are the children.” 歳がばれますね。（笑）アフリカのエチオピアという国がひどい飢餓に見舞われたため、ミュージシャンたちがチャリティーコンサートを行ったのです。当時の日本円で 280 億円も募金が集まり、アフリカに送られたのです。しかし 280 億円という金額は、アフリカが豊かな国々に支払う借金返済額の、たった４日間にすぎなかったのです。280 億円を募金としてアフリカに送ったとしても、たった 4 日間で借金の返済として先進国側に返ってきてしまう。これではいくら援助してもしかたがない。この活動によって先進国側は、債務の返済負担の重さを痛感したのです。

アフリカの国々というのは（お金の意味で）非常に貧しい。債務の大きな問題のひとつは、債務の返済を優先するために基礎的な社会サービスにかけるお金を削ることなのです。つまり貧しい国々の「教育」「医療保険」といったものを削って債務を返済することを強いるのです。先進国への借金返済を優先してしまったという背景があるのです。債務国は人間が生きていくための医療保健サービス、教育というものに国家予算の 10% もしくは 20% 以下しか割けない状態です。国家予算全体の 40% 以上を債務返済に充てているというデータがあります。フィリピンもそうです。教育・医療保険に充てる国家予算は 10% 以下ですが、債務返済の割合は 40 ～ 50% です。

このような債務の返済によって、資金の逆流現象が起きています。途上国に対する援助 (ODA) のうち、日本がアフリカに新たに貸し付けるお金よりも、アフリカから受け取る返済額のほうが今や多いのです。援助といいながら、新たに貸し付けるお金よりも返ってくるお金のほうが大きいです。外務省が「ODA 白書」を公表しています。援助実績というところを見ると、アフリカ向けの政府貸し付けはマイナスになっています。それは日本が援助といいながら逆に受け取っている現状を表しています。豊かな国が貧しい国から与えられる状況を生み出しているのが、債務なのです。

私にとって、債務問題を知った時の一番ショッキングだった数字があります。もし、アフリカが債務の返済額を子供たちの医療・保険などに使った場合、命が救われる子供は 1 分間に 13 人もいると。逆に言うと、 1 分間に 13 人の子供たちが、債務によって命が奪われているのです。ユニセフは経済的にはもちろん、このような債務の取り立てはまず道義的に意味を成さないということで、怒りのコメントを出しています。これは、ユニセフだけではないです。女性問題を扱う国際機関やNGOは、貧困からの解放の戦いより債務返済を優先させること自体を、非常に問題視しています。

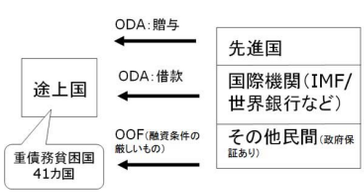
タンザニア独立時にニィエレレという大統領がいました。教育熱心な元学校の先生です。タンザニアを独立に導き、アフリカでは最も尊敬されている大統領の一人でした。ニィエレレ大統領は常にこう言及していました。「私たちは自分たちの国の子供たちを飢えさせてまで債務の返済をしなくてはいけないのか。この状況は非常に問題である」

どの国際会議においてもアフリカの首脳たちはまず「債務を何とかしてくれ。まず日本（債権国のトップ）を何とかしてくれ」と、開口一番に言います。私が国際開発問題にかかわり始めた頃、井戸を作るとか、学校のプロジェクトに携わりたいと思っていました。何度かアジアやアフリカに出かけていって、向こうの人たちと話す機会があった時にこう言われたのです。「容子、日本からわざわざ来て学校や井戸を作ろうとしてくれて、本当に頭が下がる。非常にありがたい。しかし、私達は債務を返済するために、学校を閉鎖しなくてはならない。まずこの現状を何とかしてほしい」と。借金を返す先は日本です。アフリカの人たちにしてみたら、日本の政府を動かすことなどできません。「日本政府に無謀といわれる債務の取り立てをやめさせるのは、あなたたち日本の市民しかいない。ぜひやってほしい」と言われたことがあります。非常にショッキングでした。ああ、そうなのか、自分たちには自分たちの国でやらなくてはいけないことがあるのだと思った記憶があります。これを契機に債務問題に向き合うことになりました。新聞やニュースでは途上国の債務問題は経済界の言葉で語られることが多いのですが、貧しい国の人々にとってみれば、日々の子供たちの命にかかわることだということなのです。その格差というのは非常に大きいです。債務問題というのは、金融とか経済を理解しないとわからないものではなく、途上国の人々にとっては自分たちの暮らしに直結している問題だということになります。

構造調整

さらに悪いことがあります。アフリカ、アジア、ラテンアメリカなど借金に苦しむ国々は、新規にお金を借りられません。もう返せないから繰り延べや取り消ししてほしい交渉をします。そういう場合日本などの貸している側は「構造調整をしなさい」という条件を出すのです。構造調整とは何かというと、端的に言えば小泉首相がやった構造改革と似たものです。つまり返すお金を捻出するために、政府（税金でまかなう部分）をできるだけ小さくし市場に任せるのです。余計な国家予算を削り、浮いた予算を債務の返済に回しなさい。もしくは市場を解放してできるだけ輸出で儲け、そのお金で借金を返済しなさい、というような条件を付けるわけです。これが構造調整といわれるものです。イギリスのサッチャー首相（80 年代）、アメリカのレーガン大統領もこの構造調整を自国に対して行いました。途上国は、日本を含む先進各国から債務のために構造調整をやりなさいと条件を付けられるわけです。

構造調整とは、具体的にはまず政府の支出を減らすための「民営化」です。次に「医療保険・教育費用のカット」です。これらが特に貧しい人々の生活に打撃を与えます。先ほど申し上げたタンザニアは、ニィエレレ大統領が学校の先生出身だったこともあって非常に教育熱心な国なのです。アフリカでは珍しく、70 年代後半には、小学校の就学率が 100% だったのです。途上国では、ほとんどありえない数字です。でも、債務で首が回らなくなり構造調整を押しつけられた結果、教育費をカットせざるを得なくなりました。小学校が有料になってしまった



のです。これから経済発展するというときには教育がいちばん必要不可欠です。タンザニアは構造調整の結果、小学校が有料化していきなり就学率が 70% にまで落ちてしまった。非常に高かった識字率も落ちました。タンザニアに限らず、病院が有料化になったり、医療サービスがなくなったりしています。構造調整としてはこれら以外に「政府からの補助金のカット」があります。貧しい国々では、最低でも貧困層がパン、小麦、ガソリンなどの生活必需品を安く買えるように、政府が補助金を出して価格を低く抑えていました。構造調整の結果政府の補助金が打ち切られ、生活必需品の値段が高騰しました。例えば、1996 年のヨルダン。パンの価格がいきなり 2.5 倍に。あるいは、1991 年のペルー。たった一晩でガソリンの値段が 31 倍。パンの値段が 12 倍にもなった。1989 年のベネズエラ。ガソリン価格が非常に上がり、公共交通料金も値上げされて、ベネズエラの市民が怒り、3 日間の大暴動になりました。（公式発表で死者 300 人）それ以外にも構造調整を受けてパンやガソリンの値段が上がった国々では、抗議のデモや暴動が相次ぎました。

構造調整（Structural Adjustment Policies）は、略語で SAP（サップ）と呼ばれています。特にアメリカのひざ元の南米の人たちは「SAP はもうこりごりだ」とよく言いますね。いちばん近い例だと 1996 年のアジア通貨危機の時に、韓国が大変な経済危機に陥りました。韓国は構造調整を条件に IMF という国際機関から短期に融資を受けたのです。韓国は公共のセクターが強い経済だったのすが、いきなり民営化を行ったために、たくさんの労働者が失業してしまったのです。ヨン様（ペ・ヨンジュン）ファンなら知っているかもしれませんが、彼が労働者の役をやっていたドラマで「IMF は何をするのだ」というせりふがありました。それくらい一般の人たちが IMF に押しつけられた構造調整に対して困っていたという状況があります。日本はもちろん構造調整を支持していました。日本は構造調整を条件に途上国にお金を貸し付けている側なのです。

さらに構造調整の一つに「関税をなくしてしまう」というものがあります。日本の場合だと、お米に 700 ～ 800% の非常に高い関税をかけて、外国から安いお米が入ってきて日本の米農家が打撃を受けないようにしています。高い関税をかけてお米を守っているのです。各国も関税をかけて、自分たちの主要な食物というのを守ってきました。しかし構造調整というのは、その関税を全部なくしてしまいなさいという圧力をかけます。その結果、特に南米の国々はアメリカ産の安いとうもろこしや安い米、あるいは EU の安い乳製品等が入ってきて、自国の農業もしくは畜産業が壊滅的な打撃を受けてしまった。皆さん、ハイチという国をご存じですか。中南米の小さな島国で非常に多くの借金を抱えています。そのため 80 年代に構造調整を受けて、米などの関税を全部なくされてしまったのです。結果として、アメリカ産の安い米に太刀打ちすることができなくなり、ハイチ国内の米農家はほとんどいなくなってしまった。そして最近の食糧危機で何が起こったか。食糧危機によって米の値段が非常に上がりました。貧しいハイチはその高くなった米をもう輸入することができないのです。米を輸入することはできない、自国でも米を作ることもできない。結局、米が全くなくなった状態になってしまった。ニュースで取り上げられていましたが、ハイチの貧しい人たちは米がないために泥のクッキーを食べている映像が流れていました。泥に水を混ぜ、それに小麦とお塩を少量混ぜて、焼くのではなく陶器みたいに干すのです。干してできた泥のクッキーを、ハイチの人たちは空腹を満たすために食べているのです。

基礎的な社会サービスに10%以下、
多くても20%以下の予算
↓
債務返済には40%近く（アフリカ平均
（データは2000年、世銀の報告によ

それが今の食糧危機の結果なのです。その食糧危機は、いったい何が引き金だったのか。それは構造調整を受けて自国の農業を守ることができなかったことが原因だったのです。このハイチの話を聞いて、状況としては日本も危ないと私は心配しています。このまま関税を引き下げて貿易自由化を進めていった場合、今後食糧危機の影響をもろに受けるでしょう。日本は借金を抱えていない、構造調整を受けていないとしても、事実上貿易問題によって関税をなくす圧力を受けていますから、このハイチの状況は人ごとではありません。

構造調整というのは、関税を引き下げると同時に輸出をしなさいと言います。借金を返すために外貨を稼がなければいけない。つまり頑張って輸出をしなくてはいけないわけです。それで、南米やアフリカなどの天然資源が豊富な国々というのは、自国の熱帯雨林などを伐採して輸出しました。あるいは貧しい国々で人々は飢えているのだけれども、その飢えている人々の横で巨大なプランテーションで果物やコーヒーを作り、日本を含む先進国に輸出しているという状況が生まれました。インドやパキスタンのプランテーションは非常に広いのです。小農民たちは日々食べるのにも困っているのですが、そのプランテーションで作ったマンゴーをジュースにして、アメリカなど海外へ輸出するという状態です。私の連れ合いはODA関係の仕事をしているおり、先日タンザニアの開発プロジェクトの調査のために出かけました。タンザニアに壊れた船を廃棄する場所をつくるというのです。廃棄された船をタンザニアが処理し外貨を稼ごうという援助プロジェクトです。要するに、ゴミ捨て場を作って、外貨を稼いで、それを借金返済に回すと。それを開発プロジェクトだといっているわけです。これはちょっと矛盾なのではないかなと思った一つです。

これらの構造調整があるために、債務は自分たちの首を締める鎖だと、よく途上国の人たちは言います。自分たちは、長い植民地支配が終わってようやく独立した。しかし自分たちの政府がすばらしい政府だとは全然思えない。債務によっていまだに自分たちは植民地下におかれているようだ。債務は自分たちを縛り付ける鎖だと。構造調整という名前で、関税や政策を変えなければいけない。自国で自分たちのことを決める自由、自分たちの政策を自分たちの手で選択する自由というのを奪われてしまっている。植民地とかわらないではないかというのです。債務は単にお金を貸しました、返してくださいという問題ではない。貸している側の力が強く、借りている側が弱い。そこには支配と従属の関係というものは生まれてきてしまう。これを現代の植民地支配だと言う人がいます。

インドに行って日本の援助をどう思うかと聞いたことがあります。「日本からの援助。そんなものいらない。どうせ金貸すだけだろう」と。援助といってお金を貸して、ふたを開ければ借りたお金で日本の企業が来て、役に立たないものを作って、借りたお金を結局日本企業に支払うことになる。日本企業がお金を持って去っていき、インドに残ったのは借金だけだと。そういうふうに怒る人もいるのです。もちろん役に立ったプロジェクトもたくさんあるという前提においてですが。でも、やはりアジアの多くの人たちは、援助は借款、貸し付けである以上、結局は自分たちの役に立たないことが多いと思っていることは事実です。

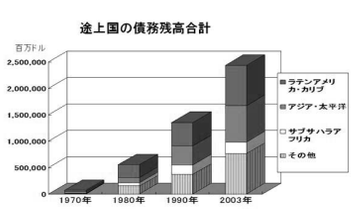
債務が膨れ上がった理由

どうしてここまで、債務というものが膨らんでしまったのでしょう。280億円

（ライブエイド）がたった4日間で消えてしまうほどに。いろいろ理由はあるのですが、一つは、途上国側も非常に借りたがった時期があったのです。長い植民地時代が終わって、ようやく自分たちの国が独立を果たし、日本やヨーロッパのような工業国になれると考えました。今こそ大きな開発プロジェクトをやりたい。だけどお金がない。だから、たくさんお金を借りて、経済発展による近代化を進めたいと願いました。ちょうどその頃、貸す側にも理由がありました。1970年のオイルショックを覚えていらっしゃいますか。オイルショックによって産油国はお金がもうかったのです。もうかったお金をヨーロッパやアメリカの銀行に預けたのです。預けられた銀行は、大量のドルを持っていてもしょうがないので、どこかに貸し付けようとしました。しかし当時オイルショックのために先進国はみな不況だったので、なかなか借り手がいない。そこで独立後間もない、やる気満々の途上国にどんどん貸したのです。普通だったらリスクを考えるのですが、当時はスーツケースに札束詰めた銀行員がメキシコに飛ぶことがしょっちゅうあるというぐらい、安易に貸し付けが行われたのです。もちろん、国家というのは企業と違って倒産しませんから、リスク度外視で貸し付けたという背景もありました。そのために、いわゆる過剰ともいえる融資が行われてしまいました。

融資先のプロジェクトとはいったい何だったのでしょう。これが最も問題なのです。非常にずさんな計画のもとに、利益を生まないプロジェクトが続出したからです。アメリカ議会の国際金融制度諮問委員会が「メルツァー報告」（2000年3月）を提出しました。それによると世界銀行がアフリカで行った開発プロジェクトの実に73パーセントが失敗だった、という報告が出ています。借金というのは、そもそも悪いものではないのです。融資を受けた事業が利益を生みきちんと返済できれば何ら問題はなく、非常に合理的な活動です。ですが債務に関しては、途上国にとって殆ど利益を生まないプロジェクトが大多数でした。失敗したプロジェクトによって返済が不可能なのです。企業の場合だったら銀行側が不良債権を抱えるわけですけれども、国というのは破産もしません。国としての信用にかかわりますから、絶対に返さなければいけない。破産しないという前提において、結局返せない借金ばかりが残っている現状が明らかにされました。

他に悪名高い例を紹介します。コンゴ民主共和国（旧ザイール）は中央アフリカにある非常に豊かな国です。ザイール川という大きな川があり土壌も肥沃です。何より金やダイヤモンド、皆さんの携帯電話の中に必要不可欠なタンタルという希少金属を産出しています。問題は政治なのです。独立まもなくモブツ大統領という独裁者がいました。彼と非常に仲がよかったのは、元アメリカ大統領のブッシュの父です。どうして仲がよかったのか。ちょうど時代は冷戦時代でした。ザイールというのは豊かな鉱山資源がある国が共産化してはならない。ソ連（ロシア）を近づけてはならない。ということで、モブツがいくら悪名高い独裁者だと分かっていても、アメリカは彼を必死に援助し続けたのです。そのアメリカが貸し付けの一つとしてやった巨大プロジェクトに「インガ・シャバの送電線建設」があります。発電所から電気を必要とするプラントまで、1700キロの高圧電線を引いて電気を送ろうというものです。1700キロというと、鹿児島から北海道の網走の辺りまでの距離です。送電線って分かりますか？電車の上で電気を送っている線ですね。網走－鹿児島間の距離に送電線を1700キロもつくるわけです。送電線はアルミでできていますから、素人で考えても大量のロスが出ることはわ



出典：Global Development Finance 2004

かります。ロスを減らすためには、ハイレベルの高電圧を一挙に送らなければならない。こうして高電圧にすると、その 1700 キロ送電線下にある村々には全く電気は来ないのです。ただ、電圧線が通るだけ。何とも無駄遣いのプロジェクトなのです。送電線の電気の送付先はシャバ州でした。独立運動をしていたシャバ州に対して、モブツは経済基盤である電気を押さえておきたかったのです。もし独立に向けての不穏な動きがあった場合、即座にシャバ州の電気を切ってしまえる。これはモブツの政治的な思惑なのです。ただそれだけの理由で 1700 キロの送電線プロジェクトをやってしまった。

請け負ったアメリカもアメリカですね。ちょうどその頃世界的に不況だったせいもあり、企業は目の色を変えて巨大プロジェクトを欲しがっていたのです。様々な国々が送電線事業に入札したのですが、パパブッシュが頑張ったおかげでアメリカが落札しました。16 億ドルという巨額なお金をかけて、その送電線というのは完成してしまったのです。しかし送る先のプラントに問題があって、結局 10 パーセント以上も稼働しなかったのです。作った先の工場が稼働しなかった。三井物産も撤退しました。小規模に銅精製は行ったのですが、国内需要に合うような物を全く作れなかったのです。いったいこの送電線は何のためのものなのか。つぎ込んだ 16 億ドルという巨額なお金は、債務ですのでザイール国民が自分たちの税金で払い続けなくてはいけない。例えば 10 億ドルあったら、ザイールで 20 万人の先生か看護婦を 20 年間雇える金額なのです。その貴重なお金を訳のわからない送電線という物につぎ込んで、借金だけが残っている。

他にも日本がからんだ同じザイールの「マタディつり橋プロジェクト」があります。石川島播磨工業が約 350 億円をかけて作りました。350 億円という額は、たった 1 国の 1 つのプロジェクトに貸し付けるという意味では法外な値段なのです。そのマタディつり橋をつくるために石川島の社員の人たちは本当に頑張ったと思います。でも、全く役に立たなかったのです。問題は、橋だけを造っても橋を降りてから港までの鉄道がなかったのです。港と橋の間の輸送手段がない。もちろん、プロジェクト関係者もばかではありませんから、港から橋までの輸送手段がなければこの橋を造っても意味がないということは分かっていた。分かっていたにもかかわらず、インフレだといって鉄道を作らず橋だけ造った。その額 350 億円です。それはもちろんザイールの借金として残っています。しかも貸す段階において、ザイールが債務負担に陥っており返済が無理だろうという報告書が IMF から出されていたのです。だから、日本は 350 億円貸し付けても彼らには返す見込みがないということはほぼ分かっていた。なのに、貸し付けてしまった。実際、返ってきたのは約 10 億円で、そのほとんどが返済されなかったのです。要するに不良債権化した状態にあります。不良債権化すると、最終的には私たち日本人の税金で埋めることになります。

フィリピンのバターン原子力発電所は地震の活断層の上に建設されました。造った後、1 ワットも発電しないうちに「これはあまりにも危険すぎる」ということでお蔵入りにされました。この無意味なプロジェクトのために、フィリピンの国民は今でも借金を返済しています。2008 年 G8 サミットの時に会ったフィリピンの人々が、「あのバターンの債務、もう払い終わったよ」と言いました。1 ワットも発電していない発電所の借金を払い終わったと。私はショックを受けま

した。債務を生み出した巨大プロジェクトの全て失敗だったとは言いません。しかし本当にそれが人々のニーズに従って作られたプロジェクトなのかどうかというと、やはり疑問があります。

私がインドに行った時、南インドにりっぱな高速道路ができていました。インドというのは非常に経済発展していますから、もちろんその高速道路は必要だったと思います。けれども、聞き取り調査を行うと、高速道路の西側に家がある貧しい農民は、畑が道路の東側にあるというのです。高速道路が真ん中に来てしまったら渡れないのです。自分たちの農地にどうやって行けばいいのでしょう。車の間をぬって何とか渡ろうとするため危険です。事故も非常に多いらしいです。貧農が多いこの地域において、その高速道路が地元の方々のニーズに従ったプロジェクトだったかどうかというと、はなはだ疑問です。彼らのニーズについて、いったい誰がどのような形で拾い上げ開発プロジェクトを実施したのか考えさせられます。その高速道路は結果として債務になっています。結局、その道路で分断された人たちの税金なり、教育なりが削られて返済されるのです。だから、地元の方々にしてみれば「自分たちは利益を受けたわけではない。逆に自分たちの生活がおかしくなった」と感じています。例えば巨大プロジェクトのダムなども同様です。ダムのために強制移転されられた人も多い。「私たちはプロジェクトから全然恩恵を受けていないにもかかわらず、その支払いの義務は自分たちにある」と。どこかおかしいのではないかと思います。

もっとひどいパターンというのが、債務が武器などの軍備に使われたケースです。また債務が独裁者のポケットに入ったケース。フセイン大統領に対してロシアやフランス、アメリカなどがせっせと貸し付けました。しかしそれはフセインのポケットに入ってしまったのです。でも、借金は借金としてイラク国民の上にのしかかっています。日本の場合もそうです。日本はフィリピンやインドネシアに貸し付けました。援助もしましたが、フィリピンの場合、特にマルコス大統領の時代には、債務の約 10% はマルコス一族の賄賂として消えたといわれています。インドネシアに至ってはスハルト大統領の独裁政権時代、開発にかかるお金の 20 ～ 30％は彼のポケットに入ってしまったという調査が出ています。

軍事費や独裁者のポケットマネーというのも借金は借金です。それを国民たちが返さなくてはならないのです。例えば 70 年代の米ソ冷戦時代、アメリカとソ連が援助合戦をしました。当時の途上国の債務増加分の 40％は武器に消えたといわれています。80 年代に入ってもその状況は変わらず、債務増加分の 15 ～ 30％が武器輸入によるものだといわれています。米ソ両国は味方につけたい途上国に対して、最初は武器を無償であげていたのです。最初は無償ですが、最終的には輸出に切り替えます。途上国側としては武器が必要なので、債務によって武器を買うというシステムが生まれてしまったという背景があります。途上国にとっては、債務返済と軍事支出の二重の苦しみを受けていることになります。日本の場合は、軍事支出だとか武器に対する支出というのは制限していましたので、軍需に使用されるケースは非常に少なかったのですが。

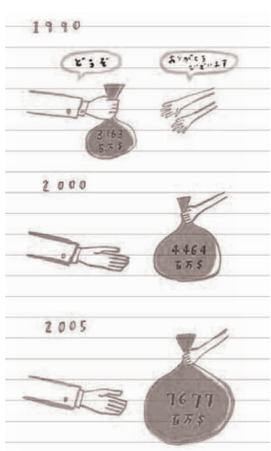
それ以外に借金が膨らんでしまった理由として、金利の問題があります。80 年代は世界的に高金利時代だったのです。途上国というのは固定金利ではなくて

変動金利（その時々の金利情勢で変動する金利）で借り入れていたのです。80年代のアメリカ大統領だったレーガンは、アメリカの経済立て直しのために高金利政策を導入しました。ドルの金利が高いとドルを持っていれば得だから、みんなせっせとドルを買いますよね。それで、結果としてアメリカにいっぱい資金が流入するというふうに見込んで、レーガンさんは高金利政策を取ったのです。債務はドル建てです。アメリカが高金利政策を取ったことによって、世界はドル通貨ですから一気に高金利の時代が生まれてしまった。途上国も高金利で返さなくてはいけない。約８～９％の金利がついていたといわれています。例えば１万円を借りて、毎年 1000 円ずつ返すとします。無利子だと 10 年間でちゃんと返せますよね。9% だと何年間かかると思いますか。約 30 年かかるわけですね。債務に対して一番高いときには瞬間的に 20％の金利がついたのです。これはもう最近のサラ金以上です。それほどの高金利を途上国は直撃してしまった。

実際にアフリカはここ 30 年間で 5400 億ドル借りて 5500 億ドルは既に返しています。でも、まだ 3000 億ドルの借金があるのです。5400 借りて 5500 返したけど、まだ 3000 億ドルの借金がある。これは全部金利のせいなのです。金利の影響というのは非常に大きいです。

特にアジアの国々は、為替（レート）の影響が大きいです。アジアの国々は日本から援助としてお金を借りる場合、円借款といわれるように円で借ります。円で返さなくてはいけません。為替が変わると、もちろん返済額も変わってきます。例えば、私が１ドル 100 円の時代に 100 円借りたら、１ドル用意すればいいのですね。100 円返すためには１ドル用意すればいい。それが、為替が変わって１ドル 50 円に下がったとします。そうすると、100 円借りているから 100 円返すためには、２ドル用意しなくてはいけない。為替のために２倍のお金を返さなくてはいけないことになります。昔、１ドル 350 円だった時代というのがありますよね。それが、今や１ドル 100 円という時代なのです。もし当時借りたお金があるとすれば、現在の返済負担は 3.5 倍です。

その為替のリスクは、借りた側が全面的に受けます。皆さんドルで借金したいですか。例えば、1000 ドル借金し 10 年後に返すとします。為替が変動するとしたらどうしますか。怖いですよね。為替の影響で将来的には 2000 ドル返すことになるかもしれません。為替のリスクは非常に大きい。実際に為替は２倍以上変わり、債務負担額は２倍になりました。為替や金利の変動によるリスクというのは、すべて借りた側が 100％負います。これは今でも議論になっていることです。借りた側というのは基本的に貧しい国々ですから、為替や金利の変動のリスクというのは、貸した側と借りた側の半々が負うべきではないでしょうか。借りた側の貧しさの状況を考えると、そのリスクを途上国に負わせるべきではない、という意見もあります。リスクがあれば途上国は自分たちの返済計画をたてることが難しくなります。



債務による人権侵害

現在の議論は、債務による人権侵害が中心になっています。債務返済のために人々が教育・医療費を削っています。子供の命を犠牲にして支払っている状況なのです。例えば日本の会社が倒産したとしても、従業員が自分たちの子供の教育費や食べる物を減らしてまで、会社の借金を返すことはありえません。皆さんは破産法で守られています。自分の命を含む基本的な人権を奪われてまで返済しな

くてはいけない借金はない、というのが一般的な経済慣行なのです。当たり前のことなのです。でも、国と国との借金の契約においては、それが成り立っていません。基本的人権を侵している今の貧困レベルにおいても、債務返済が優先されている。要するに、基本的人権の考え方からいうと、今債務返済を強いるのは基本的人権侵害なのです。国際法に違反するという意味で、過剰な債務返済の負担を求めてはいけないという点が一つ。だから、返済不可能な債務は帳消しにしなさいというのが一つ。さらに帳消しにするときに、構造調整といった貧しい人々に大打撃を及ぼすような条件づけはやめましょう、という議論がおこっています。

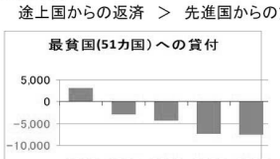
もう一つは、貧しい人々は債務から殆ど利益を得ていません。債務は利益を受けた人が返済するべきではないでしょうか。ケースによっては独裁者のポケットに入った独裁資本です。インガ・シャバの送電線のケースのように、結局は受注を受けて工事を行ったアメリカ企業やモブツ大統領が利益の多くを受けている。一般の人々は利益を受けていないのです。債務というものは「利益を受けていない人々から取り立てること自体が道徳的に反する」のです。そこで現在の債務が本当に人々の役に立ったのかどうかを監査し、それが人々の役に立っていない、国民の税金を使って返す必要性がないと判断された場合は、帳消しにすべきであるという議論がなされています。

実際、フィリピンの国会は債務問題で注目を集めています。フィリピンの国家予算の 40 ～ 50％は債務返済に占められています。負担としては大きすぎます。マルコス時代やアキノ大統領時代の債務について、国民の負担で返す必要があるか検討されました。きちんとした借款契約と使用について、疑わしいケースが 12 件国会に提出されています。その 12 件のプロジェクトに関しては、監査が終わるまでは利子の支払いをとりあえず停止する、という法律がフィリピンの国会を通りました。その 12 件のうち、日本が融資しているものは 5 件ありました。

貸した側からも唯一ノルウェー政府が動き出しています。2007 年にノルウェー政府は、エクアドルその他 5 か国に貸し付けたお金の一部を無条件で帳消しにしました。ノルウェーは造船業不況で困っていた時期がありました。その造船業界を助けるために、途上国のニーズに添わない船というのを債務によって受注しました。つまり貸し付けたお金で途上国側から発注させたのです。これによってノルウェーの造船不況は一部救われました。しかし途上国側に債務は残ったのですよ。ノルウェー政府は、それは途上国のニーズに従ったものではなかった。それは、私たちノルウェー国の造船不況を助けるための貸し付けであって、彼らからそのお金を取り立てるのは不正である、と全面的に認めました。ノルウェー政府はその債務は帳消しにしました。自分たちの利益で勝手にやりました、ということを正式に認めたのです。

これは私達 NGO にとって非常に大きな動きでした。ボリビアなどの途上国は、債務削減、帳消しを、教育や医療に国費を回し始めました。実際にそれは貧困の削減に効果を上げています。ザンビアは、一部債務の返済の猶予を受けて医療サービスを無料にしました。そのザンビアの村の女性がロイターのインタビューを受けて、「もう夢のような、信じられないことです。お金がなくてもお医者さんに行ける。村のみんなに一刻も早く知らせたい。」と答えていました。債務の帳消しによって還元された資金がきちんと貧困削減に使われたら効果がある、ということは実証されています。

■資金の逆流
途上国からの返済 ＞ 先進国からの貸付



2008年のG8サミットなどで、アジアの人たちがこう言っていました。「やはり日本はトップの債権者だから、この債務問題は何とかしてほしい」と。貧困をなくすためにお金は必要です。当たり前です。しかし、お金は足りないのです。貧困をなくすために必要な資金というのは、まず？債務を帳消しして予算を浮かすこと。それが大前提です。その次に？援助額を増やす。？航空税や環境税、為替取引税などの新しい国際的な税金をかけて資金を創出する。この３段階しかありえません。そのような議論が進んでおり、最後にご紹介した国際的な税金は、実際に動きが出てきています。だけど、その前提となる債務の帳消しについてはまだ進んでいません。援助の増額に関しても全く進んでいない状況です。ＮＧＯはこの間のサミットで訴えましたが、各国財源がないということで援助は贈与ではなく借金をする方向にしかいかないのです。だから、結果として援助は、見た目は増額されているけれども、結局それは借金。貸し付けでしか増額されていないので、失望は大きかったです。また債務の鎖に巻き込まれるのかと。援助はできるだけ贈与にしてほしいというのが多くの人々の声でした。

「でも、やっぱり借りたものは返さなきゃいけないでしょ」という意見をよく聞きます。だけど基本的人権を奪ってまで返さなくてはいけないお金はありません。ここまで人々の生活に実りをもたらさなかった借款、債務とは何だったのでしょうか。今度の貸し付けの場合は貸し手側がきちんと責任を取ってやりましょうというようなルール作りが、まず必要なのではないかと思っています。

長い間聞いてくださり、分かりにくかったところもあるかもしれません。どうもありがとうございました。

質問者

お話ありがとうございました。先ほど最後に言われように、借金を返すためにまたお金を借りて、結局それで借金が増えて、という負のスパイラルみたいなところにはまりこんでいるのかなと思うのですけれども、途上国のほうで借りないための動きのようなものはあるのでしょうか

普川

借りない動きというのは、まずないのです。借りないと国家予算が回りませんから。日本だってそうですよ。国債でお金を借りないと、国家予算が回りません。途上国の場合、国債は発行できません。支出がある以上借り入れをしないという選択肢はないです。ただし「返さない」という動きはあります。ペルーのガルシア大統領の時代にあったのですが、国際政治の力にはかなわず実行できていません。現在ここまで債務問題がひどくなったために、国際ステージでもある程度認識されてきました。貸し手側が削減なり帳消しを認めようという動きは進んできています。それは喜ばしいことです。ただ問題が二つあって、一つは構造調整がセットになっている。もう一つは、貸し手側の責任というものが全く問われないことです。私からの重要なメッセージ一つに、貸した側の非を認めるべきだということがあります。銀行だったらリスクを精査して貸します。それが返済されなかったら、貸した側の責任ですから不良債権化します。だけど国の場合はそうならない。貸し手側もその責任を負いなさい、ということを私はお伝えしたかったのです。先進国側は「私たちとってもいい人たちだから、債務削減を考慮する」

という態度なのです。貸し手側の責任というのは全く問われない場合、幾ら債務を免除しても、債務を幾ら帳消しにしても、結局同じことが繰り返されるのではないか、という懸念があります。

質問者

今の話の続きで、では、貸し手側の責任を問うという話しのときに、貸し手側が貸すときに国内でやっているような審査をして貸した場合に、貸せる国があるのですか。

普川氏

タイムリーなご質問です。全くおっしゃるとおりです。貸し手側の責任もあるのですけれども、借りている国の場合、経済運営にしても政府の腐敗にしても、貸せない国が多いのは事実です。だから、「貸すな」というのが一つの議論なのです。特に教育・保健セクターは、基本的に投資をして利益を生むプロジェクトではないので、それはそもそも借款、貸し付けという性格にはそぐわない。本来ならばいわゆる借款ではなくて贈与がふさわしいプロジェクトのほうが、ニーズが高いのです。ということで、今の経済運営から考えても、そのプロジェクトの種類・性質から考えても、借款ではなくてできるだけ贈与に切り替えるべきだという議論があります。

確かに、りっぱに債務を返済しようとしている国はないとは言えないですよ。例えば、ベトナム。ベトナムも非常に借金の多い国です。ですが債務帳消しを拒否し「返します」という国です。例えば戦後まもない日本も世界銀行などからかなり借金しましたけれども、高度経済成長が伴って返済することができました。こういう場合は、もちろん貸してもいいと思います。ただ、現在のアフリカは民主化が進んできているとはいえ、巨額のお金を必ず利益を生む形で投資をするということが担保された国とはいえないと思います。

質問者

最貧国をどうにかレベルアップをしてあげようということの働きをされているのでしょう。お金を貸せばいいのではなくて、今、教育・医療への援助は必要です。もう一つ、飢えが多いという問題もあります。そうすると、地産地消、大きな視点で言えば自国自消です。債務国に生産技術とか、自国自消のためのツールを与えることも援助かと思います。ペシャワールがいい例ですよね。そういう議論に結びつけたいです。

普川氏

同感です。経済規模から考えてもそうだと思います。

質問者

所属していらっしゃるNGOでは債務をなくすために具体的にどのような活動をされているのですか？

普川氏

具体的というか、方向性は二つあって、一つは皆さんに伝えること。債務問題に関して伝えることで、例えばこういう『280億円はたったの4日分に過ぎない』

というパンフレットを作りました。新聞社の人に頭を下げて記事を書いてもらうこともありますし、講演会による活動もしています。日本は最大の債権国ということを、国際的に特にアジアの人々はよく認識しています。その思いとは裏腹に日本国内では債権者としての情報があまりにも少なすぎる。日本の債務というものがこれほど人々の生活を苦しめているということ自体を、あまりにも債権国の人間が知らなすぎるのです。できるだけ多くの人に知ってもらいたいということが、まず第一点。

もう一つは、これはなかなか難しいことなのですけれども、日本政府を変えるしかありませんので、外務省や財務省の人たちに話しをしに行きます。G8 サミットのときなど、貧困問題というのは必ず話し合われますから、債務帳消しや構造調整をやめる決定を下してくださいということを、政府にお願いに行きます。もちろん、外務省とか財務省に世界の市民社会の世論を紹介しに行きます。官僚レベルを動かすのは非常に難しく、政治家を動かす方が速いのです。政治的な鶴の一声が効くというパターンがありますので。実際は成功していません。各参議院も衆議院も ODA 調査委員会があり、その関係議員に途上国 NGO との面会を求めるコンタクトをとります。実際に今回 G8 サミットのときに、主にフィリピンの人たちを連れて国会議員の人に 会いました。

司会

地産地消という非常に身近な言葉が、実は世界問題につながっている。自分の国のものを食べる。私たちも食べる。貧しい国の人たちも食べるという世の中にしなくてはいけません。債権国である日本人がこれを分かっていないと根本的に変わらないと、個人的には思っています。最後にこの現代ＧＰをとりまとめていらっしゃる農学部の中司先生のほうから、ごあいさつをしていただきたいと思います。

中司先生

どうも普川さん、ありがとうございました。まず、なぜ国家の援助なのか。その国家の援助というのは括弧つきの「援助（ODA）」ですね。いわゆる、助けるということではなくその裏には、特に債務・債権というものを引き起こす問題が起こっている。この債務問題が、地産地消 (自産自消) を崩すということです。債務問題は地産地消につながる世界的な社会問題になっているのです。これが、食糧生産の循環を破壊しているのだということは間違いないのだと思います。それでは、債務を再生産させない構造をどう作るのかというのは、大変難しい問題にあると思います。身近な例で、例えば先ほどモブツ大統領や、朝鮮民主主義共和国の金正日がいます。そこの為政者、権力者の体制や独裁者へのリベートが問題です。これは日本をはじめ、大部分の先進国の経済的な構造にかかっているので、なかなかそこを打破できないのです。しかし、私たちがこれからどう考えていくかというと、やはり足元から考えていかなくてはならないと思うのです。まず、債務、債権というのは、今、振り返ってみますと、格差が拡大する日本において、二重三重に同じ構造が出ているのではないかと思うのです。つまりどこに、その債務、債権が起こる問題点があるのかということを認識しなくてはいけない。私たちの周りでも毎日ご飯がなかなか食べられないというかたも、今はできてき

ているわけですね。日本の豊かな食糧を本当に享受できないという事情ができてきているわけです。

世界レベルの問題を、身近で個別な自分たちの問題の中に見いださねばならない。ここで私たちが考えなければならないのは、足元をどう見るかということだと思うのです。同じ構造が足元に、地域に来ているのです。その時、地域文化をどう共有していくか、貧困の社会の海外の文化をどう尊重していくかという文化の問題。それから、やはり根本は命をどう大切に守っていくか、命をどう愛おしんでいくかという「心」に出発点を見いださねばならない。これは今の私たちの周り、日本を見ても、あるいは大きな世界構造を見ても、共通のところだと思うのです。やはり皆さん自身がその大切さのもと、命の愛おしさとか基本的人権とかいうことをもとに、問題を解決する人材となっていただきたい。私はそういう人材を育てていきたいと思っております。地産地消を実現するにはやはり貧困をなくしていくとか、文化を理解するとか、その根底にある命のいとおしさを理解すること。「大地」から育まれるものをみつめ、足元から出発してはどうかと思っております。

(2008 年、 ハーブガーデン・プティール倶楽部)

＊図版は『280 億円はたったの 4 日分にすぎない』（アジア太平洋資料センター 2008 年）より出典

普川　容子（ふかわ　ようこ）
一橋大学法学部国際関係課程卒業。London University, School of African and Oriental Studies　(SOAS) ディプロマ課程卒業。University of East Anglia(UEA), School of Development Studies 修士課程修了。エッソ石油財務調査本部勤務、NGO「ﾋｭｰﾒｲﾝ・ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ・ﾈｯﾄﾜｰｸ」事務局長代行、ジュビリー 2000 債務帳消し日本実行委員会広報担当等を経て、（特活）アジア太平洋資料センター理事。主な著書・論文に「トルコ人女性が向き合う二重の壁」（内藤正典編『トルコ人のヨーロッパ～共生と排斥の多民族社会～』明石書店）「米国 /EU　遺伝子組み替えをめぐる貿易紛争」（月刊『オルタ』2004 年 2 月号）「インド・ケーララ発　市民力　－ IRTC の取り組み」（月刊『オルタ』2004 年 8/9 月号）「GATS　サービス貿易の自由化」（月刊『オルタ』2004 年 12 月号）「IMF と世界銀行：日本のかかわりを知っていますか？」（『NI-Japan』2004 年 3 月号）『徹底検証ニッポンの ODA』（共著、コモンズ）

アンケート

参加総数　43 名　（うち回答者数 14 名）

満足	9 人	65%
やや満足	2 人	28%
普通	0 人	0%
やや不満	1 人	7%（もっと多くの人々に聞かせたい）
不満	0 人	0%

■講演会感想

● ODA の一部が貸付であったことを知らなかった。

●貸し付け条件としての構造調整が、地産地消を崩していることが驚きだった。(工学府・男性)

●世界規模での貧困や債務を考える前に、自国のもっと身近なところでの問題を考えていくことが、世界の問題を解決する道筋だと思いました。（情報設計・女性）

●債務返済で問題がある部分は、さかのぼって監査すべきであるし、基本的人権を奪ってまで返済を迫るべきではない。また、利益を受けていないものが、債務を負うべきではないと思う。(一般・70 代・男性)

●自国の食べるものは自国でまかなう仕組みが必要。「お金」で解決する以外の方法を提案できないものか。(一般・50 代・男性)

●日本が「ベニスの商人」のシャイロックとして見られないよう背筋を伸ばし直さなければ。(一般・50代・男性)

●これほどお金で世界が動いているというのは、実はものすごく異常なことなのかもしれません。「1 日 1 ドル以下」の基準とは関係なく、豊かな生活を営んでいた所まで、世界経済の暴力に巻き込まれていることを思うと、私自身にも決して無関係ではない問題だと思いました。(学生・女性)

●経済・食べ物・命・・・ 世界の循環という見直す必要がある。（芸術工学府・女性）

●債務の問題について知らなかったことを聞けてよかった。学校では「貸付」にしているのは「贈与だと相手国のやる気がなくなるから」だと習いましたが、逆に負担となっていると知り、ショックを受けました。(一般・10 代・女性)

●命を削ってまでの負債は、やはりおかしいと強く思います。あまりに大きな問題で呆然としますが、まずは知ることと、それを伝えていくことが私の出来ることかと思う。（一般・40 代・女性）

●世界の貧困が債務によるものだということを、今日初めて知りました。中学・高校でこの問題について学びましたが、債務について触れられることは全くありません。ぜひ高校などで講演をしてほしいです。（高校生・女性）

●国対国の問題の実態は、潤う特定の企業と、犠牲になる市民という図式になっている。経済・貨幣のあり方に壁の厚さを感じ、自分の出来ることを考えたいと思う。(一般 40 代・女性)

■学生のアートワークショップについての感想

●とても美しくクリスマスの気分になりました。

●灯火を置き換えることと、講演のテーマとの結びつきが世界的な視点で面白い。地産地消や自産自消と身の回りのことと合わせて考えたい。

●とてもシンプルですが、わかりやすかったです。もう少しゆっくり見ていたかった。

●ぱっと見て「かわいいな」と思いましたが、意味を知って、深いなあと感じました。

●全員でという感じがあるともっと良かったと思う。

●深遠さが内包されています。

●面白い伝え方だと思う。

●世界の貧困を考えるきっかけになると思う。

田中　優　（未来バンク事業組合理事長）

「環境破壊・温暖化を引き起こす社会システム」

本講演は参加者の実感に訴える鋭さを持ち、クリエイティビティあふれる優れた社会デザインを示した。

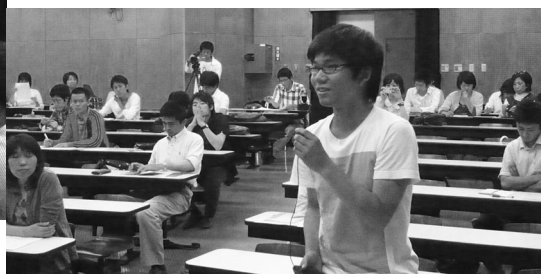
まず田中優氏は温暖化社会と、資源をめぐる国家的利己主義と戦争・世界貧困との相関を暴いた。またポジティブ・フィードバックやピーク・オイル問題が顕在化するのは間近であることを言及。観念的な言説は極力用いずに、詳細なデータ調査によって問題の「原因」を明示し、温暖化防止の糸口を具体的に提示した。

例えば京都議定書の二酸化炭素排出量削減目標は、企業が使う電気料金の仕組みを変更すること、または発電所の稼働効率にトップランナー方式を加えることだけで達成できることなどを指摘した。また家庭における二酸化炭素削減については省エネを優先することを強調し、田中優氏発案のユニークな活動（市民主体の融資、森林保全に繋がる住宅作り）など新しい社会の仕組み方が次々と紹介された。

さらに「国境を越える燃料に税金がかからない」ことがグローバリゼーションを加速し、運輸に伴う二酸化炭素排出を増加させている事実を示した。よって「地産地消」は温暖化防止の切り札である。

社会へのアプローチは、縦（政治との関係）と横（広く周知する）が従来のものだが、もうひとつは斜め（オルタナティブな方法を提示し実行する）という方向がある。最後に田中氏は以下のように学生に語った。「生活の中に " 資産 " を増やし、組織や金銭に依存しない生き方は可能である。資産とは所有して利益を増やすものである。自分の能力を高め多様な収入源を確保すること。さらに支出を減らすものも資産であり、省エネや自然エネルギーの自給などもこれに含まれる。自分なりのアウトプットを見つけ、多くの人々に自分の思いを届けてほしい。」高い知見による卓越したプレゼンテーションに、参加者の集中は始終途切れることがなかった。（知足）

2008 年 5 月 10 日



活発な質疑応答風景

みなさん、こんばんは。田中優と申します。

今日のテーマは「環境破壊・温暖化を引き起こす社会システム」です。

まず「地球温暖化問題」について、そしてこれと深い関係をもつ「戦争」の現状についてお話します。みなさんがこれから生きようとする社会の構造的問題を明らかにし、その解決方法についての具体的にみていきます。

地球温暖化

最初に地球温暖化について話を進めます。私は今年の３月に南極に行ってきました。実は南極は歴史が浅く、わずか 200 年前に見つかったばかりです。200 年前に南極を見つけた人々は「ここに大陸があるかもしれない」と言いました。「ここに大陸がある」と断言できなかったのです。なぜかというと全て氷に覆われていたため、その下に陸地があるかどうかわからなかったのです。現在では、南極大陸はオーストラリア大陸の約２倍もある巨大な大陸であることがわかっています。南極の氷の下からは陸地がみえています。氷には次々とヒビが入り、海にずるずる落ちている状態です。もし今初めて探険家が南極を見つけたならば、最初から「南極大陸はある」と言うでしょう。かつては氷に覆われて南極大陸が、いまや氷がどんどん解け陸が見えるのです。私は南極に船で行きました。南極では「アイス・パイロット」という船長の上に位置するパイロットを配置しなければなりません。なぜなら氷山にぶつかれば船はおしまいです。氷山をよけるためにアイス・パイロットを雇うのです。今回雇ったアイス・パイロットは 1000 回以上も南極に行き、おそらく地球上で最もたくさん南極を見ている人でした。その人に「地球温暖化進んでいますか」と尋ねると「進んでいるなんてもんじゃない。昔はこんな大きな船で行けなかった。氷が解け氷山も流出し、今ではこんなところまで人々が入っていけるようになってしまった」そう言うアイス・パイロットに「地球温暖化防止について人々がやっと動き始めているが間に合うだろうか」と聞くと、彼は「もう間に合わない。人の努力なんてピーナッツみたいに小さなものにすぎないから」と答えました。ところが、日本では地球温暖化問題に関して「たいしたことない」という人もいれば、「嘘だ」と言う人すらいます。ところが現実には、南極の氷は本当に溶けています。以前は南極の気温が 0℃以上になることはありませんでしたが、今では年間約 20 日間も気温 0℃を上回る日があります。そのため、昔捨てたゴミが、溶けた氷の中から現れるようになりました。その結果ペンギンがゴミに引っかかってケガをすることもあります。南極では実際に温暖化は起きています。地球温暖化がうそだという説は、いったいどこの話なのでしょうか。

さて次は北極の話です。私は来月初めて北極に行きます。これは昨年３月の北極の氷の様子、そしてこちらが昨年９月 16 日の様子です。（写真の比較）こんなに解けています。北極の氷は毎年９月に１番溶けるので、もしかすると毎年このくらいは溶けているのかと思い調べました。これが５年前の９月の氷の様子です。昨年の９月と比べても５年間でこんなに氷が縮んでいることがわかります。

海の上の氷が溶けても海面は上昇しませんが、グリーンランド上の氷が溶けると、地球全体の海水面が６ｍ～８ｍくらい上昇します。これまでグリーンランド上の氷は、数千年先まで溶けないと言われていました。しかしこの勢いで氷が解け続けると「2012 年には夏場の北極の氷は消えるだろう」と言われています。北極の氷上でしか狩ができないホッキョクグマは、絶滅に向かって進んでいるの

です。予想をはるかに超えて地球温暖化は進んでいます。

北極圏の温度分布を見ると、1961 年 9 月では例年と比較して気温が下がった場所と上がった場所の面積は、ほぼ同じです。ところが昨年 2007 年 9 月では、全域でかなり気温が上がっています。北極圏の極点付近では特に温度が上昇しています。昨年夏カナダの北極圏を熱波が襲ったときは気温が 22℃まで上昇しました。

しかし、IPCC は未だに「グリーンランドの氷が溶けるのは数千年先だ」と言っています。IPCC の発表では 2050 年に北極の氷は 450 万平方 km まで縮むと予測していましたが、昨年 2007 年に 419 万平方 km まで縮んでいます。予測の 50 年先をいっていることになります。アラスカの写真を見ると海の上に氷があります。この海上の氷に光が当たると約 90％反射して、宇宙に帰っていきます。ところが氷が溶けて海面になると、光は 90％以上吸収されて海を温めます。海水温が上がるとさらに氷が溶けて、光が反射されなくなる。これを悪循環＝ポジティブ・フィードバックとよびます。このポジティブ・フィードバックがあちこちで始まりかけています。

例えば、シベリアの永久凍土はどんどん溶けています。この原因は日本のための木材伐採です。木材を伐採した場所に日光が当たり永久凍土が溶けています。凍土が溶けると小さな池ができます。小さな池が広がって湖の広さになると、地中からメタンガスが吹き上がってきます。メタンガスとは天然ガスのことです。天然ガスはシベリアの森の下に、地球上最も多く埋蔵されています。このメタンガスは二酸化炭素の 20 倍以上の速度で地球温暖化を進めます。こうして温められた永久凍土はさらに溶けていく、という悪循環が進んでいます。

この悪循環があちこちで進むと、人間の力では止められなくなります。悪循環が本格的に始まるのはいつ頃になのでしょうか。始まれば人々はおそらく 100 年後、300 年後に滅びることになるでしょう。取り返しがつくとしたらこの 10 年です。この 10 年間で社会が変えられなかったら、その後の未来は自動的に滅びることになると思われます。

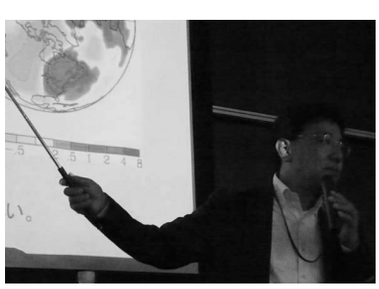
地球温暖化の父と呼ばれる NASA のハンセン博士は、2 年前に「あと 10 年」つまりあと 8 年（2008 年現在）で悪循環が始まると言いました。この悪循環は始まってしまうと止めることができません。雪山で雪玉を落とすようなものです。雪玉を落とす前ならば片手でも止められます。落ち始めたらもう人間には止められない。その悪循環のスタートが始まる前に社会を変えなければもう手遅れ、という時代になるのです。

昨年出版した本の中で私がこのことを指摘すると、批判を受けました。「あなたは危機感を煽りすぎる。あなたの言説は IPCC のデータを超えている。科学者のデータ以上のことを言うべきではない」と。それでは科学者の言説のレベルをみてみましょう。最悪のシナリオとして IPCC が示した大気中の二酸化炭素量の推移を予測したグラフです。これに 2005 年からの実際の数値をのせてみます。IPCC が予測するグラフ曲線の上がり方より、現実の曲線の上がり方のほうが急です。この現実的数値の推移曲線を 2100 年まで延長すると、IPCC を信じていては温暖化防止が間に合わないことがわかります。これが現実です。科学者と心中してもかまわないという人以外は、自分の頭で考えないかぎりアウトになるでしょう。

さらに深刻な事態があります。二酸化炭素を吸収するものは「植物」です。植物が吸収している二酸化炭素量は変わっていません。さらに植物の 2 倍も二酸化炭素を吸収してくれるのが「海」です。ところが海が二酸化炭素を吸収する量はどんどん下がり続けています。現在、南太平洋は全く二酸化炭素を吸収していません。北大西洋も全く吸収していません。あちこちの海が二酸化炭素を吸収しなくなっています。しかし海が二酸化炭素を吸収し過ぎても、吸収しなくてもどちらも地獄なのです。もし海が二酸化炭素を吸収し続けた場合、海水は炭酸水のようになります。この炭酸水にサンゴを入れると溶けてしまいます。サンゴはカルシウムと二酸化炭素でできているので、サンゴが溶けると二酸化炭素が大量に発生します。一方、海が二酸化炭素を全く吸収しないと空気中の二酸化炭素が増え続けます。どちらに転んでも地獄なら、二酸化炭素を出さないようにするしか方法はありません。

地球温暖化についての権威といわれる日本の有名な科学者は、今のところ地球温暖化による被害者は出ていないと言っています。そこで現実に出ている被害者の状況を紹介します。チベット・ヒマラヤ地域を衛星写真で見ると、氷河の周辺に青い部分ができていることがわかります。これは氷河が溶けてできた水溜りなのです。水溜りといっても日本のダムのサイズです。これらは「氷河湖」と呼ばれています。この氷河湖が 50 年間で新たに 4997 個生まれました。これ以外にできた 20 個の氷河湖は崩れて、ふもとの人は土砂に揉まれて村ごと消えてしまいました。被害者の死体も見つかりませんでした。既にこのような被害が起こっています。そしてこれから 50 年の間に残る 4997 個の氷河湖全てが壊れます。ですから、安全な日本にいて「地球温暖化の被害はない」と言う科学者には、この氷河湖の真下に家を建てて住んでいただきたいですね。自分はリスクを背負わずに、好き勝手なことを言われてはかなわない。ちゃんとリスクを背負って発言しなければ、とてもじゃないが無責任です。

しかし残念ながらこのチベットヒマラヤ地域の氷河の溶解は止められそうにありません。この地域は日本の 10 倍の速さで温暖化が進んでいるからです。日本の国土は 7 割近くが森に覆われています。森にはエアコン効果があります。森があると夏は涼しく冬は暖かいのです。それは森自身が温度をコントロールしてくれるからです。ところが森がない地域では地球温暖化の影響をもろに受けます。北極や南極、砂漠地帯、海に囲まれた島嶼部も同様です。たとえみなさんが「地球温暖化を止めよう」と今日から全く二酸化炭素を出さないとしても、残念ながら大気中の二酸化炭素は 100 年間残るのです。だから今私たちが被害を受けている状況は、この 100 年間の累積なのです。今排出している二酸化炭素によって、後 100 年間は被害が続くことになります。だからこのチベットの被害も早々に止まるものではないのです。さらに深刻な事態が起こります。IPCC の報告書には、今後地球上で 20 億人から 30 億人の人が移住を余儀なくされるといっています。このヒマラヤ地帯から流れでている川は何でしょうか。インダス川、ガンジス川、チャオプラヤー川、メコン川、長江、黄河。ヒマラヤ地帯はアジア全域の水源なのです。このまま温暖化が進めばそれらが全て涸れます。この河川地域には人が住めなくなります。この地域は世界で最も人口が多いところです。なおかつ地球上で唯一持続可能な農業を行っている地域です。そこが水を失うのです。必然的にここに住んでいる人たちは引っ越さなくてはいけませんね。しかし移住先はあ



りません。このままでは国境線を血に染めることになっていくと思います。アメリカのシンクタンクは昨年 11 月にこう発表しています。「今後大量移住は国家安全保障の政策立案者にとって最も懸念すべき問題になるだろう」と。たとえ被害が起こって国外に移住する必要があっても国境を越えられない、つまり移住先がないのです。地球温暖化は現実の問題として既に起こっています。それでも温暖化は起こっていない、現実の被害はないと言っているのは日本だけです。

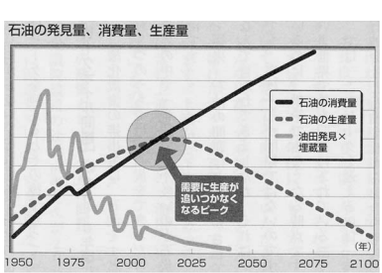
エネルギー問題

地球温暖化を起こしているのは化石燃料です。石油、石炭、天然ガスを使ったことの結果です。この石油についてこれから巨大な問題が起こります。これがピーク・オイル問題です。最も深刻であるにもかかわらず、認知度が低い問題です。

世界の巨大な油田は 1980 年以前に全部見つかっています。今後も見つかりません。地質学的に調査済みなのです。地球上ほぼ全ての油田は発見し終えています。ただ唯一の例外が北極と南極です。特に北極には未開発の油田の 25％があるといわれています。今後北極圏の油田を巡って戦争が起こるかもしれません。昨年 9 月にロシアが北極の地下 4000m に国旗を立てています。極地以外の油田は既に見つかっており、今後新たに発見される大きな油田はありません。

それに対して、石油の消費量は年々増え続けています。1973 年、1979 年に起こったオイルショックの時に少し減りましたが、その後は増え続けています。ひとつの油田から採れる石油量は、採掘開始後から伸び続けていくわけではありません。途中で爆破や海水注入、二酸化炭素注入でさらに増やすことができますが、ピークを迎えるとその後急に採油量は激減します。シェル石油のハバート氏は 1957 年に「アメリカの油田は 1970 年初頭にピークを迎えるだろう」と言いました。当時は誰も信じませんでした。しかしアメリカの油田は 1971 年にピークを迎え、その後採油量は下がり続けています。油田にはピークがあると予測した「ハバート曲線」はこの事実をもって立証されました。

もう一度確認します。大きな油田はもう新たには見つからない、石油の消費量はぐんぐん伸びている、石油の生産量はピークを迎えると急激に下がっていく。従来、石油がなくなるのは 30 年後とか、50 年後とか言われてきました。つまり人々は石油生産量が底をつく地点を問題にしていました。しかし石油が問題を起こすのは、石油が無くなってしまう時ではありません。石油の消費量が伸びて行く最中に、生産量がピークを境に下がり始めたときなのです。この時、世界中で石油が足りなくなってパニックが起こります。この時点を「ピーク・オイル」と呼びます。ピーク・オイルについて、多くの学者は 2010 年頃にくると言ってきました。ところが最近「既に来ているのではないか」と言う人が非常に増えています。ピーク・オイルは起きている時点ではわからないのです。その時点でわかることは石油の価格が高騰し、不況になるということだけです。まさに現在がその状態ですね。とにかくあと 2 年内にピーク・オイルがきた場合、石油を握っている者は必ず金儲けができます。石油に関する事業は最上流の油田から下流のガソリンスタンドまでありますが、最も儲かるのは油田です。国別に石油の確認埋蔵量をみてみましょう。上位に位置するイラク。未だにアメリカに支配されています。イラクは大量破壊兵器も持っていませんでした。またニジェールからウランを密輸しようとした事実もありませんでした。それはブッシュ大統領も認めています。ならばブッシュは謝罪してサッサと引き上げるべきです。「ごめんなさい。



僕の勘違いで侵略してしまいました。5年間で100万人殺してしまいました」と言って去っていくべきです。ところがアメリカは、いまだにイラクから撤退しません。なぜでしょう。「イラクは石油を持っている」からですね。次にアメリカが襲おうとしているのはイランです。アメリカがCIAを使ってチャベツ大統領を幽閉・暗殺しようとした国が、ベネズエラです。(イラン、ベネズエラは石油埋蔵量の上位国)

実は現在の世界的紛争は、たった5つの要因に集約されます。世界の紛争地には必ず「石油」が採れるか、「天然ガス」が採れるか、「そのパイプライン」が通るか、「鉱物資源」が豊かにあるか「水」が豊かにあるのです。この5種類の地域だけです。

例えば最近チベットが問題になっていますね。チベットには世界で一番高いところを走る電車（青蔵鉄道）が通っています。これは中国政府がチベットから鉱物資源を奪うために敷設した鉄道です。さらにチベットでは石油が発見されました。だからこの紛争も資源問題ですね。

次にハリケーンが襲ったビルマ。ここには天然ガスがあります。20億ドルの利益を40年間生み出すといわれる巨大なものです。この利権を持っている国が中国、タイ、マレーシア、日本です。最近その利権を失った国がアメリカです。ミャンマーという国名は現在の軍事政権が勝手に変えた名前なので、ビルマの軍事政権を支援する国は「ミャンマー」と呼びます。アメリカのように新政権を支援しない国は「ビルマ」と呼びます。日本はミャンマーと呼びますね。天然ガスを奪う側として軍事政権を支援する国だからです。

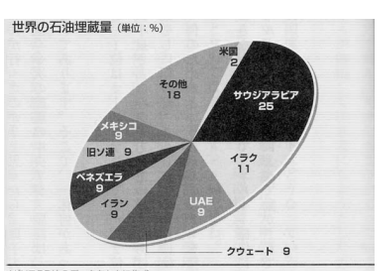
世界の紛争地は資源問題が絡んでいます。例えばアフガニスタンの場合「トランス・アフガン・パイプライン」というパイプラインが通ることになっています。トルクメニスタンで採れる天然ガスをインド洋に運ぶためのパイプラインです。またカザフスタンで取れるウランをインド洋に運ぶ道路も、同じ位置を通ります。

チェチェンという地域はロシアから独立しようとしていますが、そのために人口の半分が紛争によって死傷または難民化しています。ここはロシアから輸出する石油のパイプラインが通る地域です。ウクライナでは大統領がダイオキシンを飲まされる事件が起きましたが、ウクライナはロシアからヨーロッパへ輸出する天然ガスのパイプラインが通る地域です。

インドネシアから独立した東ティモール。ここでは独立直後に発見された「ティモール・ギャップ」という海洋油田が、オーストラリアに勝手に奪われました。実はオーストラリアは、その油田を奪うために東ティモールの独立をずっと支援していたのです。独立した途端、油田は奪われました。

フィリピンのミンダナオ島。ここはアブサヤと呼ばれるテロリスト・グループのためにフィリピン軍と米軍が2万人の軍隊を5年間送っています。ところがそのアブサヤは60人しかいないのです。60人殺すのに、2万人が5年間いる必要があるでしょうか。ミンダナオ島には石油と鉱物資源があります。それを奪うための理由として「2万人の軍隊を駐留させるために、60人のテロリストを守っている」という構造があります。

インドネシアのアチェでも独立したがっている人々がいます。インドネシア沖の津波で亡くなった25万人のうち20万人がアチェの人々です。しかしいまだにアチェには援助が届いていません。「アチェにはテロリストがいるから」とい



う理由でインドネシア政府が入れさせないのです。このアチェこそが、天然ガスを日本に最も輸出している地域なのです。

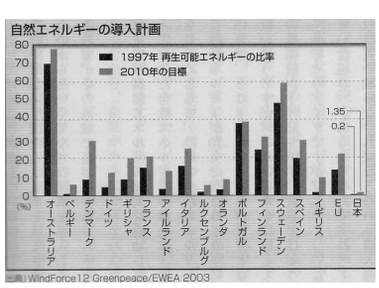
このように世界の中の紛争地は必ず、石油、天然ガス、パイプライン、鉱物資源、水、という 5 つが絡んでいます。では戦争はどうすれば避けられるのでしょうか。「自然エネルギーに変える」ことが最も効果的なのです。

私がそう言ってもあまり説得力がないかもしれませんが、ドイツのシュレーダー元首相もメルケル首相も言っています。「本当のエネルギー・セキュリティとは他国を軍事的に侵略することではない。その国の中で作ることのできるエネルギーに切り替えていくことこそが、最大のエネルギー・セキュリティになるのだ」と。実際ヨーロッパでは自然エネルギーにシフトする方向で動き始めています。日本では「自然エネルギー」というと、不安定で、値段が高く、役に立たない子供のおもちゃのように言われています。しかしヨーロッパは本気です。なぜそう考えるのか。理由は簡単です。もしみなさんが政治家や官僚に会ったなら、一言聞いてみてください。「100 年後のエネルギーは何ですか？」石油はあと 40 年、天然ガスは 61 年、ウランは 64 年しか残っていない。石炭はあと 220 年残っていますが、石炭は天然ガスの 2 倍の二酸化炭素を発生させます。石炭を使えば地球温暖化を加速します。では 100 年後のエネルギーは何でしょう？自然エネルギー以外には存在しません。自然エネルギーは可能性ではありません。必然です。他に選べるものがないからです。ですからヨーロッパの人々はこう考えました。「100 年後は自然エネルギーでなければならない。だとすれば 50 年先までに何をやるべきか。10 年先にはどうなっているべきか。今とるべき政策とは何か」こういう思考を「バック・キャスティング」といいます。100 年後の未来からバックしてキャスティングを決めていくわけです。このバック・キャスティングという思考方法をとれば、自然エネルギーに移行させることはごく当たり前のことになります。ところが世界の中で唯一、いまやっていることにつまらない改善をして、ちょっとしたアイデアを加えて、そちらに未来があるかのように思い込ませようとする国があります。それが、日本です。

軍事費の問題

現在サブプライム問題によって、世界的に金融が儲からなくなりました。そのため世界中が不況です。その最中、世界でたった二つの産業だけは史上最大の利益を記録しています。それが石油と軍需です。今、石油と軍需は世界最大・史上最大の利益を手にしています。

大変不幸なことですが、例えばみなさんの親の世代は「社会に出て一生懸命働きなさい。そうすれば社会はどんどん良くなっていきます」と思っていらっしゃる方が多いと思います。確かに親の世代まではそうでした。豊かでない時代から豊かになっていった時代です。洗濯板が洗濯機に代わり、ほうきが電気掃除機に代わりました。進歩が自分たちの生活をどんどん良くしてきました。そういった輝かしい時代は既に終わっています。

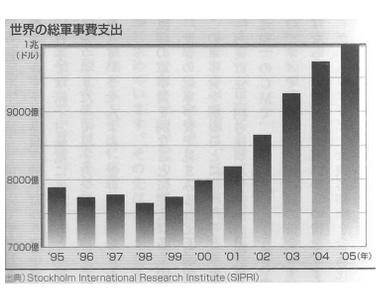


少し前まで最も儲かっていたのは金融です。物を生産する人間は全く儲かりません。金を右から左に動かす人間が儲かっていました。そして金融が不調になっ

た現在、人を殺す産業（軍需）か、二酸化炭素をバリバリ出す産業（石油）だけが儲かっています。収益率最大です。ですから儲けたければこういう産業に関われば最も儲かります。そしてエリートと呼ばれたければ、これらの中で働くことが一番良いことになります。進歩が豊かさになる輝かしい時代は終わったのです。残念ながら今の社会は、一生懸命働くことが社会を悪くします。そういう時代に生まれてきた私たちは不幸ですね。今の社会システムの中で努力することは悪いことに繋がってしまう。だとしたら社会そのものを別な方向に進める以外にないだろう、と私は思います。

つい最近アイルランドのダブリンで行われた地雷禁止条約の会議で、クラスター爆弾が禁止になりました。クラスター爆弾（日本政府は認めてないと言っていた）は大きな爆弾が上空で 200 個に分かれ、1 個ずつ缶のような形で降ってきます。パラシュートが付いてフワフワ降りてきます。そして地上にぶつかると爆発し、非常に硬い金属片を 500 m四方に飛び散らし、人々の肉をえぐります。このクラスター爆弾は兵隊を殺しません。被害者の 98％が民間人です。そのうち 28％は子供です。世界一子供を殺す爆弾なのです。今回やっと禁止になったクラスター爆弾ですが、アメリカは最後まで禁止条約に反対していました。（現在も製作を続けている）この爆弾を最も製作しているのはアメリカの軍事企業「ロッキード・マーティン」「レイセオン」です。ベルギー政府は、その 2 社に融資することを銀行に対して禁止しました。ところが日本は禁止していません。クラスター爆弾を作る企業に最も融資している銀行は三菱東京ＵＦＪ、みづほ、三井住友です。この 3 つの銀行だけで 5000 億円も融資しています。もしみなさんがこれらの銀行に口座を持っているとすれば、世界中の子供達を殺すことに貢献することになるのです。

現在、軍事費は増え続けています。もし軍事費を別の用途に使ったらどうなるでしょう。例えば途上国の借金をなくすことができます。4 年ほど前に「ほっとけない世界の貧しさ」という運動がありました。ホワイドバンドを手首につけ、3 秒に 1 人死んでいく途上国の子供達をイメージさせるために、3 秒に 1 回指をならすのです。みなさんは貧困に苦しむ途上国の子供達が、どういうシチュエーションで死んでいくがご存知ないと思います。フィリピンのミンダナオ島では、子供達がたわわに実ったバナナ畑の隣で死んでいきます。パイナップル畑の隣で飢えて死にます。なぜならそれらの食料は、自分たちが食するものではなく輸出するためのものだからです。フィリピンがフルーツカンパニーに独占された理由は、すぐそばに日本という大消費地があったからです。フィリピンは、なぜそうしなければならないのでしょうか。それはフィリピンが外国に借金をしてしまったからなのです。外国からの借金はフィリピンのペソでは返済できません。外貨で稼いで、外貨で返さなければ受け取ってさえくれません。だから外貨を稼ぐために輸出できる品物が必要です。それバナナやパイナップルなのです。そのため地元の人は自分たちの畑を失い、食べることができずに飢えて死んでいきます。だから飢えて死んでいく人を救いたければ、途上国の借金返済を免除してやることが一番重要です。日本のホワイトバンド運動の時に流行った言葉は「ほっとけない世界の貧しさ」でした。でもこの言葉ちょっと違います。現在途上国にいちばん金を貸しているのは、日本です。日本がお金を貸さなければ、途上国はこれほど貧しくならなかったのです。つまり「日本がほっておいてくれれば貧しくな



らなかった」なのです。ですから「ほっとけない世界の貧しさ」と日本が言うのはあまりに傲慢です。彼らの現実を全く無視した言い方です。

ともかく、軍事費を使って途上国の借金を全部帳消しにしましょう。世界の兵器を廃絶しましょう。飢えている人に食料を届け、地雷を撤去しましょう。これらの費用全てを国連データに基づいて計算すると、何年分の軍事費になるでしょうか？軍事費 1 年分です。さらに 2100 億ドルのおつりがきます。つまりたった 1 年分の軍事費で全ての問題を解決し、おつりがくるわけです。これを宇宙レベルで考えてみましょう。この惑星に住んでいる生き物はちょっと変わっています。「お互いに助け合うことだけはやめよう」と決心し、「殺し合おう。全てのお金は殺しあうために使おう」と決めた自殺の惑星です。私はばかげたことだと思います。ところが人間は今､真顔でそうしようとしています。私はこれを｢合成の誤謬｣とよびます。どういうことかというと「それぞれ小さなポイントでは正しいのに、それを合計すると大間違いになる」ということです。例えば隣の国が攻めてくるから軍備を整える？　正しいです。向こうの方が強いかもしれないから軍備を増強する？　正しいです。でも正しいですが、それらを合計すると自殺の惑星を作ってしまうのです。

だから逆から考えなくてはいけません。「この惑星にはもはや戦っていられるゆとりはない。だからテーブルを引っぱり出して互いに話し合う場を作ろう。戦争をする前に外交努力で避けよう」そういうことをするべきです。ところが残念なことに、最も儲かるものが軍需だから、軍需を増やそうという方向に進んでいます。先週日本でも宇宙基本法という法律が通りました。これはどういったものかというと、宇宙で戦争をするための法律です。日本はアメリカが進めているミサイル・ディフェンスの計画に乗っかりたいのです。そうすれば日本の軍需産業は大変儲かります。そのために作られたのが宇宙基本法。簡単に言えば宇宙戦争法です。その理屈は、それが単純に儲かるからなのです。

同じことは地球温暖化からも言うことができます。このグラフは各国の二酸化炭素排出量を、1990 年から 60％それぞれの国ごとに減らしたグラフです。つまり地球温暖化が止まるときのグラフです。しかし真ん中の赤いグラフは軍備が消費する石油から出る二酸化炭素です。（かなり高い数値）これは爆弾を爆破させたときに出る二酸化炭素、建物が破壊され立て直すときに出る二酸化炭素排出を入れていません。純然たる石油消費からの二酸化炭素排出量です。例えば私が環境運動家で「平和運動などの政治的なものには関わりたくない」というスタンスで、ついに地球温暖化を防止できたとします。しかし軍備に口出ししていなかったために、軍備から出る二酸化炭素のせいでやっぱり滅びた、という結果を招きます。自己満足のための運動であればそれで構わないのです。しかし本当に助かりたいと思うなら、軍備を問題にしない環境問題はなんら役には立たないということになります。そして軍備から出る二酸化炭素は、我々のけなげな努力を馬鹿にしてくれます。最近私は Honda のフィットという車に買い替えました。リッター 24km の燃費で走ります。その脇を戦車が走っていったとします。戦車の燃費はリッター 250m。ほとんど石油をジョウロで撒きながら走っているようなものです。そして私がコンビニで「そのレジ袋要りません」と断っている頭の上を、F15 戦闘機が全速力で飛んでいったとします。F15 戦闘機が 8 時間全速力で飛び

続けたなら、日本人一人がオギャーと生まれて死ぬまでの二酸化炭素を排出します。つまり軍備が排出する二酸化炭素の量は桁違いなのです。これを止めずに助かることはありえません。

そして世界の軍事費の半分を占めているのは、アメリカです。アメリカが突出しています。アメリカ経済は、実は財政赤字で貿易赤字です。お金がないのです。どうしてアメリカは戦争の費用が出せるのでしょう。実は国債を出して世界中に買ってもらっています。その国債の資金で戦争をするのです。その国債を最も買っている国が、日本です。日本が全体の 38％を買い上げています。イラク戦争時のアメリカの軍事費と日本が買っている国債額は、ほぼパラレルに動いています。つまり、みなさんの貯金を使って国が買った国債で、イラクの人々をこの 5 年間で 100 万人殺し、彼らの頭の上にミサイルをプレゼントした、という構造になっています。

ナナメの方向

このように我々のお金は、とんでもない加害行為を行っていたのです。ではどうしたらいいのでしょうか。私は運動には 3 つの方向があると思っています。ひとつは「縦」です。自分自身が政治家になるか政治家に影響を及ぼすなりして上から下へ、または下から上に社会を変える動きです。もう一つは「横」です。ムーブメントを起こそう、隣の人に伝えよう、と広げることで運動を起こす動きです。この縦と横だけの従来型の運動では、うまくいかないと諦めていました。しかし私はもう一つあると思います。それが「斜め」です。全く別な仕組みを考え、現実に新しいやり方を実行する方法です。このオルタナティブな道がもうひとつ残っています。日本にはオルタナティブな方法が、極めて少なかったのではないでしょうか。この縦、横、斜めの動きを同じくらいやっていくことが必要ではないか、と私は思います。

そこで私はお金の仕組みについて考えていましたので、「未来バンク」という市民が勝手に作る銀行を作りました。たった 7 人で 400 万円を出しあって始めました。そのバンクは、環境にいいことか、福祉か、市民がよりよい社会を作る動きにしか融資をしません。金利は 3 ％の固定で単利（元本にのみ利子がつく仕組み）というものです。すぐつぶれると周りから言われていましたが、意外に続いています。現在は 2 億円の出資額を集め、8 億円を融資しました。貸し倒れは 0 です。市民が勝手に銀行を作り、自分たちが実現したい社会を作ることに融資をするという仕組みがうまくいったのです。それが 10 年くらい続いたころに、日本中にこのような運動が広まりました。東京はやや乱立ぎみで、神奈川、北海道、長野、新潟、名古屋、岩手など、市民による銀行は各地に広まっています。今回私が福岡にきたのも、この銀行を福岡に作りたいという人がいて、その集会に参加するために来ています。日本中ほとんどの都道府県に、自分たちで銀行を作ろうという動きが広まっています。なぜこのようなバンクが必要とされるのでしょうか。私が未来バンクを作るとき最初に考えたことがあります。みなさんの方が、東京の人より貯金しています。東京は使い道が多く、貯金額が少ないのです。みなさんが貯金したお金は全部東京で使い道を決められています。銀行、郵貯、農協など全て東京で決められるのです。地方が受け取ることができるのは、唯一公共事業のときだけです。自分のお金だったものが、くだらない公共事業に使われて、潰れて赤字だけを残していく。これが公共事業のあり方ですね。みなさんの

お金でありながら、みなさんの役に立っていないのです。だから私が思うのは、お金は中央集権にしてはだめだということ。東京にまかせたら、ろくなことにはなりません。だから各地域がお金を握るべきだと考えました。未来バンクは大きくなるつもりはありませんでした。「各地域にどんどん作ってほしい。それは手伝うから」というスタンスです。つまり各地域にお金をまわすための活動です。ここ福岡でも少しいけば過疎地になります。過疎地には高齢者が多いです。年金収入として3億円ほどお金が入っています。もしそのお金が地域にあったら、地域に投入することができます。投資されれば雇用が生まれます。雇用された人は食べるために生産を必要とします。そうすれば農業が始まります。経済的な地域循環が生まれるか生まれないか、その最初の一撃は「その地域にお金があったか・なかったか」ということなのです。その地域からお金を取り立ててしまえば過疎化します。しかしそこにお金が残れば活性化するのです。だから各地域にバンクを作るべきです。

このようなバンクの中で、もっとも有名なものがAPバンクです。ミスチル（Mr. Children）の桜井さん、小林武史さん、坂本龍一さん。この3人が出資し、環境にいいことだけに融資します。なんと金利は1％の固定、単利です。一億円融資したとして金利収入は100万円にしかなりません。損をするためのバンクともいえます。みなさんもこのバンクに申請して融資を受けることができます。このバンクができたことで、一番元気になったのは桜井さんではないでしょうか。彼と直接話したのですが、桜井さんは脳の病気になった時、こう思っていたそうです。「僕は人並みには努力した。人並みには苦労したと思う。でも人並みはずれたお金をかせぐようになってしまった。いずれ罰が当たるだろう」そうしたら病気になった。「やはり罰が当たった」彼はそう思い、音楽をやることがイヤになってしまったのです。なぜならお金が儲かりすぎるからです。彼はお金と音楽が一緒になることにウンザリしていたのです。その時たまたま彼と知り合った私は「それならバンクをつくればいい」と気楽に話したわけです。「バンクはないでしょう」と彼は言いましたが、しばらくして彼から「バンクしかない。作りたいから手伝ってくれないか」という連絡がありました。こうして作ったのがAPバンクです。そしてはじめて桜井さんはこう言いました。「このCDを買ってください」と。「このCDで稼いだお金がAPバンクの融資の資金になります。だから買ってください」と言えるようになりました。APバンクのおかげで、桜井さんは音楽とお金を切り離して考えることができるようになりました。稼いだらバンクに投げ込めばいいのです。こうして彼はお金を稼ぎ過ぎる苦しさから逃れることができたのです。これはドンドン赤字になってしまうバンクですから、その赤字の穴埋めとして行っているのが「APバンク・フェス」です。3日間のイベントで8万人集まり、1億円儲かります。ところが5000万円税金で持っていかれます。残りの5000万円を融資の資金源にしています。

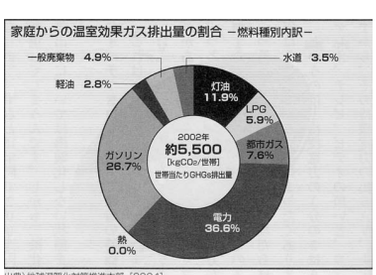
地球温暖化へのアプローチ

さてここから地球温暖化の解決策に入ります。よく言われるのが「地球温暖化はみなさんのライフスタイルの問題です。みなさんが努力すれば温暖化は止められます」というフレーズです。私も人の講演会に行くと必ずそう言われるのでウンザリします。それは全くの嘘です。なぜなら家庭の二酸化炭素排出量は、車の排出量を加えたとしても全体の20%です。1/5しかありません。残り4/5を出

しているのは企業です。だから企業を問題にせずに、皆さんのライフスタイルのせいにしても絶対に解決しません。ならば本当に二酸化炭素を排出しているのは誰なのでしょうか。日本の二酸化炭素の半分は、たった 230 の工場からでています。これを企業別にみてみると、上位 20 社だけで排出量の 4 割を出していることになります。ここが問題なのです。これは減らすことができます。日本の二酸化炭素排出量の 1/4 は、51 基の火力発電所が出しています。詳しくみていくと、発電効率の高い発電所とそうでないものがあります。一番効率がよいものに発電効率を合せてくれればいいのですが。このような規制を「トップランナー方式」といいます。一番効率のいい水準にあわせなさい、というものです。もしその規制を入れたなら、排出量は半分に減ります。ということは全体の 1/8 減るということですね。1/8 という割合は、車を除く家庭の二酸化炭素排出量と同じです。たった 51 基の火力発電所にこのトップランナー方式の規制を入れるだけで、家庭の全排出を止めたことと同じ結果になるのです。ならばそれをやればいい。ところが政府は温暖化問題を人々のライフスタイルのせいにしても、企業や電力会社のことを問題にしたくありません。だから企業の話をせずに「これはみなさんのライフスタイルの問題です」と、必ず言うのです。残念ながらそれでは私たちは助かりません。だから私はこれに賛成する気持ちにならないのです。このトップランナー方式というのは、私たちにとって身近な規制です。みなさんが家庭で使っているテレビや冷蔵庫、洗濯機など全部トップランナー方式の規制が入っています。同じ規制をたった 51 機の火力発電所にかけてくれさえすれば、それだけで二酸化炭素を減らすことが可能なのです。だから問題を解決しようと思うときに、まずしなければならないことは「原因」を調べること。その原因に対して対策をとるということです。ところが原因を調べもせずに、我々がいつも聞かされることは「みなさんのライフスタイルの問題だ」という大嘘ばかり。それが現実です。

日本が排出している CO2 の出所をみてみると、やはり電気が多い。次に産業が 3 割、車が 2 割です。実はこの 3 つだけで全体の 8 割を占めるのです。だからこの部分をなんとかするべきなのです。なかでも大きなウエイトを占めている電気について調べてみましょう。

よく地球温暖化防止のために原子力発電を行うことは避けられない、といういい方がされますね。それは嘘です。なぜ嘘かというと、電気というものは貯めることができません。電気の大欠陥は貯めることができないことです。そこで電気の消費量が最も高いところ（ピーク）にあわせて発電所を作らなければならないのです。このグラフはピークが出た一日の電気消費量の変化を示すものです。朝 4 時から 5 時が最も少なく、仕事が始まると急激に上がります。ポコッと減っているのはお昼休みです。午後 2 時から 3 時にかけて最大の消費量がきて、その後なだらかに減少していきます。ところがこのピークは毎日出るわけではありません。出るのは決まって夏場だけです。しかも 1 年間は 8760 時間ですが、その中でピークは 10 時間だけなのです。

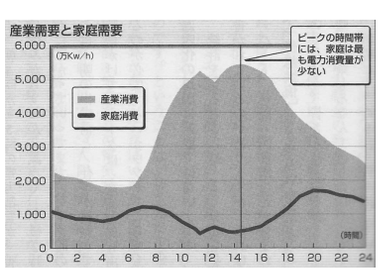


出典）地球温暖化対策推進本部［2004］

このグラフは白と黒に分けてありますね。白い部分が家庭の消費、黒い部分が家庭以外の消費です。午後 2 時から 3 時にかけてピークがくるところをみてください。実は家庭では最も電気消費量が少ない時間帯なのです。ですから「みなさんが節電してくれれば発電所を作らずにすみます」とよくいわれますが、大嘘で

す。なぜならピークの 90％以上は企業が出しているからです。では、なぜこれほど企業はピーク時に電気を消費してしまうのでしょうか。簡単に説明できます。これは電気料金のグラフです。私たちの電気料金は、ある程度まで「使うと使えば使うほど電気料金の単価が高く」なるように設定されています。家庭の方のグラフは常にあがっていますね。ある程度まで使うと、電気の単価そのものがあがってしまうので大損してしまいます。ところが企業の電気料金はどうなっているかというと「使えば使うほど電気料金の単価が安くなる」ように設定されています。このグラフは電気料金と平均消費量の関係を表したものです。家庭の場合は使うほど損します。企業の場合はたくさん使った方が 1KW あたりの料金単価が下がるのです。だから製品一個あたりの電気のコストを下げたかったら、消費の多い時間にもっと電気を使えばいいということになります。そうすればコストを安くすることができます。これが現在の電気料金のしくみです。これは簡単に解決できるのですよ。こういう電気料金（高くなる方向を示す）に設定すればいいだけです。使えば使うほど単価が高くなる仕組みに変えればいいだけなのです。これで企業は損することはありません。省エネすれば得をするからです。こういうカーブ（使用量に比例して単価が高くなる設定）に変えれば、おそらく企業は今の 3、4 割を節電するでしょう。現在、企業は 3 年で元が取れる省エネ設備を導入していません。なぜなら使うほど電気料金単価が安くなる現在のシステムにおいて、企業は省エネ設備を購入するのがもったいないからです。しかし設定を変えたなら、企業は必ず省エネ設備に切り替えます。そうすれば 3、4 割の節電は簡単にできます。仮に 3 割節電してくれたら何が起こるか。日本は、それだけで京都議定書をクリアします。京都議定書を守ることは不可能だとよく言われています。しかし電気料金単価のカーブを変えるだけで、解決可能なのです。それではそうすればいいのですが、問題なのは原因を調べようとした人間、このような分析をした人間が私以外にいないことなのです

これは 2003 年夏の東京電力のグラフです。この年電力会社が原発事故を隠す事件が起こったので、すべての原発を止めざるをえなかった。そうすると電気が足りなくなってしまうので、節電を呼びかけるために「電気予報」という数値をインターネット上に公開したのです。私は早速数値をダウンロードし、グラフ化しました。赤い線がその日の最高気温、黒い線がその日の電気使用の最大ピークです。大体一致しているようにみえますが、ここをみてください。気温が上がっているのにピークが下がっているところがあります。整合性がないようにみえますが、土日とお盆などをグラフから隠してみましょう。そうするとここにはハッキリとした定理が読み取れます。ピークがでるのは「夏場」「平日」「日中の午後 2 時から 3 時にかけて」「気温が 31 度を超えた日」に限られています。ということはこのピークの問題は簡単に解決できます。夏場、平日、日中午後 2 時から 3 時にかけて、産業の電気料金を高くすればいいのです。これだけのことで解決可能な問題なのです。ところがこのようなことに気づく人がいない、それが問題なのです。



発電所はピークの電気使用量のために作られます。日本では夜の電気消費が少なく昼が多い。その格差がとても大きいのです。消費量の平均値は、ピーク時に比べると 58% しかありません。だから日本の発電所は平均で 58% しか稼働しておらず、あとの 42% はお休みしている状態なのです。それに対してドイツや北欧では 72% 稼働しています。なぜでしょう。消費量グラフの曲線をなだらかに

する、つまり「電気消費が集中する時間帯を作らない」ようにしたのです。発電所というものは、ピークの 10% 多く発電しなくてはなりません。一日の消費総量を変えずに、ピークの曲線をなだらかにするだけで、発電所は今よりずっと少なくて済むのです。日本がドイツ・北欧なみにピークをださない工夫をすれば、発電所はなんと 1/4 いらないことになります。25% の発電所は必要がなくなります。日本の原子力発電所をあわせると全体の 22% です。ピークを下げさえすれば、日本の原発は一基もなくても困らないことになります。

ではどうすればピークは下げられるか。電気料金の設定を変えることが一番簡単です。フランスは夏場になると電気料金が 10 倍高くなります。カリフォルニアやイギリスでは株式市場で各時間帯の電気料金を取引します。人気が殺到する時間帯は 100 倍の値段になってしまう。そういう時はみな電気を買いませんから、ピークは下がります。

アメリカにはもっと賢い仕組みがあります。家庭内の電気を節約したい場合、電力会社に依頼して 2 本の電線に分けてもらうのです。一本はエアコン用、もう一本はその他の電化製品用にします。そして、ピークが上がり電気が足らなくなる日は、電力会社が遠隔操作でエアコン用のスイッチを切るのです。熱くて死にそうになると思うかもしれませんね。しかしスイッチを切るのは 5 分間だけです。リレースイッチを使って各世帯 5 分ずつ消していくのです。12 世帯あれば、1 時間消すことができますね。それによってピークを乗り越えることができます。本来はもう一基発電所が必要になるところが、この遠隔操作で建設しなくてすむことになります。そのお金（発電所を建設せずにすんだ分）を利用者に還元する、つまり電気料金を安くするのです。

もっと賢い仕組みを実行している電力会社もあります。カリフォルニアにあるスマットという電力会社です。省エネタイプの冷蔵庫を購入したという領収書があれば、この会社は 3 万円をキャッシュで与えるのです。白熱灯を蛍光灯ランプに変えると申告すると、無料で蛍光灯をくれます。なぜそのようなことをするのでしょうか。ピークがあがるともう一基発電所を建てなくてはならないからです。原子力発電所の場合だと、建設費は 4000 億円もかかってしまいます。ピークを下げるために 4000 億円配ったとしても同じことです。だから電気が足らないから発電所を作るという考え方ではなく、その発電所を作らなくてすむような仕組み、つまり「人々に需要を下げてもらう。そのためにお金を配る」という仕組みを利用しているのです。このような仕組みを使えば、日本はもちろん発電所を減らすことができます。さらに「使えば使うほど高くなる電気料金システム」にすれば、このエネルギー消費自体をここからさらに 3 割減らすことができます。これが仕組みから考えた場合の地球温暖化対策ですね。排出している二酸化炭素は「電気」の割合が大きく、その原因は電気料金が「無駄に消費しろ」という仕組みを持っていたから、ということになります。

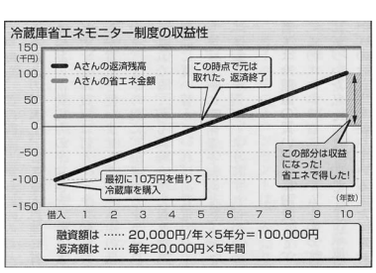
では一方の家庭側の消費をみてみましょう。家庭の中で何が一番二酸化炭素を出しているかというと、電気と車です。1 日 1 分シャワーの時間を短くしましょうと言いますが、ほとんど効果はありません。水は二酸化炭素排出に殆ど関わりがないからです。圧倒的に高いのは電気と車です。

その電気について調べてみましょう。家庭には電化製品の四天王がいます。エ

アコン、冷蔵庫、照明、テレビです。その四天王だけで家庭内の電気の 2/3 を消費しています。省エネ電化製品に切り替えるべきなのは、この四天王です。この四天王の省エネの状況をみてみましょう。冷蔵庫が一番省エネしています。1995 年の製品の電気消費量を 100 とするとマイナス 90% の省エネです。つまり新しい冷蔵庫を 10 台並べても、95 年式の冷蔵庫 1 台分と同じ電気消費量なのです。それ以外の製品も、みな 50% は減らしています。ですから電化製品の四天王を省エネ型の新製品に買い替えるだけで、電力の 50% を節電できることになります。「節電のためにひたすら努力、忍耐する必要がない」ということが重要なのです。

私達は「未来バンク」を通じて融資を行っています。この融資の仕組みを使ったら、どのようなことができるでしょうか。私が発案し、江戸川の地域グループが実行していることを紹介します。私が未来バンクをやっているのに彼らは AP バンクからお金を借りたのですが（笑）そのお金で冷蔵庫を買い替えたいという人に融資をしました。まず冷蔵庫を買い替えたい人に、現在使用している冷蔵庫の写真（ドアの内側に貼ってある製品情報のシール）を撮ってもらいます。その写真の情報から、買い替えた場合どれくらいの電気を省エネできるか計算をします。この写真の冷蔵庫の例では、一年に 27,328 円電気代を節約できます。安くなる金額（27,328 円）を根拠に 20000 円× 5 年間分（＝ 10 万円）を融資します。なぜ 10 万円というと、その金額で省エネ冷蔵庫が買えるからです。年に 20000 円ずつ 5 年間で返済してもらいますが、その間も利用者は省エネ分の 7,328 円を毎年得するのです。冷蔵庫は平均 12 年間使用できますので、返済後の 7 年間で 20 万円ほど得をします。（節電分の 27,328 円× 7 年間＝ 191,296 円）得しかしない仕組みなのです。そして二酸化炭素は激減します。私たちは現実にこれを実行しています。これがお金を使った「社会の仕組み方」なのです。でも気にかかることがありますね。今の冷蔵庫がゴミになってしまってはもったいないということ。私もそう思っていたので調べました。冷蔵庫は平均 12 年使われる間、その消費エネルギーの 91.7% が電気です。その次に 7% が鉄の精製や素材の採掘。廃棄のエネルギーは 0.3% です。その結果グラフを描いてみるとこうなります。先ほどの 95 年式の冷蔵庫を使い続けていった場合、古い冷蔵庫を廃棄・新製品を製造・使用した場合の比較です。お分かりの通り 1 年 4 ヶ月以上使えば、買い替えた場合の方がトータルのエネルギー量は減ります。これは冷蔵庫にしかなりたたない図式です。冷蔵庫は使用に関してほとんど個人差がありませんし、省エネ率が高いからです。一方エアコンの場合、我慢する人は買い替えないほうがいいし、たくさん使用する人は買い替えた方がよいことになります。

これは私の家の電気消費量の実績です。2003 年はこの線です。うちには省エネする気のない大学生が二人いるので、2004 年はこんなにのびてしまった。（笑）ところが冷蔵庫を買い替えたら、カーブは同じですが下回りました。うちの場合、年間 25,000 円の電気料金を得しました。こうしてみると、努力・忍耐しなければ節電できないというのは本当だろうか、と思うわけです。



もちろん努力・忍耐できる人はやった方がいいですよ。しかしほとんどの人は努力・忍耐が長続きしません。長続きしない人達にアプローチするものでなければ、仕組みを作っても効果がありません。説教臭いことを言えば、ほとんどの人の耳は閉じてしまいます。でも「お金が儲かりますよ」というと耳がピクッと動くの

です。だからお金が儲かる仕組みを見つければいい、ということになります。

他の例もみてみましょう。白熱球を蛍光灯ランプに変えた場合、どれくらい電気消費が減るのでしょうか。同じ明るさなのですが、60W が 10W になります。1 日平均 5.5 時間使用するので、1 年間で電気料金が約 2,500 円安くなります。仮に店頭で蛍光灯ランプを 600 円で販売しているとして、消費者を得させるためにどのような仕組みを考えたらいいでしょうか。新しい蛍光灯ランプを相手に渡して、4 ヶ月後に省エネされた電気料金分 600 円（＝蛍光灯ランプ代）を受け取ればいいのです。（蛍光灯ランプは白熱灯に比べ、月に約 200 円の電気料金が節約できるため）実質無料です。無料という仕組みであれば、誰が断るでしょう。しかもこの蛍光灯ランプは、白熱灯より 8 ～ 10 倍寿命が長いのです。ランプ設置場所は玄関内・外、廊下、階段、風呂、トイレなど、各家庭に平均 6 カ所あります。6 倍得することになります。得しかしない仕組みです。

地域差も利用できます。那覇の暖房費はほとんど 0 です。札幌の冷房費はほとんど 0。沖縄の冷房費負担、札幌の暖房費負担はとても大きい。そこでこういうことが可能です。みなさんが沖縄に知り合いがいたら「あなたのエアコンは、10 年以上たっていませんか？」と聞いてみてください。10 年以上のエアコンだったら、あなたが省エネタイプの新しいエアコンを無料で差し上げてください。そして「私の口座に、従来通りの電気料金を振り込んでね。沖縄電力の方には私からきちんと支払うから」と言うのです。沖縄で新しいエアコンに切り替えると、安くなる電気代は年間 1 世帯で 52,000 円。4 年で元が取れ、その後はあなたの利益になります。

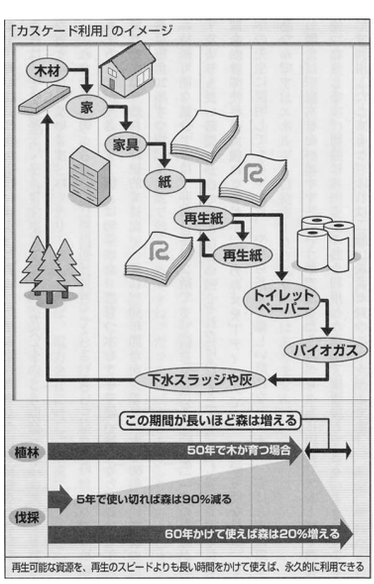
札幌の暖房需要にも対応が可能です。エアコン、電気カーペット、電気コタツなど、電気は熱利用されています。そうならば、電気以外の熱利用を考えればいいのです。エネルギーの問題を考える場合、自然エネルギー利用より前にやるべきことがあります。「省エネ」です。自然エネルギー利用より省エネの方が、コストが 6 倍下がるのです。だからまず省エネを行ってください。自然エネルギーはその次です。熱の省エネは何かというと「断熱」です。これは苫小牧の公民館の普通の窓です。二重窓になっていて、外側はアルミサッシ、内側は木枠の窓です。これだけで抜群の断熱ができます。アルミというのは外の温度を内側に入れてしまう素材なのです。だからパソコン内を冷やすために使われていますね。しかし木枠の窓は、アルミサッシに比べて熱の伝わり方が 1/1800 も下がる優れた素材です。アルミサッシは、外の寒さを中に引き入れてしまう効率の悪い素材なのです。木製サッシを内側に入れるだけで、灯油代がかなり浮きます。ですので、先ほどの沖縄のような仕組みを使えば、あっという間に元をとることができますよ。

夏場対策ですが、この大学もブラインドを使っていますね。実はブラインドは外の光を内側で熱に変え、部屋の中を暖める装置なのです。非常に不合理なものです。遮光は窓の外にぶら下げるものがいい。つまり「葦簀（よしず）」が一番いいのです。葦簀を一枚おくだけで室内の温度は 2 度下がり、エアコン代が浮きます。もっといい方法があります。その葦簀に霧吹きで水をかけてやること。そうすると約 6 度下がります。そうするとエアコンいらなくなりますが、ひとつ問題があります。だれか一人ずっと霧吹きしなくてはいけませんね。これはちょっと指がつらい。（笑）そこで自動化することを考え、ついに見つけました。「植物」

です。緑のカーテンです。葉は、裏側から絶えず蒸散によって水蒸気を出しています。だから「自動散水つき葦簀」になるのです。沖縄ではよくゴーヤで行っていますね。ゴーヤは葉っぱが少ないのですが、実がおいしいのでよく使われています。植物のカーテンは室内温度を 4 ～ 6 度下げ、体感温度を 6 度下げます。写真は実際の学校の教室ですが、この緑のカーテンをつけるだけで夏場にエアコンが必要ないのです。

住宅そのものを、最初から省エネ住宅にすれば話は簡単です。これは、私が先月非営利で始めた「天然住宅」という事業の中で、省エネ住宅を造っているところの写真です。私は「営利」が好きではありません。なぜかというと、営利的企業はお金を稼ぐために自社の技術を隠します。ところが非営利は、多くの人々に極力その優れた技術を真似してもらおうというスタンスがあります。そういうオープンさが非営利のよさです。そこで私は、非営利の事業ばかりを行っています。この住宅会社は、通常の住宅の 3 倍もの木材（杉）を使用します。そして木材の接合に大きな金物を使いません。全部木組みで造っていきます。なぜなら木は面で接ぐと強いですが、点で接ぐとすぐ駄目になるからです。また木に金属が刺さると、そこから腐ってしまいます。一般的に家を 1 軒建てた場合、山側の業者の利益は 50 万～ 80 万円です。しかしこの天然住宅は 500 万～ 1000 万円の利益を山側に届けることができます。なぜこのような莫大な金額を山側に届けることができるのでしょう。それは山側で木材を加工させるからです。まず伐採した木材を、炭を作る時の要領で燻煙乾燥させます。木材を煙でいぶすのです。60 度で 10 日間いぶします。そうすると煙が中に入り込み、木材はカビが生えにくく、虫が食いにくくなります。濡れてもすぐ乾くという木材になります。通常行われている 120 度での乾燥では、木の繊維はボロボロになってしまうのです。ところが 80 度より下の温度で乾燥すれば繊維が生きたままなので、ずっと強度がある木材になるのです。さらに乾燥させた木材を、すぐ組み立てられるように宮大工的な手法で加工します。そのまま材料を東京の建築現場に運び、プラモデルのように組み立てるだけです。東京では 4 ヶ月弱で家が建つので、コストが安くすむ。その分山側に利益を還元できる仕組みを作ったのです。この仕組みを使えば山の木を高く買い取ることができます。そうすると山側は出稼ぎなどしなくても生計が成り立ちます。そして山にまた植林することができるのです。

この住宅の造り方ですが、まず柱となる木材に溝を切っておきます。そこに上から板を落としていくのです。板倉作りといいます。この構造は圧倒的に地震に強いのです。耐震認定もとっていますが、4t の重さを斜めからかけても潰れませんでした。基礎となるコンクリートですが、コンクリートは水との混合比によって強度が決まります。水を最大限少なくすれば、石のようになり 1 万年は保ちます。ところが水でジャバジャバに薄めてこのような建物(校舎を指す)を建てると、50 年で壊れてしまうのです。私たちの住宅では、基礎のコンクリートへの水の配合を極力少なくしますので、コンクリートの表面が結晶化してガラスのように光っています。このコンクリートは、理論的に 500 年保つことになっています。この住宅を我々は 300 年保たせたいと考えています。ところで現代の住宅は、一般的に何年で壊されているかご存じですか？「26 年」です。日本人は頭金を貯めてから平均 34 才で家を建てます。建ててから、きっかり定年 60 才で家が壊れることになる。（笑）そこで大規模修繕するか再建するかして、退職金パーに



なって、死ぬ。つまり男の一生とは、家一軒とほぼバーター取引になっている。(笑)ばかげていませんか？家一軒の奴隷になりたくて生まれてきたのか、と不思議ですね。ヨーロッパの人たちは、収入は少なくともっと豊かに暮らしています。なぜか。中世に建てた家にそのまま住んでいるからです。古い家の間取りだけ変えて住むので、インテリアが発達したのです。日本の住宅も、もっと長く使っていいはずです。杉が使えるようになるまで 50 年かかりますから、少なくとも 50 年は保つ家でなければ社会的にも問題があります。森を壊すことに繋がるからです。天然住宅は和風建築だけではありません。防火認定をとっているので洋風建築も作っています。洋風の家には、ペレットストーブというものを標準でつけています。これを作っているのは、新潟のサイカイ産業という小さな企業です。通常の薪ストーブの燃料は木の中心部分しか使いませんが、このペレットストーブは木の皮、葉、根など何でも燃やすことができます。しかも燃焼効率が極めて高く、ランニングコストは灯油の半値です。建築材は丸太をそのまま使えるわけではなく、角材に加工しなくてはいけません。角材を取った後の木片は捨てています。どれくらいの割合で捨てているのでしょうか。実は家一軒を建てる木材のために、伐採された木の 8 割を捨てているのです。私たちの住宅の場合、建築材として 4 割を使用し、燻煙乾燥する際の燃料として 2 割を使います。でもまだ 4 割残りますね。その 4 割を先ほどのペレットストーブに使うと、木の端から端まで全部使えることになります。みなさんご存じでしょうか？都会の人は山に植林するべきだといいますが、日本の山はとっくに木が植わっています。重要なことは木を使うことなのです。しかも木を高く買ってあげないと、山の手入れができないし再度植林することができない。だから木材を高く買い、使ってあげることが大切なのです。この天然住宅の仕組みを使えば、木を高く買い取ることができます。

そこにさらに仕組みを加えます。カーボンオフセット（二酸化炭素の帳消し）です。例えば、私は今年南極まで行きましたので、移動のために 2t ほど二酸化炭素を出してしまいました。心苦しい私は、他の誰かが減らしてくれた二酸化炭素に対してお金を支払うことにしました。このような操作をカーボンオフセットといいます。現在は二酸化炭素削減目標達成のための海外との取引ばかりが注目されていますが、国内でも応用できます。例えば札幌でこのペレットストーブを使えば、年平均 13 万 2 千円かかる灯油代を 6 万 6 千円に抑えることができます。灯油は年平均 2000 リットル使用しますので 1000 リットル分（5kg）の二酸化炭素を減らしたことになります。カーボンオフセットを利用すれば、減らした二酸化炭素を 1 万円買い取ってもらうことができます。(二酸化炭素 1kg を 2000 円として計算) 二酸化炭素を減らした分で 1 万円、灯油の節約分で 6 万 6 千円、１年間で得するわけです。現在ペレットストーブの価格は 45 万円ですから、6 年間使用すれば実質ただになります。融資の仕組みを使うとしたら、このペレットストーブ代を渡し、カーボンオフセットと灯油節約分で返済してもらいます。本人の負担ゼロでこのペレットストーブを手に入れ、6 年間で元が取れます。さらに仕組みを加えてみましょう。二酸化炭素排出を減らしたカーボンオフセット分の権利を未来バンクがもらいます。そして他に売ります。売った金額を、融資を受けた人の金利にあてます。そうするとどうなると思いますか？金利マイナスになるのです。普通金利というものは返済額が増えていくものですよね。金利マイナスということは、返済ができなくとも自動的に元本が減っていくことになるのです。金利マイナスの仕組みがあるならば、その融資を断る人がいるでしょう

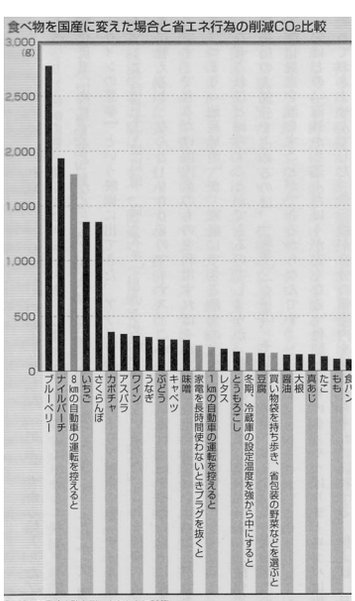
か？このような仕組みがある社会になれば「お金を稼がなければ生きていけない」と思わなくてもすむのです。こういった仕組みを現実的に作っていかなくてはならない。私はそう思っています。

この話をすると必ず言われるのが「でも石油の方が安いではないか」ということです。石油が安いというのはトリックです。このグラフは「イラクで取れる石油の最大量」×「2004 年の石油平均価格」＝「イラクが石油で得る収益」を表しています。イラクの石油を奪うためにアメリカが投じた軍事費がこれです。（大幅に上回っている）これは石油を奪うためのコストですから、石油価格に加えるべきですよね。石油を使えば二酸化炭素がでてきます。そうすれば温暖化が起こる。温暖化の影響と思われるアメリカを襲ったハリケーン「リタ」と「カトリーヌ」。この被害額も石油価格に加えるべきです。このような視点でみると、石油価格は今の 20 倍にも跳ね上がります。さらに石油には毎年 2100 億ドルもの補助金が出されています。それを含めると石油はとてつもなく高いものです。だから石油が安いと思うのはトリックなのです。

一方このグラフは、太陽光発電の値段の下がり方です。こちらは風力発電の値段の下がり方。2001 年の時点でアメリカの風力発電は 1kw/h あたり 4 セント、約 4 円です。日本で最も安いといわれている原子力発電は 5.9 円です。どちらが安いですか？実はもう自然エネルギーの方が安いのです。もし日本がこのまま原子力発電を軸に考えるならば、日本はその愚かな発想のために世界に負けることになります。イギリス政府は家庭の電力需要をすべて風力発電でまかなう、と発表しました。ノルウェー政府は 2030 年には二酸化炭素排出量をゼロにする、と発表しています。日本は今回の洞爺湖サミットで、2050 年に 60 ～ 80% 排出量を削減するといっていますね。世界のレベルと比較すると、これは国際的に全くインパクトがありません。世界の進み方を知らないのは日本だけという状態です。

最大の温暖化防止「地産地消」

もうひとつのトリックを紹介しましょう。経済のグローバリゼーションです。神戸から東京に荷物を運ぶ場合と、シンガポールから東京に運ぶ場合とどちらが安いでしょうか。実はシンガポールから運んだ方が安くなります。なぜ安くなるのか、これはほとんどの人が知らないことです。石油というものには税金がかかりますね。しかし「国境を越える石油」にはお互いの国が税金をかけないという決まりがあります。例えば飛行機ですが、国内線の方が割高です。2 月のカリフォルニア往復など 4 万円を切ることさえあります。なぜそうなるのかというと、国境線を越える燃料（石油）には税金がかからないからなのです。その結果国外から運送してきた方が、国内で物を動かすより安くなってしまうのです。だから国外から運送してきたものに、国内と同じように税金をかけてしまいましょう。その日のうちに経済のグローバリゼーションは消えてなくなります。経済のグローバリゼーションはこのような仕組みを知らない人が考えついたトリックなのです。実態にそぐわない幻想です。



そうするとおもしろいことがわかります。私たちが家庭内で二酸化炭素排出量を減らそうとした時、まず思いつくのは車に乗らないこと。往復 8 キロの通勤に車を使わなければ、1.8 キロの二酸化炭素が減ります。それよりもっと減らせるものがあります。ブルーベリーは今アメリカから輸入しています。これを国内の

ものを購入するように切り替えると、ブルーベリーたった 200 グラムで二酸化炭素は 2.8kg 減るのです。そのものの重さの 14 倍減ることになります。これはイチゴもそうですよ。福岡はかなりイチゴを生産していますね。でもケーキに乗っている薬品くさいイチゴは、カリフォルニア産です。ケーキ用のイチゴはカリフォルニアから飛行機で運ばれています。たったイチゴ 10 粒のために 1.3kg の二酸化炭素を排出しているのです。

これらからわかることは、私たちができる最大の温暖化防止が「地産地消」だということなのです。地産地消以上に二酸化炭素を減らせる方法はありません。地産地消がどれほど温暖化防止に効果があるのか、ということが輸入作物を調べてみるとわかってきます。

何をアウトプットするのか

日本の家庭の場合、電化製品を省エネ仕様に変えるだけで電気消費量は半分に減ります。半分に減った電気消費 2kw は、8 畳分の太陽光発電でまかなえます。（8 畳分の太陽光発電装置は 170 万円）なぜこれでまかなえてしまうかというと、日本の家庭における電気消費は、欧米に比べると 1/3 しかないのです。日本はもともと省エネの国だったのです。さらに家電製品のおかげで消費量が減りつつあります。だから私たちにとって「家庭内で消費する電力を自給する」ことはそれほど困難なことではないのです。おそらく後 5 年ほどすれば、経済的にも成り立つかたちで電力を自給することが可能になるでしょう。8 畳の太陽光発電ができる家があるならば。できれば私たちは資産で生活していきたいですね。みなさんは資産と負債を勘違いされています。車、別荘、ヨット。これは資産でしょうか。負債でしょうか。これはすべて負債です。所有して利益を生み出すものが資産です。車のように車検、駐車代、ガソリン代などお金がかかるものは負債なのです。

私たちが持つべきものは資産です。もうひとつ資産には定義があります。「支出を減らせるもの」も資産です。雨水利用して水道代が浮いたなら、それは資産です。電化製品を買いかえて電気代が浮いたなら、それは資産です。太陽光発電にしたならば、それも資産です。そういった資産を増やしていったならば、私たちの生活は何かにぶら下がらなくてもいいものにできるのです。従来の生活では、私たちは会社にぶら下がってきました。これは実にセキュリティーの低い生き方ですね。会社からリストラされたら自殺するかもしれない。日本では年間 3 万人の自殺者がいます。このようなセキュリティーの低い生き方はするべきではありません。

どのような生き方がよいかというと、中心に自分を据えます。会社からも収入を得ているが、一方で農家のお手伝いをして農産物という形で報酬を得ている。それも資産です。NPO に関わり、それによって儲けはしないが実質的な労働に対する報酬を得ている。それも資産です。そしてそれ以上に、例えば英会話ができる、講演ができる、原稿がかける、イラストがかける、ものがつくれるなどで「自分の能力を高める」ならば、それはすべて資産です。多種多様な収入源を持てるようになるならば、会社から首になっても自殺しなくてすむのです。「百姓」という言葉は「百のことができる」という意味でした。たとえ不作だったとしても、100 の仕事を持っていることによってリスクをカバーできました。だから私たちは「生活の百姓」になればいいのです。そうすれば会社にぶら下がって奴隷のよ

うに生きるのではなく、主体的に生きることが可能になるでしょう。さらに生活の中に資産をたくさん増やすことで、お金にぶらさがらなくても生きていけるようになるのです。「たいしてお金を稼がなくてもやっていけるよ。食べ物も水もエネルギーもあるし」という具合になります。このような仕組みを自分たちでどう作るのか、ということが大事になってくると私は思います。

最後に。皆さんは学生ですね。人間はアウトプットしたものが全てだと思います。アウトプットしなかったら、その人が生きていたことを実証できません。何をアウトプットするかがその人の存在を決める、と思っています。だからアウトプットできるものをどういう風に作っていくか、ということが非常に大事なポイントなのです。しかし、自分のどの部分がアウトプットに向くかを見つけることは、とても難しいです。なぜ難しいかというと、自分ではあまりに自然にやってしまうことなので苦痛を感じません。それが自分のアウトプットなのだと気づきにくいのです。例えば、僕は原稿を書くのが好きなのでサラサラ書いてしまうのですが、自分としてはそれが特殊な能力だとは思えないのです。なぜなら好きでやっていることだからです。でも今はこれが自分のアウトプットなのだと思えます。それぞれの人なりのアウトプットの方法はありますので、学生さんにはそれを見つけてほしいと思います。その中で自分自身を表現していってほしいのです。

私はデータマニアなのです。隣の人が見ているグラビアは気にならなくても、グラフはのぞき込んでしまう。（笑）だからこういったことを調べるわけですが、誰もが僕のようなデータマニアになる必要はありません。データマニアなんてむしろうっとうしいから、4、50 人に 1 人くらいいればたくさんです。（笑）そういうことよりも、これらの知識をたくさんの人に伝えられる方がよっぽどいいですね。坂本龍一さんやミスチルの桜井さんは、言葉で伝えるのは苦手なのです。桜井さんに聞いてみたことがあります。「言葉で伝えるのと、音楽で伝えるのとどちらが楽？」「それは、音楽ですよ！」彼にとっては言葉よりも音楽で「こんな感じ」と伝える方がよっぽど楽なのです。人には人に応じたアウトプットの方法があります。その方法をみつけ、それを利用して多くの人々に自分の思いを届けていってほしいのです。そうし続けることが、その人が生きた証になるのです。みなさんはそのツールを大学で学ばれているのだと思います。将来的にそれを活かして、自分がやりたいこと・やるべきことを自分なりの表現方法で出していってほしい。そう思います。

以上で終わりにします。どうも長い時間ありがとうございました。

質問者

文学部のものです。今日はありがとうございました。発電所のお話ですが、電力会社は常にピークの電力を提供しているのでしょうか？

田中氏

発電所はピーク時に合わせた最大電気量を発電できます。通常の発電量は火力発電で調整しています。火力は簡単に弱火にすることが可能ですから。需要が増えた分は火力で調整していきます。調整したり、消したりすることができないの

が原子力発電所と、石炭火力発電所です。一日ずっと稼動しています。火力発電は火力を加減して調節するのです。それをいいことに原子力発電がベース電源なのだ、と電力会社は言っています。でもベースにすることはないですね。しかし彼らは「ベース電源」という言葉によって「原子力発電ははずせないものだ」という印象を与えようとしているのです。自然エネルギーは調節の面からいうとベース電源になります。自然エネルギーをベースとして導入すると、原子力発電とかち合ってしまいます。だから日本の電力会社は自然エネルギーを入れたがらないのです。コストが低い風力発電が適している地域は、北海道と東北地方、九州です。今導入されている風力発電の 20 倍は増やすことが可能なのです。九州電力は原子力発電優先ですので、自然エネルギー導入に対して圧力をかけています。

質問者

芸術工学部のものです。実際に省エネ電化製品が店頭で販売されていますが「電気代が節約できた」と感じたことはありません。それは私が表示を信用していないからそう感じるのか、それともメーカー側の努力が足らないのでしょうか？

田中氏

いいポイントですね。こういう言い方が適切かどうかわかりませんが、メーカーはサバを読みます。例えば冷蔵庫ですが、日本は高温多湿なので外国では必要のない「霜取り装置」がついています。外国のものと比べる場合は、その霜取り装置をオフにして消費電力を調べます。ところが実生活の中では霜取り装置を稼動させるので、消費電力は上がってしまいます。これではあまりに激しいサバ読みになってしまいます。私たちは冷蔵庫の実質的な電気消費量のデータを持っていましたので、それを審議会に提出しました。その結果、2006 年から冷蔵庫の電気消費量のサバ読みが禁止になりました。今現在、店頭で販売されている冷蔵庫に関しては、これだけ節約できるという表示は実績です。かつての商品はサバ読みがあり実態にそぐわない、ということなります。諸外国との電気消費量の比較は非常に複雑です。日本の冷蔵庫独特の機能があるからです。とはいえ日本の家電製品は、世界的に最も省エネしています。なぜここまで技術が進んだかというと、先ほど申し上げた「トップランナー方式」（トップの性能を規定にする）を 1997 年に導入したからなのです。そのおかげでいまや世界一なのです。トップランナー方式によって世界的な競争力を手に入れたなら、なぜ発電所に関してそれを導入しないのか、と私は思っていますが。

＊図版は田中優『地球温暖化 / 人類滅亡のシナリオは回避できるか』（扶桑社新書 2007 年）より出典

(2008 年、 九州大学芸術工学研究院)

田中　優（たなか　ゆう）
1957 年東京都生まれ。地域での脱原発やリサイクルの運動を出発点に、環境、経済、平和などの、さまざまな NGO 活動に関わる。現在「未来バンク事業組合」理事長、「日本国際ボランティアセンター」「足温ネット」理事、「ap bank」監事、「中間法人　天然住宅」副代表を務める。現在、立教大学大学院、和光大学大学院、大東文化大学の非常勤講師。　著書（共著含む）に『環境破壊のメカニズム』『日本の電気料はなぜ高い』『どうして郵貯がいけないの』（以上、北斗出版）、『非戦』（幻冬社）、『Eco・エコ省エネゲーム』『戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会のつくり方』『戦争をしなくてすむ３０の方法』『世界の貧しさをなくす３０の方法』（以上、合同出版）、『戦争って、環境問題と関係ないと思ってた』（岩波書店）『地球温暖化／人類滅亡のシナリオは回避できるか』（扶桑社新書）『おカネで世界を変える３０の方法』（合同出版）『今すぐ考えよう地球温暖化！１～3』（岩崎書店、子ども向け）

アンケート

参加総数　52 名　（うち回答者数 32 名）

満足	25 人	78%
やや満足	5 人	16%
普通	2 人	6%
やや不満	0 人	0%
不満	0 人	0%

■講演会感想

● 講演内容に関する全ての認識が変化し、新たな気付きを全ての人に知ってもらいたいと思った。今後の自分のアウトプットの方法を探し、自分を表現していきたい。（芸術情報設計 4 年）

● 地球温暖化に問題に対する危機感の無さよりも、危機感を持っていなくても生活に何の支障をきたしていない状況に恐怖します。（芸術情報設計 4 年）

● 今まで環境問題を経済の視点で捉えたことがありませんでした。違った視点で物事を捉えることにより、解決策を導き出せるのではないかと感じました。今回は環境問題がテーマでしたが、どんな問題に対しても『ナナメの発想』いわゆる今までに無い発想というものが不可欠だと思います。（芸術工学部）

● 1 対 1 の合理が全体の不合理となっていることに気づいた。これまでは利権によってかなりバイヤスのかかった情報を得ていた。ヨーロッパでは利権を崩して新しいシステムが動こうとしているが、まぜ日本は利権を崩せないのだろうか。（生物資源環境科学府）

●　個人の努力では乗り越えられない社会システムがあることに憤りを感じました。しかし同時にその社会システムを変えることができるのは個人の力であることにも気づきました。小さな一歩が大きなムーブメントを起こすことを頭において、日々の生活を送りたいと思います（デザインストラテジー専攻）

● 緑に恵まれた日本ではまだまだ危機感が薄く、どこか楽観的、他人事に感じているように思った。私たちのお金が知らずに軍事に貢献していることがかなりショックだった。平和と環境保全は切り離せないことを知り、エコ活動とともに平和を訴えていくことも大切だと感じた。（環境設計学科）

● CO2 削減の過程で、戦争をなくすことができるとは到底考え付かない発想でした。視点を変えることがいかに大切か感じました。（環境設計）

・　この 10 年がポイントだということ、つまり私たちの世代にかかっているのだと思います。これから 10 年は何が起こるのか、その後はどんな世界になるのか、イメージが先行して危機感が薄いような気がします。自分ではそういう現状にどうアプローチしていくべきか考えてみたいです。（芸術工学部）

● 漠然と考えていたこれからの仕組みのつくり方が、タテ・ヨコ・ナナメで示されていたのが最も衝撃的でした。本当にありがとうございました。（文学部）

● 働けば働くだけ生産消費が増え、環境を悪化させる社会でない生き方が求められると思います。私は、自分を主体として生きるために専門性を学習しているのだと思います。（画像設計）

● 家庭で節電しなくては！と強く思っていましたが、社会の仕組み、軍事費用や原子力発電の問題などを聞いて目からウロコでした。まずは問題に対して、その原因を明らかにすることの大切さを感じました。（一般・20 代）

● 環境問題は知っていることが多かったのに、目をつぶっていたことばかりです。省エネのための融資などアイデアの実践の必要を感じました。とにかく人に伝えようと思います。（一般・40 代）

● 希望を持てる内容で元気になりました。生まれて初めて「（エコ的な発想の）家を持ちたい」と思いました。（一般・40 代）

●「戦争反対をしない環境保護はありえない」という信念を持つ田中氏。マスコミが伝える家庭でのエコ対策よりも、企業の節電対策が重要だと話題にされたときから、会場がぐいぐいと惹きつけられていくのを感じました。たまに飛び出すユーモアにも気付かないくらい、真剣に話に聞き入っていました。学生へ、「どんなことをアウトプットできるかを見つけて表現していくことが、生きた証になる」というメッセージを残してくれました。学生からもたくさんの質問があり、田中氏の生き方が現代の若者にとって刺激的に映ったようでした。日常生活を通じたエコへの取り組み方法もわかりやすく解説していただき、実践しやすい内容でした。（大学職員）

特別付記

未来につづく道にいたるまで

「農場 青空ミュージアム」

九州大学農学研究院の中司敬教授が中心となった、農と芸術の協働としての最初の取組みです。

農場全体を展示空間とし、参加者が作品のレイアウトを決めます。等身大の彫刻は重いので、自然と力をあわせる場面が生まれます。作業の後、地域の農産物を使ったお料理を、生産者とともに青空の下でいただきました。知足は作品寄贈という形でかかわりました。（2006 年）

筑前農法へのオマージュとして設置。
「ばんば」鉄 1988 年

「寒立馬」制作・農場設置

制作中

福岡は、主に馬を使った「反転耕」（土を攪拌しないため、土壌が痛みにくい）が始まったところです。大地に立脚し、命を育む農のイメージを、妊娠中の馬に託して制作、設置しました。（2006 年）

「寒立馬」樟 2006 年

農場のヤマモモの下に設置されました。（左は本物のロバ）

「食育の基礎から深化へ－植物と対話する音楽」

JA 粕屋ミカン選果場において、地域名産の柑橘類を使ったインスタレーション（空間芸術）を制作。光と植物と響きが調和するイメージです。会場では「植物の声」から生まれた藤枝守教授作曲の音楽が、ヴァイオリンと笙によって演奏されました。光と植物と響きが調和するイメージです。作品下部は能古の島の「荒神祭り（土と火と水の神）」の供物からヒントを得ています。多くの方と共に作品を作り上げる喜びがありました。作品につかった農産物は、展示後に会場の方々と分かち合いました。（2007 年）

制作風景

「橘の響き」ミカン、ブロッコリー、竹　2007 年

ヴァイオリンと笙による演奏

参加者に素材を配布

琴による演奏

「お米の地産地消－粕屋米のブランド化」

再生を繰り返す自然界の命の営みを「稲（命の根）」に象徴させてインスタレーションを制作しました。素材は、米、ヌカ、塩、そして粕屋名産であるミカンの葉、バラ等です。展示会場では藤枝守教授作曲による「植物の声」としての音楽が、琴によって演奏される。稲と同様に、琴の神聖さも作品内で表現しました。環境問題が深刻化する中、「食」への意識は世界の社会動向を左右するほど重要なものとなっていきます。その局面を前に、まず私たちが取り戻さなければならないものは、風土と生活に密着した神聖なる精神空間ではないでしょうか。この造形表現は、その問いかけです。（2007 年）

「命の根」米、ヌカ、塩、ミカンの葉、バラ　2007 年

制作中

展示後、会場の方々に素材をわかちあいました

安積遊歩 講演会

1956年、福島県生まれ。カルシウムを吸収しにくい骨形成不全症という障害を持つ。2歳から13歳までに、20回近く骨折を繰り返し、手術を重ねた。20代はじめから障害者運動にかかわる。

1983年10月から半年間、障害を持つ人のためのサービス機関として先駆的なアメリカのバークレー自立生活センターで研修を受け、ピア・カウンセリングを日本に紹介する。

現在、障害を持つ人の自立をサポートする「CILくにたち援助為センター」の代表を務める。

また、フィリピンの貧しい村（パンガシナン県マーシン村）に対して奨学金援助を行うNGO団体「LINK」の代表を務めていたが、現在は積極的な活動を停止中。

1996年5月に同じ障害を持つ長女・宇宙（うみ）を出産。

＊1994年、カイロ国際人口会議で優生保護法と子宮摘出の問題をアピールし改訂への糸口を作った。（1996年に改訂され母体保護法と名称を変更）

障害をもつこと、いのちによりそうこと。それらに真摯に向かい合い行動する安積氏の語りは、多くの示唆に富んでいる。

あさか　ゆうほ
安積遊歩さんの語り

障害を持つ人々を中心におく

こんにちは。安積遊歩（あさかゆうほ）です。私は東京の国立市から参りました。国立に住んで20年、その最初の10年間は日本中、世界中を飛び回っていました。人々の共感能力・想像力に期待して、障害を持つ私たちの現実を変えていくために活動してきたのです。私たちの現実がよくなるということは、障害を持たないみなさんも生きやすくなるのだと信じて活動をしてきました。今も信じています。特に重い障害を持つ人々に注目し、その方々を社会の中心におくことができたなら本当に安心できる世の中になるのです。

なぜならば、いつでも誰でも障害を持つことができるからです。想像してみてください。目が覚めたら急に下半身が動かなくなっていたとしたら。帰り道に目の前がぼやけ視力を失うとしたら。ホラー映画のように感じるかもしれませんが、私の友人は実際にこのようなことがおきて障害を持つようになったのです。交通事故、スポーツによって障害を持つこともあります。スポーツは競争原理に則っているので障害を持つ確率は高くなります。もしそれが楽しむためのものだったら、もっと自分や相手の身体を大切にしながらできるのです。しかしあまりに勝ち負けにこだわるために、障害をもつ可能性が高くなると感じています。障害をもつ仲間ができるのはいいことですが、だからといってわざわざ、例えば水俣病、森永基礎ミルク、イタイイタイ病のような障害を持つ人々が増えなくてもいいと思いますよ。そう思いながら、あまりにも想像力が足らないのでお話をします。自分の問題として考えなければ、この優生思想社会を覆すことはできないのです。

命によりそう仕事

経済的にお金がかかるからと、障害者ばかりにお金をかけるなという論もあります。でもそれも全く違うと思いますね。障害のある人々の必要を満たすサービスを提供できる世の中は、戦争のために人手をとられ、人間として生き生きとしえないような仕事に多額のお金を回す必要がないのです。ほんとうに「命によりそう仕事」に人手をまわすことができたなら、年間3万数千人の人々が自殺する世の中を変えられるのではないかと思います。

収録の一時間後に放映されるというNHKの番組にでたことがあります。私がボランティアとして関わっているバタバタの会代表（フィリピンの障害児支援をおこなうNPO）として出演したのです。そこで私は「障害をもつ人たち、子供たち、認知症と呼ばれるお年よりの方々が本当に生き生きと生きるためには人手が必要です。だから自衛隊を解散してでも人々に介助者やヘルパー、コーディネーターなど命に寄り添う仕事をしてほしい」と話したのです。自衛隊は要するに人を殺すために莫大な予算を使っているわけです。もっと人間が人間らしく生きる仕事にお金をまわしましょう、そう言ったものですからプロデューサーが飛んできました。「危険です。そんなこといったら安積さん、右翼に命を狙われますよ。」そこで私は「言論の自由を弾圧するなんて憲法違反です！」ってね。（笑）プロデューサーは驚いて「安積さん、本気ですか？とにかくNHKなのだから、そんな過激なこと言わないでください」と言う。ふさわしいふさわしくないかではなく、どうせカットされるって決まっています。静かにカットしてくれればいいのに（笑）私はそこで「自主規制をすべきである」というメッセージを刷り込まれる気がして、非常に不愉快になったのです。こんな風に本当のことを言うことを、どんどんできなくさせられるのです。だって本当のことなのですよ。

フィリピンの障害児支援

私は障害者運動に30年間関わっています。最初の頃は、アメリカ・スウェーデンなどから自立生活運動などいいところを学び、日本の障害者の権利の獲得や地位の

向上のためにがんばってきたのです。もちろんそのアメリカでも州によって格差があり人種差別に絡んだ問題もあるのですが。今日私も車椅子に乗ってきましたが、日本では行政から車椅子の支給があるのです。フィリピンの仲間から声をかけられ、講演会に行ったとき驚きました。日本では見られないのですが、ハイハイしている大人がいるのです。講演後に障害を持つ人がハイハイをして握手を求めてきたのです。あまりにも日本とは現実がちがう。社会保障がまるで機能していないのです。お金がある人はアメリカなどの車椅子中古品を買えるかもしれません。しかし講演会に来た人々はハイハイで、もしくは友人の車に乗せてもらったり、リアカーを改造した手作りの車椅子を使ったりしていました。私が想像していた状況よりもっとひどい状況だったのです。

何かしなければいけないと思った次の日に、私を招いてくれたグループが「フィリピン障害児支援を始めたい。子供たちにあってもらえませんか？」と声をかけてくれました。そのとき抱っこした２才の障害児が、生後２・３ヶ月の乳幼児くらいの大きさしかなかったのです。そのことにものすごい衝撃を受け、何かできることはないかと考えました。月に２千円あれば生きていけるという話を聞き、その２千円を何人分集められるかわからないけれどがんばって集めるよ、と言って帰ってきました。それをバタバタの会と名づけ、様々な人々に声をかけました。一番スポンサーが集まった時で約 200 人でした。私はいろんな活動に関わっていてどれも大事なものですが、そのひとつとしてバタバタの会がありました。障害児中心の活動を９年続け、それを障害のない子供も含めた教育支援活動まで広げ５年くらいたったところで、私は親であることに、もっと力を入れようと考えました。今 11 歳になる娘がいるのですが、私と同じ障害を持って生まれたので、たくさんのエネルギー、愛情をあげたいなと思ったのです。様々な人々の現実をみていろいろな活動を同時進行で行い、娘が生まれてからも５年くらいはバタバタの会を続けました。しかし子供の手術に直面したことを契機に、この活動をもっとゆっくりとしたペースで行うことにしたのです。今でも古着やおもちゃは集めて送ったりしています。ただフィリピンのケースワーカーと連携して、どの子にどの程度の支援を行うかといった活動はお休みをしています。

優生保護法

母親になった、ということも少しお話します。11 年前思いがけなく妊娠しました。優生保護法という法律、知っていますか？名前からしてこわいと思いませんか？「優れて生まれる」と書くのです。1948 年「女性の身体を戦争のための産む道具にするな」という女性の声が後押ししてできた法律なのです。女性の自己決定・選択権を大事にしようとしてできた法律だったのですが、残念なことにそこに障害者差別の条項が入っていたのです。第１条に「母体の保護」と「不良な子孫の出生を予防するものである」とありました。不良な子孫の出生を予防するというところが、大きな障害者差別だと私は思います。みなさん、どうですか？自分が不良な子孫と呼ばれたら、どんな気持ちがするでしょうか？私は中学の時にその法律を見つけて読んだのですが、これは障害者のことを言っているなとすぐにわかりました。そして別表を読むと、私と似たような障害名がずらりと書いてあったのです。そのような障害を持つ人は不妊手術をしてもいいですよ、という法律だったのです。不良な子孫と呼ばれた人々は「子供を産むな」ということですね。生まれてくるな、ということです。中学の頃大きな衝撃を受けました。「この世の中は、私に生まれるなといっている」と。感受性の強い私は、その後何度も自殺未遂を繰り返したのです。

でも、もちろん死ななくてよかったです。なにができるかということに気づきました。不良な子孫の出生を予防するという法律をやめさせようと、６・７年後に思えたことはラッキーでした。そう思えたということ、すごいと思いませんか？気づいたのは中学生、それを変えていいのだと気づいたのは 20 才の頃です。それが「市民である」ということの自覚ですよね。社会を作っているのは政治家や官僚だけではないということ。その法律が正しいものか、有効で必要性があるかどうかを決める主人公は私たちなのであると、障害をもつ仲間たちと出会うことによって自覚していきました。

「母よ、殺すな」（生活書院）という本が今度復刻されますから、ぜひ読んでほしいです。これは障害者運動の古典というべき本です。横浜で障害をもった子供を殺したお母さんが減刑嘆願運動をされました。障害児の子供の首を母親が絞めて殺してしまった事件です。周囲の人々は「子供は障害児なのだから殺されても仕方がない。母親がかわいそうだ。刑罰を軽くしてほしい。」と運動したわけです。障害者側からすると、障害を持てば殺されて当然なのかという問題を提起した事件でした。今までもそのようなことはたくさんあったし、今でもあるのです。障害をもつ 40 代の娘を 60 代の父親が殺す事件

が２ヶ月前にありました。そのような社会的現実を後押しするかのように優生保護法があるのはよくないのではないかと、障害を持つ仲間たちは自覚したのです。その減刑嘆願運動に対して「母よ、殺すな」というチラシを撒き、優生保護法に対しても強力な運動を行おうとしました。しかし車椅子の人々が集まるということだけでも大変なエネルギーがいるのです。だから少しずつしか活動できなかったのですが、1994 年にエジプトのカイロで国連主体の大きな国際人口会議が行われると聞いたのです。私は比較的小回りがきき、また本気でこの法律を変えたいと思っていたので、NGO のメンバーの一人としてこの会議に参加することに決めました。

政府間会議と NGO フォーラムが並行して同時に行われたのですが、私が参加した後者の会議では 2000 人以上の参加者のうち車椅子の人は私一人でした。日本から、いや世界から私一人だったわけです。だから大きな使命感に燃えました。そこでは人種差別やアジア・アフリカ地域の人口爆発をふせぐための不妊手術の現実について語る人々がいました。文字のよく読めない女性たちの腕に不妊のための薬を埋め込み死亡や病気に倒れるという現状等を、当事者として語るというものです。私は優生保護法によって、人口の調節を図るという政策のあり方を問題提起しました。優生保護法は人口調整なのです。

今も少子化、少子化と騒いでいますが、子供を産むための状況があまりに悲惨であり、与えられる情報が偏り、間違っているために少子化になるわけです。生まれた子供たちへのよりよい支援があれば変わるかもしれません。例えば遊び場の充実､特に東京の子供たちが家でゲームするしかないという状況です。女性にとっても様々な価値観がありますが、子供に寄り添うよりもっと価値があることがあるという刷り込み。あるいはすさまじい美容産業の攻撃の前に、やせなければ、化粧をしなければ、と身体をいじめ続けていったら、子供だってなかなか生まれようとしないですよ。それは個人的な女性の決定でなく、社会がそうさせているわけです。スウェーデンでは、子供に対する社会保障、あるいは結婚しているか・していないかによる差別を一切なくしました。そうすると少子化がとまり出生率が上向きになったのです。少子化ということは、社会のひどい現実が女性に産むことをためらわせてしまうのだということを覚えておいてほしいのです。

カイロ国際人口会議

第二次世界大戦前は「産めよ。増やせよ。」という政策がありました。女性の身体を国家の道具として使っていたのです。今でも、堕胎罪というものがあります。中絶をした女性と医者には禁固刑と罰金を課すという法律です。女性を国家の道具に使うなという主張の中で、障害者に対するまなざしだけは変わりませんでした。戦後この法律をもとに、多くの仲間たちが強制的に不妊手術をさせられました。スウェーデンでは 10 年ほど前から、不妊手術を強要された人々が、その怒りと悲しみから立ち上がって損害賠償を求めるという運動も起こっています。日本でも数万人の人々が手術をされたにもかかわらず、スウェーデンのような補償は全くされようとしていません。そこで私はカイロの人口会議において、「障害をもつ人々の産む自由を奪おうとしている！」と大声で言ったのです。車椅子一人ですし、目立ちますよね。政府間会議にきていた外部大臣にまで会うことになりました。大臣に、「優生保護法ってご存知ですか？」と聞きました。「知らない」と答えるので、「障害者に対してとても差別的な法律なのでやめてほしい」と言いました。驚いた大臣は厚労省からファックスを取り寄せ、読んだらしいです。1994 年の会議を経て、なんと 1996 年には優生保護法が改訂されたのです。もちろん私だけの反対の声ではないですよ。20 カ国集まった会議の中で、日本にはまだまだ差別的な法律が残っているということが宣伝されたわけですから。

ユダヤ人大虐殺を行ったヒットラーは、ユダヤ人を殺す前に同じ民族の精神障害者・身体障害者、それから同性愛者などを虐殺しているのです。ご存知ですか？その虐殺の根拠になったのが、優生学という学問でした。そこから優生学を根っこにした優生思想はヨーロッパ各国、アメリカ、日本にも広がっていきました。日本では障害名まで載って、堕胎が容認されてきました。日本でも優生保護法がある・なしに関わらず、施設などで「生理介助が面倒だから」と子宮を摘出されることがありました。親から子宮摘出手術を強制された障害を持つ方々が、私の仲間にもたくさんいます。これがこの社会の障害をもつ人々に対する共感能力のなさ、残酷さ、自分とはちがうと見限ってしまう意識ですよね。いつでも誰でも障害者になれるにもかかわらず。

優生思想

講義の最初に「軍隊がいらない」と言ったのは、戦争のために障害者を差別する方向に動くよりも、また施設を作って障害者を隔離するよりも「共に生きること。対等に生きること。」のためにお金を費やすべきだという

ことです。これが今の日本ではできていません。スウェーデンなど北欧は進んでいる方です。アメリカでは人種差別がありますが、白人で裕福な人々への福祉は進んでいるといえます。特にこの国は戦争がやめられないので、傷痍軍人への福祉はいいのです。最近聞いたところによると、脳性麻痺福祉はお金がかかるので莫大な研究費を投与して遺伝によるものかどうかを研究しているのだそうです。この研究は、もし遺伝によるものだったら出生前診断で排除するという、こわい側面があります。

これが優生思想です。優生思想とは「障害をもって生まれることは不幸なこと。あってはならないこと。生まれるべきではない。」ということ。障害＝ダメという思想です。障害を持つ人の出生の割合、どのくらいだと思いますか？ 100 人生まれて 1・2 人？ 5・6 人？ 10 人くらい？多数決はあまり好きではありませんが、真ん中の 5 人くらいです。環境ホルモンなど様々な影響で流産・早産・死産が増えているかもしれない、というデータもあります。それを含むと 5・6 人より増えるかもしれません。どの子も素晴らしい命なのです。こわいのは差別しあうことです。障害を持って生まれることは、こわいことではないのです。

血族

私の友人で不妊治療した人がいます。不妊治療が残酷なのは、多くの場合女性が犠牲になるのです。男性とちがって女性が卵子をとる際、とても痛いのです。彼女は痛い思いをして 5 つ卵子をとりました。顕微鏡の下で受精させ、そのうち 3 つをおなかに戻しました。3 つ全てが受胎しました。そこで 3 択問題です。お医者さんはそのとき何と言ったでしょうか？おめでとう？（挙手なし）問題の出し方が悪いよね。いつも娘に「遊歩！問題の出し方が悪いよ」って怒られるの。（笑）実際は、お医者さんが「失敗だ。」と、うめいたのです。3 つ全て受胎すると障害児が生まれる確率が高くなるというのです。なんて失礼な話でしょう。でも彼女たち夫婦は 3 つ全て受胎したことを喜びました。出産後忙しくなったとしても待ち望んだ子供なのですから。3 人の子供のうち、男の子 2 人が障害を持ち、女の子は障害なく生まれました。出産後、お医者さんから「失敗だ。」と言われたことに改めて腹が立ってきたそうです。生まれたどの命もかけがえなく素晴らしいのに、障害を持って生まれたら失敗で、障害を持ったら余計苦労するのが当たり前だという社会のあり方に、ものすごく腹が立ったわけです。そこで彼女たちは私を招いて講演会を主催しました。その後彼らは養子縁組の問題を取り上げました。子供は自分の子供でなくてはいけない、つまり血族でなければいけないのだという思い込みによって様々な差別を受けることになったのだ、と彼女は気づいたのです。自分の血が通わない子供だって、とても大事な子供たちなのです。

本当の情報

優生保護法の話にもどりますが、私が娘を産んだその年にこの法律はなくなりました。母体保護法と名前が変わったのです。法律内で女性が中絶をする権利は守られました。しかしこれは子供の側からみれば残酷なことなので「女性の権利」と言い切っていいのかという問題もあります。問題を女性の側に引き寄せ、自由を獲得するという努力は大事なことです。ただ「母体」という名前はひどいですよね。また「母親」だけです。「女性の健康と権利に対する法律」にしたいと思うのですが、優生思想の部分を切り取って母体保護法となりました。

ほんとうにまだまだ途上です。全ての問題は途上なのです。だから、頭をつかって、羅針盤をたてて「何が本当の情報か。真に必要な情報なのか。」を考えていってほしいのです。自分のための社会なのだ、と考えていいんだよ。自分は他人のためだけにいるのではなく、まず自分のためにあると考えていいのです。この社会は自分のためにある。まず自分がいないのなら、この社会がどうであるかなど関係ないですよね。自分がいるのだから、この社会にいっぱいの希望と夢を抱いていいのです。その中で美容産業などのどうでもいい情報によって自分を傷つけるような方向に翻弄され、人と繋がることを寸断され、「自分が主人公なのだ」と忘れさせられるのは本当にもったいないことなのです。私たちの一回限りの人生です。自分の身体も心も大切に生きるということは享楽主義ではない本質的な生き方なのだと、そう自分を信じてあげてください。人と人とが助け合い、支え合う世の中であってほしいと誰でも望んでいると思うよ。

小さい人たちを見れば明らかです。小さい人というのは子供たちのことです。大人たちがどんなに幼い子供たちに競争を教え込んだとしても、子供たちにかけっこさせて誰かが転ぶと心配して寄っっていきます。どうしたの？と泣いている子のそばでしゃがんだりしています。私たちはとても優しい人として生まれついています。あまりに過酷な競争原理や、勝ち負けなどのくだらない情報の中で、わけがわからなくさせられているのです。私たちはいい人だからこそ自分のためだけに生きられないし、そして人のためだけに生きる必要もないのです。私

たちはお互いに協力しあい、大事にし合える社会を作れるのだ、と覚えておいてほしいと思います。

「はたらく」という字は、「はた」を楽にするというところからきた言葉だそうです。自分の仕事をすることで相手を楽にして自分も楽に生きられる、そういうことを意識していい仕事をしてほしいと思います。
私はあらゆる問題に関して自分の意見を持っていますのでいろいろ話しましたが、二回目の講演でもあり疲れていますので、このへんにしておきます。質問があれば聞いてください。今日はありがとうございました。

（会場から質問）
「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」（熊本市の慈恵病院が設置した、親が育てられない赤ちゃんを匿名で受け入れるポスト）について、安積さんはどのように思われますか？

（安積氏）この間も同じ質問を受けました。もしそこに障害をもつ赤ちゃんを置いていくとしたら、それは本質的な解決策ではないと考えます。そして議論をし続ける必要があると思います。先ほどもいいましたけど、血族としての家族にとらわれているというのも確かです。養子縁組や里親制度というのは世界中ではたくさん事例があります。しかし日本では血族としての家族という考え方があまりに強いですね。とはいえ実際に３歳の子がゆりかごにおいていかれましたね。その３才の子はつらいと思います。あのように話題になること自体、いいのかという思いもあります。一方で目の前の虐待を受けている子供のことも真剣に対処しなくてはならない。だから簡単にだめだといいきれないのです。ひとつ言えるのは本質的な解決ではないなということです。

結婚制度そのものに問題があるのかもしれません。日本には戸籍制度がありますよね。戸籍は世界共通の考え方だと思いますか？戸籍制度はほとんど日本だけなのです。日本が植民地支配した韓国と台湾には、似たようなものが少し残されています。夫の姓になって当たり前だと考えているのは日本だけです。戸籍制度に固執しているかぎり、血族への固執も変わらないでしょう。なぜ戸籍制度が必要になったのでしょう？それは健康な男子を徴兵制度によって持っていくためなのです。軍隊に男性を入れるためなのです。だからみなさんは、戸籍に入ることを単純に嬉しいこととは考えないでほしいのです。どうせ戸籍を入れるなら男性が女性の戸籍にいれるのがいいと思いますよ。その先駆けというか、知足さんのところはそうですよね。それでほんの少しは問題提起になります。どれほどくだらない戸籍制度のことで、それをくだらないと思えなくなっているのか、ということを感じてください。まるでそれが本当のような、そうしなくてはならないかのような幻想に、どれだけとらわれているか。

私は３ヵ月間籍を入れたのですよ。私の本「車椅子からの宣戦布告」読んでくださいね。私はあまりにも過酷な結婚差別を受けました。今 51 才ですが、33 才の時結婚したいと思いました。籍を入れようとしたら「悪魔、たたり」と言われたのです。洗濯も料理もできないような女がうちの息子の嫁になれるわけはないだろう、と。私は悪魔ってどこにいるのかと、後ろを振り向いてしまいました。

私は医者から 20 才までしか、ひどい医者だと３才までしか生きられないと言われていました。子供が産めると言った医者は一人もいませんでした。でもそれもできました。私は外務大臣に会ってから、社会を変えるためには政治家にならなくてはいけないと思いました。1994 年のカイロの人口会議でそう決意したのです。そのためにまず市会議員に立候補しようとしてビラを撒いた日に、私のことを心配し続けた母親がくも膜下出血で亡くなったのです。命がけで止められたなとさすがに思い、政治家になるのを保留していた間に娘を妊娠したのです。文部大臣になるより、びっくりしましたね。私の身体は幼い頃から取り続けられてきたレントゲンによる放射能被爆で絶対妊娠しないと思っていたのです。あの薄いレントゲン写真を大量に収納した棚が、重みで落ちるくらいの枚数のレントゲンを撮られました。私の身体はほぼ生体実験の対象でした。

薬害エイズ、731 部隊の問題、みんな書いておいて。知らなきゃいけないこと、いっぱいあるんだよ。日本の医療は「命に寄り添う」というところから出発していません。そのような経験から得たことは、自分の人生は徹底的に自分のものであるということです。誰かがこういうから、親がこういうからと、自分の人生を人に任せないでください。愛おしみ、頬ずりして自分の人生を生きてくださいね。誰からも傷つけられなくていいし、自分からは絶対に傷つけてはだめだよ。お酒やタバコやお薬に、自分の人生を滅ぼされることのないようにしてください。携帯電話にも気をつけて。電磁波がどれだけこわ

いものであるか、調べてください。イギリスでは 16 才以下の携帯電話の使用は禁じられています。東京の議員が東京都の子供たち全員に携帯電話を持たせようとしていると聞き、あきれてしまいました。携帯電話を頭にあてるとき、電子レンジに頭をつっこんでいるくらいの電磁波をあびているそうです。電子レンジに頭を突っ込んでいる図っておかしいですよね。食品添加物、農薬の問題にせよ、先進国の中でも日本は危険な状態にあります。車の排気ガス規制のおかげで、東京も少しは空気がきれいになりました。しかし使えなくなった車をフィリピンやバンコクに行って売っているのですよ。アジア諸国では喘息の人々が増えています。排気ガスを出す車を日本は輸出しながら、国内では排気ガス規制の車を売っている。経済のグローバリゼーションだけはいやですが、様々な問題をもっとグローバルな視点をもってきちんと見てほしいと思います。ありがとうございました。

（2007 年、九州大学芸術工学研究院）

支え合う社会に転換を

障害者の自立運動

安積さんあす講演会

南区

カルシウムを吸収しにくい骨形成不全症で、約三十年前から障害者の自立運動にかかわっている安積遊歩さん（東京都）の講演会が十二日午後二時半、福岡市南区弥永二丁目の特定非営利活動法人（NPO法人）「エスタスカーサ」交流スペースである。主催は、九州大学大学院芸術工学研究院助教の知足美加子さん。

安積さんは一九八三年に米国のバークレー自立生活センターで研修を受け、障害者同士がサポートし合うための「ピア・カウンセリング」を日本に紹介した。九六年には同じ障害を持つ長女を出産。「車イスからの景色」などの著書がある。

学校現場でも近年、心の教育が模索される中、知足さんは「他者の痛みを想像できない社会」から「互いに支え合い、生き生きと暮らせる社会」へ転換する方法を、今回の講演を通して考えてほしいと呼びかけている。

また、十二日午後六時半からは、同区塩原四丁目の九州大学芸術工学部511教室でも安積さんの講演があり、一般参加もできる。いずれも入場無料。問い合わせは、知足さんの研究室＝092（553）4465。

障害者の自立運動を続け、1996年には同じ障害がある長女を出産した安積遊歩さん（右下）＝安積さん提供

2008 年 7 月 11 日
西日本新聞（朝刊）

種と祈りの形

参加者と大地、また参加者同士の関わりを深めてもらうことを目的とした造形ワークショップをNPO 法人エスタスカーサで行った。（ここでも安積氏は講演を行っている）

参加者は、石膏を用いてひまわりの種を作る。石膏をペットボトルを使って風船に流し込み、それを両手で押さえて（祈る形で）凝固させる。石膏は凝固に５分ほどかかり、微かに発熱する。参加者はその熱を感じながら、固まるまでの時間を味わう。

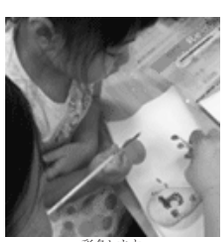
固まったら風船をはずし、ヤスリやサンドペーパーで石膏を「ひまわりの種」の形に研磨する。大地にヒマワリの花を模して、制作した種を配置する。花弁部分はトウモロコシの皮を利用する。

トウモロコシを使用するのは、世界の飢餓問題とトウモロコシの関係（バイオエネルギー、肉食用家畜飼料への過度の利用など）を、子どもたちに伝えるためである。「大地から得られたものを感謝をこめていただき、大地にかえす」という地球環境への意識を、子どもたちに投げかける。（2007 年）

石膏をペットボトルから風船に流しこみます。

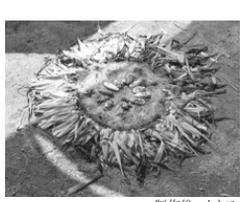
固まるまで、手を合わせます。

みんなの種



彩色します。

トウモロコシの葉をヒマワリの花の形にします。



制作後、トウモロコシはみんなでいただきました。

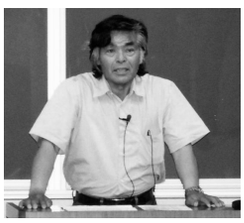
貝澤耕一 講演会

1946年、北海道沙流郡平取町二風谷生れ。アイヌ民族。1997年二風谷ダム裁判の原告として「アイヌ民族は先住民族」「二風谷ダムは違法」（文化享有権）の判決を勝ち取る。

現在は「アイヌ文化保存会」（フィリピン・カナダ等海外、国内アイヌ古式舞踊公演多数）、森を再生する「NPO法人ナショナルトラスト・チコロナイ」等の活動をしている。、海外の先住民族との交流や次世代アイヌへの文化継承に力を注ぐ。

無農薬による農業を行い、直販している。（シケレペ農場）

2008年にアイヌ民族は日本の先住民族であったことが、はじめて公的に認められた。本講演は、先住性が認められる以前のものである。民族問題や、環境問題に貝澤氏は鋭い警笛をならす。



皆さん、こんにちは。

ご紹介にあずかりました貝澤耕一です。私の本職は百姓ですので、話はあまり上手ではありません。ただ私の講演会を聞いていただきたいというのは、日本でもこういうことが行われているんだと。（皆さん九州の方々なのでご存じになる機会が少ないかと思いますが）人間を侮辱するような事が行われていることを理解して下されば幸いかと存じます。

アイヌ民族

私が生まれたところは、北海道の南側、昆布・競走馬の産地である日高山脈の近くの村です。千歳飛行場にも近く、札幌までも2時間もあれば着くという地理的には便利な所です。その二風谷という村で私は生まれ育ちました。アイヌ語では「ニプタイ」木の生い茂る所という意味です。この村というのは、戸数で140数個、人口500人ほどの小さな村です。この村の7割以上の人々がアイヌ民族の血を引いていると言われています。言い換えますと、アイヌ民族が世界の中で一番密度濃く生活している場です。北海道庁の調べによると、自分をアイヌ民族と名乗った人は約2万4千人います。しかしその10倍はアイヌ民族はいるだろうといわれています。なぜ名乗らないかというと、歴史的にまた現在も、アイヌ民族はひとつの民族として認められていないためなのです。

皆さんの中にもご記憶の方いらっしゃるかもしれませんが、元首相である中曽根さんが「日本は単一民族国家である」という発言をしました。また神戸大震災の時、ある大臣が「日本は単一民族国家だから、こんなに復興が早かった。」という発言をしましたね。そういう考えのもとで、日本はアイヌ民族を認めていないんですよね。そして認めていないのは、アイヌ民族だけでなく、第二次世界大戦の時に日本政府に協力し、旧ソ連に住めなくなって北海道に移り住んだギリヤークの人たち。それよりもたくさん、皆さんのすぐそば在住している朝鮮半島から来られた方々がいます。その人たちだって日本における少数民族なんです。その人たちをを日本は認めずに、日本は単一民族国家だという。

在日の方々より少しは私たちが幸せなのかなと思うことは、私たちには日本国籍と共に選挙権がある。在日の方々は、皆さんと同じように義務教育を受け生活をしているにもかかわらず、日本国籍も選挙権ももらえないという現実。こういう矛盾を皆さんに気づいていただきたいな、と思います。そういう方々ばかりでなく、東南アジアやいろいろな国から来た人々が日本に住み着いています。その人々だって、日本の少数民族なんです。独自の言語と文化を持っている民族なんです。

1992年まで外務省は国連に対して、日本には少数民族は存在しないと報告していました。1993年になってはじめて「日本に少数民族がいてもやぶさかでない」という報告書をだしたのです。日本の大好きな曖昧な表現です。いるといってもいい、いないといってもいい、それは勝手だよ、でも私たち政府としては存在するということをはっきり認めませんよ、という報告書が、未だ訂正されずにそのままになっています。

歴史的構造問題

それではなぜ私たちアイヌ民族がこうなったかということについてお話しします。あまりにも私たちの最後の天地・北海道 ..... 最後の天地というのは、おそらくアイヌ民族というのは全国にいたのです。先日NHKでDNAに関する番組があっていましたが、アイヌ民族と沖縄の人々ではDNAが一つしか違わない。たぶん同一民族だったのでしょうね。だから私なんか沖縄にいくと「宮古んちゅう」といわれて地元の言葉で話しかけられて困るんですね。何を言っているのかわからないからニヤニヤしてると、答えないから怒られる。番組でも言ってましたが、たぶん朝鮮半島から来た人々にアイヌ民族は北に追いやられた。そしてどんどん追いやられた最後の天地が、北海道だったんでしょう。

..... 最後と思っていた北海道、しかしそこもだめでした。あまりにも「自然の幸」が多すぎたんですね。自然が豊かすぎた。「見渡す限りの草原」と観光パンフレットに色々書かれていますが、もともとの北海道というのは大

木に覆われた密林の島です。　その密林の島北海道で、アイヌ民族は周りの木や草や動物・川から自分たちの生活の全てをいただいて生きていた。ですから周りの動植物がなければ、自分たちが生きることができないということを充分知っていた民族なのです。その生活が、つい100数十年前までは行われていたのです。ところが、そこは日本にとって非常にお金儲けが可能な島だった。

皆さん、日本で一番昆布の消費量が多いのは、沖縄ですよね。ところが沖縄で昆布取れないんです。取れないのに、なんで消費量が多いのか。答えは簡単なのです。

はじめに持ち出された北海道の幸は、海の幸でした。海草であれば乾燥させて、北前船にのせ、北海道から日本海を越えて関西の方まで運ばれた。魚であれば塩漬けにするとか、乾燥させるとか、あるいは煮詰めて油を取り、残りは農業用の肥料にするなどして、どんどん関西地方に運ばれた。大量に来れば処理に困る。処理に困ったものをどこにぶつけたかというと薩摩藩です。薩摩藩だってそんなに消費できない。それではどこにいくかというと沖縄です。そのようにして昆布のとれない沖縄が、日本最大の昆布の消費地になっていった。そのコンプ、日本語で昆布と発音してますけど、あれはアイヌ語なんですね。..... アイヌ語では濁音の発音がありませんから、コンプと発音します。皆さんがよく知っている言葉の中でアイヌ語のものといえば、トナカイ、あるいは動物園で人気を読んでいるラッコもアイヌ語です ..

まずは海の幸が北海道から持ち出され、次に内陸へと向かっていった。内陸に向かうということは、山の幸です。先ほども、申し上げたとおり密林に覆われた島・北海道には木々がたくさんあった。昭和初期までその木々をどんどん運び出して、ヨーロッパに売りつけています。ナラの木を1メートル立法の角材にし、船に積み、ヨーロッパに運び出しています。木を切り出す作業から、船積みまでの労働のほとんどは、アイヌ民族が強制的にやらされていたといいます。日本には奴隷制度はなかったと思っている方もいると思いますが、アイヌ民族は実質的な奴隷として使われておりました。

北海道を何度も探検している松浦武史郎が言っています。記載されているものによると武史郎は、二風谷に上陸したと。なぜ「上陸」という言葉を使っているかというと、密林の島北海道では歩ける道がない。川を船で渡り歩いたんですね。川から一つの村に上がるから、上陸なんです。そのとき松浦武史郎は、二風谷の村には15才から50才くらいの男性が誰もいない、と記しています。その男の人たちがどこに行ったかというと、北海道の西・厚岸という所に連れて行かれていたのです。魚を捕って、その魚を煮詰め油を取って、その粕を詰める作業をさせられていた。皆さんもおそらくこの名前を知っているかと思いますが、萱野茂さん（元参議院委員、2006年逝去）のお爺さんはそこに連れていかれました。労働がきつい、まともな食事を与えられない .... そこから逃げ出したくて、自分の指を切ったほどなんですね。指がなければ帰してくれるだろうと。それでも帰してもらえずに、一年中働かされた。奴隷と変わりないですよね。

一年働いて与えられた物といえば、本州では普通に生活の中で使われていた漆塗りの器一個です。それが年間の報酬として与えられた。一年も働いて貰ったものなのだから、おそらく高価なものなのであろうと、アイヌ民族は思ったんですね。博物館などでアイヌのものが展示されてあったら観て下さい。必ず、漆塗りの容器が展示されています。それはアイヌが宝物と思って、大事に保管していたからなんです。北海道では漆塗りという技術がなかったのです。

侵略と自然破壊

なぜこんな事をしたかというと、日本は北海道という「土地」が欲しかったからなのです。アイヌはロシアとも中国とも交易しておりました。耳飾りやネックレスなどの宝石、アイヌの衣装の中のきらびやかな絹衣装、それはほとんど中国から来ているのです。日本はそれだけでも欲しかった。知床にある遺跡からは、ワインを作った痕跡も出土している。アイヌ語のなかでプレシサムという言葉があります。「プレ」は赤い、「シサム」というのは隣人という意味です。白人はすぐ赤ら顔になりますね。髪が赤いからプレシサムではなくて、顔が赤くなるからプレシサムというんです。これらのことは、ロシアとも交易していたということを物語っています。

このように自然の幸が豊かだった北海道を、日本の土地にしたい、ということで日本人は北海道に侵出してきました。その過程で一番邪魔になったのが、私たちの先祖アイヌ民族なのです。ですからアイヌ民族を無きものしなくてはならない。もしアイヌ民族が住んでいることが世界に知れたら .... まぁその時代は今ほど情報網が発達していなかったのですけれど .... 自分たちの領土にする事ができない。そこで日本政府は、北海道に3つ大きなお寺を建てました。伊達地方のダテ、道南のウスというところ、そして日高地方のサマニというところです。

これは北海道は俺たちの領土だ、という証なんですよ。対外的にここは日本の土地だという証として建てて

いる。そのなかで、アイヌと交渉したり、調印したりしたことがあったかというと、一切そんなことは行っていないんですね。世界広しといえども日本のように、もともとその土地に住んでいる人となんの話し合いもなく、約束もなく入り込んできたというのは殆ど例がありません。そういう状況の中、日本人がどんどん北海道に入ってきた。そして自然の幸を持ち去った。特に第二次世界大戦が終わった時に海外から帰ってきた人々、仕事はない、お金はない、その人たちを北海道に送り込んできた。

人がやってくるという事は、森を壊すという事なんです。森を壊して畑にして食料増産を計った。森を壊すというと何が起きるかというと、災害が起きるんです。森というのは雨が降れば水を落ち葉の下に蓄え、その中では植物が育ち微生物が育ちその排泄物が水に溶けて川に流れる。川に流れると、水生植物や魚、昆虫を育ててくれる。海に流れれば海草や、魚や海の動物を育ててくれる。そうだから北海道は自然の幸が多かったのです。森がなくなっていくと、どうなるのでしょう。北海道では昔ほど海の幸が取れなくなっています。ただ鮭だけは、人工増殖で昔より取れるようになった。おかげで皆さんも安く食べられるようになったと思います。つい、3年前くらいからですね。人工増殖ができたからです。

しかし、未だに近海にシシャモも入ってこない、ニシンもはいってこない。これは単に、森を壊してしまったからなのです。そのように、一つの体系が壊してしまったら人間が生きていけないということを、アイヌは知っていたんです。生物が生きていく、地球上のものが生きていくには、一つの「まんまるい輪」でなくてはいけないんです。そのまんまるい輪を人間は平気で壊していってる。そもそも自分たちが力が強いかのように、何でも支配できるかのように ...。それをはっきり証明しているのが、北海道だと思います。

ですから皆さん、今度北海道に訪れるときは、そのようなことを頭に入れて北海道を見て下さい。広々とした北海道、見渡す限りの草原は、明るくて確かにいいかもしれない。でもそれは我が勝手に、自分の思いで人間が作り出したものなのです。

幸いに、リゾート法が無くなったからいいようなものの ....。人間が木を切り倒して、ゴルフ場を作った場合、ゴルフ場というのは恐ろしいのです。もしゴルフ場を経営されている方がいらっしゃったら申し訳ないのですけど、私たち百姓からみてもゴルフ場というのは非常に恐ろしい。ゴルフ場には、虫がいないのです。あれだけの草地の中に、虫がいないというのはおかしい。それはなぜかというと、ゴルフ場では少なくとも週に一度は殺虫剤が散布される。それでも死なない場合はガス状にして、土の中に散布している。ゴルフ場だけで終わればいいのですけど、皆さんよく考えて下さい。ゴルフ場は山の上にあります。雨が降ればそれらは水に溶けて、湧き水になって小川に流れ、皆さんの生活の場に入り込んでくるのです。その水を、みなさんは知らないで飲まされている。

話がそれてしまいましたけど、北海道にやってきた人々は北海道の自然の幸がどうしても欲しかった。戦後の人口流入による食料増産、その後はリゾート法によって森は壊されていったのです。それが何を残したかというと、少し雨がふれば洪水が起こる状況を作っていった。畑が水に沈むのです。九州でも五木のダム問題、子守歌の里五木村が今でもダム建設でもめています。皆さんもテレビでごらんになったかと思いますが、その五木の里も数年前台風でものすごい数の木が倒されましたね。そのすぐ後、私はあの土地を歩いてみました。木の倒れているところ、土砂が流れているところはどんな所であったか。殆ど人間が植えた、杉・檜の山です。私が歩いた範囲では、昔から自然に任せている森、木がバランスよく自由に育っている木々は倒れていなかったのです。

ですから、皆さんの住んでいる土地を守るためには、その土地、その空気、その気候ににあった植物が自由に育つのが一番なのです。それを人間が勝手に、これがいいあれがいい、これがためになるんだと、それだけを植えてしまう。花粉症だってそうですよね。昔なんて花粉症なかったんですよ。人間がお金になるからといって杉・檜ばかりを植えるから、ひとつだけ多くなるから、こういうことが起きてしまう。アトピーに関してもいえることだと思います。私は現在53才、終戦の翌年に生まれています。私が小さい時は、アトピーなんかなかった、聞いたこともありませんでした。戦後の食糧増産の際使われた農薬が、私たちの体に蓄積されている。その体から産まれてきた子供たちは、なにかひとつ抵抗力を失っている。それがアトピーではないかと考えますが、これは私の勝手な判断です。特に百姓をやって農薬を使っているから、感じるのですが。

豊かな北海道に人々はやってきて、アイヌ民族をなきものにしようとした。では、アイヌ民族が抵抗しなかったかというと、抵抗はしています。しかし、アイヌ民族の使う武器といえば、木で作った鑓や数十メートルしか飛ばない弓矢です。また兵士の数でも日本には及ばない。

そうして負けていった。遠い昔にはアイヌは中国に行き元の軍とも戦ったことがある、それだけ外国と交易していた民族ということなのですが。

旧土人保護法

残念なことは日本はアイヌ民族に対してだけに、侵略を行ったわけではないということです。日本は、海外侵略しています。台湾や朝鮮半島を侵略していってます。その時何を行ったかというと、アイヌに対してやったことと同じ事をやっている。その土地に根付いた言語・生活・風習を禁じ、天皇を崇拝させ、日本文化を強要しています。日本が幸いにも、戦争に負けていたからよかったんですね。日本が戦争に負けたときに、アイヌ民族に対しての間違いも正してくれればよかった。そうしてくれていれば ..... 私が今ここで皆さんの前に立って、お話する必要もないわけです。

アイヌに対しては明治 4 年に、生活や風習、言語を禁じております。そして、明治 32 年にはどうせ今に滅び、滅亡する民族であるがうんぬんという文脈で、帝國議会の中で旧土人保護法という法律を制定しました。その旧土人保護法、3 年前まで法律の中に存在していたんですよ。おそらく皆さんはこのようなことを知らないと思います。旧土人保護法 .... 日本政府もすごいですよね。「土人」の上に「旧」までつけるのですから。見事にアイヌ民族の生活風習を禁じました。いかに数が多いから、力が強いからといって、一つの民族を完全に消し去ることはできません。一つの民族の精神、心というものは、つみとれるものではありません。それが証拠に、皆さんの前で私たちワークショップをやったり、こうして私が話してる。それが証です。

日本政府は明治 34 年に旧土人教育規定というのを作って、アイヌの子供たちを集めて日本語教育をしてきました。これは 21 年続きました。大正 11 年に廃案になっています。廃案になった後は、同じ日本国民として日本の義務教育を課せられている。でも今になって不思議に思うのは、私は日本国籍を持つ日本人、日本人の中のアイヌ民族です。日本国籍を持つ以上、そしてアイヌ民族として独自の文化を持ち、独自の言語を持つ民族ならば、義務教育のなかでアイヌ文化と言語を学ぶ権利があるはずです。教えられて当然なんですよ。ところが未だに行われていません。不思議です。アイヌだけでなく、ギリアークの人々、在日の人々も同じです。日本国内で生きている限りは、義務教育の中で自分たちの文化や言葉を学ぶ権利があるんです。でもそれを認めたくないから、単一民族国家といっているのでしょう。単一民族といってれば政府は非常に楽なのです。皆さん同じですよ、同じ民族ですよ、何も文句言う必要ない、みんな同じだからいいじゃないか .... パッと聞くとかっこいい言葉にきこえますよね。でもそのことが数の少ない人、弱い人をいかに苦しめているかということです。いかにその人たちの口を封じているかということです。

沙流川

このような訳で、私たちの先祖の文化や言葉はほとんど残っていない。幸いにも私たちの村、500 人程度の小さな村ですが、7 割以上がアイヌ民族の血を引いているということで、かすかにも文化や風習を受け継いできたのです。かすかにも民族としての誇りを持っている人がいる村です。村全体であるとはいえません。私のように堂々と名乗っているのはほんの一握りです。皆さんの身近には同和問題があると思います。それを思い出してもらってもわかると思います。同和の人が「私は同和である」と堂々と言わないのと同じ事なんです。

こういう経緯の中で、二風谷にダムを造るという話が持ち上がった。1969 年ですから、今からもう 30 年前ですね。日本列島改造論、田中角栄さん、とんでもないことしてくれました。もう破綻してしまった計画ですが、苫小牧の勇払平野に日本最大の工場地帯を作ろうした。ではその工業地帯を作るにはどうしたらいいか。水はどこから持ってくるか。沙流川から持ってこようと ... 二風谷を流れている川です。北海道で一番長い川です。その川は私たちアイヌ民族にとっては主食を供給する場所であった。

主食というのは、皆さんはアイヌ民族は熊と生活し、熊や鹿を食べているとお思いでしょうがそれは観光のキャッチフレーズにすぎません。先ほど申し上げましたように、アイヌの武器は 2、30 メートルしか飛ばない弓矢です。そんなに簡単に熊や鹿が取れるわけはない。一番手軽に、一番大量に取れるのが、この川の魚です。鮭です。鮭は早ければ 7 月末、遅くとも 8 月には産卵のために川を上ってきます。その時期から 10 月、11 月まで産卵のために上ってくるのです。その鮭がアイヌにとっては主食だったんです。ですから私のお祖父さんは、「自分たちが小さな頃は囲炉裏に鍋をかけて、それから川にいって鮭を捕って帰ってきても、まだ鍋は煮たっていなかった」と言っていました。川底の鮭は腹をすり、川面の鮭は日焼けするという言葉があるとおり、昔は大量の鮭が川を上ってきていたのです。一回に一トンも食べるわけでない。一匹の鮭は、4、5L あります。2 日や 3 日、

一つの家族が食べる分には充分です。その主食の鮭、早い時期には本当に食べる分しか取らない。11 月になって雪もちらついてくると、落ち葉が全部落ちて茶色の大地になります。その頃になって始めて、大量の鮭を捕ります。というのは、鮭は産卵を終えると全部死んでしまうのです。つまり、産卵の終わった鮭をその時期になると捕り始めます。捕ってきた鮭を開いて、軒下に干しておきます。そしてある程度乾燥すると、囲炉裏の上の棚に置いておく。そうすると、黙っていて薫製ができるわけです。薫製にしてまえば、何年でももつ保存食になります。

産卵を終えた鮭、ともすると川いっぱいに死んでいるんですよ。その鮭をいただいてきて、主食としている。それを ... 日本政府、それさえも捕ることを禁じたのですよ。世界にいる先住民族の中で、主食を捕ることを禁じられたのは、恐らく日本にいるアイヌ民族だけでしょう。殆どの先住民族は、売ることはできないまでも、食べる分の主食を得ることは許されています。ところが私たちアイヌにはそれが許されない。言い換えれば、皆さんの主食はお米ですよね、それは「明日からおまえたち米は食べてはだめだ」といっているのと同じなんですよ。それをアイヌに対して、やってくれた。それは、人間のやることですか？どうせいつかは滅びる民族だから、という日本政府の考えなんでしょうが。

二風谷ダム裁判

そういう経過のもと、戦後の山の崩壊があり、そして日本列島改造論・苫小牧工業地帯創設の名の下に、私たちの村にダムを造る計画が持ち上がったのです。その計画に私と父と、萱野茂さんが反対の声を上げたのです。私の父の言葉を借りると「日本政府は、今まで一度たりともアイヌ民族に耳を傾けてくれなかった。話を聞こうともしてくれなかった。だからこの大型公共事業を盾にして、俺たちの声を日本政府に届けたいんだ。」そう言っております。そう言ったなら最後までやってくれればいいのですが .....92 年に亡くなってしまいました。このことを手がける前に「こういうことをやりたいんだけどどうしたらいいか」と相談された際、私も気楽に「死んだら、引き受けるよ」と言いました。しょうがないから .... というのは嘘で、私も本当はやりたかったんですけどね。親父さんがやるっていうのに、親子でそんなことやってると生活成り立ちませんから。最後までやってもらおうと思っていたのに、勝手に死んでしまった。

日本政府にアイヌの声を届けたいと、まずは土地収用委員会に異議申し立てをしました。でも、この収用委員会に異議を申し立てても、何が行われたかというと、親父と萱野さんが 1 時間の制限付きの意見陳述。そして委員会が現地調査だといい 3 時間、何百平方メートルの土地が沈むのにたったの 3 時間来て、そして強制収用となりました。強制収用採決が決まった段階で、萱野さんの知り合いの弁護士の所に会いに行ったのです。

「どうしてもっと早く相談にこなかったのですか。いまからじゃもう遅いですよ。でも私たちは応援します。それはなぜかというと、非業だからです。しかし、この裁判は日本国内ではきっと負けるでしょう。だけれども日本の人々に少しでも事実を知ってもらうために、やりましょう。」ということで、始まりました。

幸いなことに、この裁判に関わってくれた弁護士がのべ 15 人です。途中で 2 人ほど亡くなっています。まぁ、それほど長く続いた裁判だったわけですが。全員、無償です。弁護士たちから食事をおごってもらったことはあるけど、私たちがおごったことはなかったなぁ。かかったお金といったら、裁判所に提出する印紙代くらい。8 年間の裁判の中で 10 万円くらいでしょうか。1 時間 2 万円もとられる弁護士の人たちを 15 人も使って ...、こんないい裁判まだやりたいのですが。これは冗談ですけど。(笑)

弁護士の方々が無償で協力して下さったから、できた裁判です。最初から、勝つはずはないとわかってスタートした裁判。この裁判の中で、私たちの歴史的事実、そして民族としての文化、つまり私たちには民族としての誇りがあるのですよ、ということを訴えました。証人に立ってくれた人も全員無償です。建設省における参考人意見陳述として、もと北大教授・吉崎昌一さん。皆さんよくご存じかと思いますがジャーナリストの本田勝一さん。私たちアイヌ民族の最大の組織の長であった野村義一さん。そんな人たちが建設省では証人に立ってくれました。裁判所では、大阪にある国立民族博物館の教授をしております大塚和義さん、学術の人がああいうところに立ってよいのかよくわからないのですけど。今は小樽商科大学に勤めている相内俊一教授、北海道教育大学岩見沢分校にいる田端宏教授。それは彼らが研究して得た歴史的事実を裁判所で申し立てるというものでした。いくらそのような証言があったとしても、わたしたちに勝因があるとは思えなかった。

アイヌ民族の先住性

判決がでたのが 1997 年、3 月 27 日。その日は私は前日から札幌にでて、弁護士といろいろ打ち合わせをしていた。俺たちが勝つことはないのだから、負けたと

きの抗議声明文を考えよう。そうして声明文の内容を考えて、札幌の町に飲みに行きました。ホテルに帰ったのが 11 時か 12 時と思うのに、マスコミってすごいですよね。教えてもいないホテルなのに、どんどん電話がかかってくる。「明日、負けたらどうします？」マスコミも最初から負けると思っているんですよね。「いまどういう心境ですか？」と聞いてくる。「最初から負けたら、なんていうなよな」と思いながら、こう答えました。「もし、裁判所に、人の心があったなら、勝つでしょう。」と。その段階では、それはただの願望だったのです。そうであれば、いいな、日本の司法がそうであったなら、という願望。ただそう思っていただけです。

判決当日、私たちは負けると思っているから、みんな暗い表情です。

一方被告は ... 私たちは土地収用委員会を訴えたのですが「これは私たちに非常に関係が深い」ということで、建設省が被告を勝手に引き受けたんですけどね。まぁそれで終わりかと思っていたら、国まで入ってきた。国は参加員という形で被告になってくれた。これに関しては、弁護人も驚いていました。こういった行政裁判において、国が被告になることはまずあり得ない。普通、国は行政問題に絶対タッチしないそうなんです。なのに、この裁判ではわざわざ国が参加員という形で被告になってくれた。まぁ、裏をかえせば、国はこの裁判に絶対負けたくなかったという、証なんです。負けては困るという証です。それはなぜかといえば、今までの隠された事実、皆さんが教えられなかった事実、それが明らかになるということですから。

話は戻りますが判決の日、私たちの暗い顔に対して、被告の方はにこにこしていた。裁判の度に思ったんですけど、国、つまり建設省や法務省の方々は東京から出張旅費をかけて前日からやってくる。寝不足なのか被告の一番前の席でコックリコックリやっている。何を飲んでいたのやら、確認したわけではないけれど .... アイヌの前でそうやっている。私も税金の無駄遣いを訴えるために、税金の無駄遣いをさせてしまったことになるのですが。

国は負けるなんて、思ってもいなかった。ただその判決は私たちの予想を覆したものでした。つまり、私が一番求めていた「アイヌは先住民族である」という判決文が盛り込まれていた。歴史的にも、文化的にも、アイヌは先住民族であると、少なくとも北海道における先住民族であると。裁判所としては最大の努力を払ったことと思います。そして、ダムを造るにあたって、その地域の調査を怠った。その地域に住んでいる人々の文化などを一切無視して建設を着工してしまった。だから、このダムは違法である。ここでうち切ってくれればよかったんですけど、ただしこの完成し運用しているこのダムを今から取り壊すというのは、公的損失が大きすぎるということで存続を認めるという判決でした。例えば選挙でいえば、違法行為があっても選挙のやり直しはしなくてよいというのがありますが、それと同じやり方なのです。この判決の場合、実質的には国が勝ったことになります。ダムは残していいというのですから。おまけに判決文そのものには「原告の訴えを棄却する」となっている。「却下する」というのでないだけよかったのですが。

いろんな人に言われました。「あれだけの判決がでたなら、アイヌ民族としての損害賠償を求めなさいよ。上告しなさいよ。今までの歴史的な償いを国からもらいなさいよ。」と言われました。でも、私たちはそれはやりませんでした。つまり、控訴しませんでした。それはなぜかというと、今までの例からいうと、上にいけばいくほど、国寄りの判決になってしまう。私たちの希望の90％以上認めてくれた、その判決を覆したくない。このまま確定してくれれば、それが残りますからね。そこで控訴しなかったわけです。当時議員だった萱野さんの情報によると、この判決に不服があった国の方が、むしろ控訴したかったそうです。つまり先住民族として認めてしまったことに対して、法務省が控訴したかったそうです。ですが勝った裁判に対して控訴するなんておかしな話ですし、控訴を取りやめたため、この判決が確定しました。

受け継ぐ文化

この裁判の判決文の中に、私が一番好きな言葉があったのです。それは「自分の受け継ぐ文化を、誰をも侵すことはできない」という文でした。これは、すばらしいなあと思いました。これはどういうことかというと、自分が受け継ぐ文化に対して誰も笑ったり阻害できないのだよ、そうしてはいけないのだよ、という意味なんです。一番近いものに例えれば、家のみそ汁の味と隣の家のみそ汁の味は違いますよね、全く同じということありえないでしょ？でもその違うみそ汁の味は、その家の「文化」なんです。お爺ちゃん、お婆ちゃんの代からずっと伝わってきた文化なのです。その家庭の生活のサイクルだってそうです。生活のサイクルは家々によって違うはずです。勤めであれ自営であれ、それぞれの生活はその家の文化なんです。

私は文化というものは、ひとつに固定されたものでなくて、生活の中で息づいていって変わっていく、それが

文化だと思います。ただし、それを誰も妨げたりしてはいけないということ。憲法13条から引用した判決文らしいのですが。

私はその言葉が、とても好きであったし、またそれがアイヌ民族が第一に望んでいたことです。それは私たちの文化を認めて下さい、皆さんと違ったものを認めて下さい、違って当たり前ではないですか…そういうことなんです。ですから今の日本で一番不思議に思うのは「方言を笑う」ということです。方言というのは、その土地独特の気候、風土、生活から生まれた言葉でしょ？その土地に生まれた人々が、長年築いてきたことばでしょ？どうして、笑うのですか？どうしてそれがいけないのだろう。日本の国には方言たくさんあります。北海道から沖縄まで約2000?Hあり、常に温度差20度以上あるこの日本。それだけの温度差、気候の違いのある日本で、言葉を一緒にして、生活文化を一緒にして…それは無理な話でしょう。それがこの判決文のなかに盛り込まれていたということなのです。だからすごく嬉しかったのです。

自分の生まれ育った所を誇りに持てるというのは、嬉しかったんですよね。それが判決文の中で述べられ、みんながその内容を理解したとき、「日本が単一民族国家だ」という発言はでてこないでしょう。そして方言を使った人を笑うということもなくなるでしょう。共通語は必要かもしれませんが。

アイヌ民族が民族としての言葉をもっている、それを奪われた私たちが言うのですよ。皆さんの地区それぞれの方言や、生活がなくなってしまってからでは遅いのです。みんなが助け合って築いていくそうでなければ、本当に楽しい社会なんて生まれないのではないかと思いますよ。

二風谷ダムのその後

ダムが建設されはじめて3年たつのかな。（1999年当時）ダムができてどういう影響がでるのかなと思ってみていますと、あれはもともと工業用水を目的としていたはずなのですが、いつの間にか洪水予防、発電のためという名目にすり替わっています。確かに、雨がふればある程度の水を止める力はあります。一日3000キロワットの発電、1000戸分の電気量。800億円かけて、1000戸分の電気ですよ。お宝級です。

ダムの水がどれくらい浄化されるのか見ていたのですが。北海道は冬になると土が凍って、絶対水なんか汚れることはない。だから冬の間は水はとてもきれいなのです。雪解けが始まると、水は汚れだします。雪解けでなぜ水が汚れるかというと、寒さで土が凍ると土の中の水分が膨張します。つまり土を持ち上げる、霜柱を思い出して頂ければいいかと思います。それで持ち上げられた細かい土が、水にとけてさらさらと流れ出す。

今年は4月の25日から濁り始めて、終わったのは6月21日だったかな。なぜ私はこのように見ていたかというと、ダムができる以前は5月中頃には、川の水がきれいになっていたからなのです。しかし今は1ヶ月近くも長くかかっている。それはなぜかというと、ダムで水がせき止められています。雪解け水でダムに濁った水が流れ込みます。いくらきれいな水が流れ込んだとしても、ダム底にあるのは汚れた水なんですね。少しでも雨でもふればダム内の水は濁ってしまい、いつまでもダムから下流にきれいな水がいかなくなってしまう。そのためにダムができてからは、水がきれいになりにくくなった。

もうひとつは、沙流川は私たちの言葉でいえばシシリムカなんですが、誰がつけたか知りませんが、読んで字のごとく砂の流れる川。それだけ上流から土砂が流れる場所なのです。上流から落ち葉などの土砂が堆積します。その中では微生物が生まれます。その微生物が生きるには酸素が必要なのです。その酸素は水に含まれているものを使いながら彼らは生きている。ダムにたまった水というのは、酸欠状態になっているわけです。酸欠状態になった水が下流に流れていく。ダムでは上部の水が、下流に流れることはないのです。水圧によって、必ず下部の水が上へ押し上げられてダムを落ちていく。ダムができたために、ダムの下流では常に摂氏7度から8度くらいの水しか落ちていかなくなった。そして冬は、外気より温かくなってしまったために水が凍らなくなった。逆に夏は、水が冷たくなったおかげで、農業には非常に不利な状態になりました。ただ減反政策によって、米を作る人が減りましたから、あまり文句を言う人がいないというだけです。ダムができても、いいことはないなと感じます。

さらに重要なことは、村の7割以上がアイヌ民族であるということで禁止されてもささやかに受け継いできた私たちの文化は、ほんの100年前までは森で生活していた人々の文化だったわけです。だから、森、川、地形などが変わってしまったら、受け継ぐことが困難な文化なのです。私たちの村の地形を変えられたら、私たちの文化を伝えることを禁止されたことになってしまう。二風谷という、もとの地形が必要なのです。それが壊されてしまった。判決文の中でも「日本政府は速やかにこの事態に対処しなければならない」とあるものの、判決から

3年たってもなんの対応策もありません。でも日本政府だって、人間の心があります。この判決文を無視した行動をとらないということを信じています。いつの日になるかは、わからないですけど。

私はあのダムを「5日ダム」と呼んでいます。萱野茂さんが、毎年8月20日に行っていたチプサンケという川の船の行事をやろうと言いました。アイヌ民族にとって川は食料源でもあり交通機関でもありました。このお祭りは船の進水式のようなものです。木をくりぬいた船、今は博物館に飾られている船を水におろしましょうということになった。ダムに水がたまった年、せめて最後のチプサンケを、ということでダムの水を抜いてもらいました。洪水調整という二風谷ダム .... ダムの水を抜くのにたった4日しか、かからなかった。満水状態で、下流に影響を与えずに水を抜くのにたった4日。チプサンケが終わって、水を溜めるのにたった3日。まぁ、4日ダムっていったらあまりに可哀想なので、5日ダムと呼んでいるのです。それだけ洪水調整能力がないダムだということです。もうひとつ、普通ダムというのはコンクリートを積み上げて上から水を流しますね。二風谷ダムは7つの水門があり、その水門の扉を上から落として閉めなければ水が溜まりません。つまり、水門を開ければ元の川に戻ってしまうのです。

だから、この7つの水門をあげて、このダムを保存してほしい。そして大雨が降って、洪水が起こりそうになったら、門を閉めて洪水調整してほしい。そしてこの二風谷ダムを「負の遺産」として、開発事業やアイヌ民族への歴史的事実に対する負の遺産として、保存してほしいと願います。

農業家として

私は農業（シケレペ農場）を営んでいますが、不思議に思うのは、例えば輸入物のグリーンアスパラの場合、少なくとも収穫するのに1日かかります。そして飛行機に乗せるのまでに2日。食物検査で3日かかります。そして市場に出て店頭に並ぶのに1日。つまり一週間かかるわけです。それが、どうしてあんなにみずみずしく、おいしそうに店頭に並んでいるのか。私もグリーンアスパラをつくり、消費者に直に発送しています。つい先日収穫が終わったところです。グリーンアスパラは朝採って、昼頃になるとしなっと柔らかくなるんですね。そんな敏感なグリーンアスパラ。店頭ではどうしてあんなに瑞々しいままなのか。いったい郵送中に何を使われているのか、何を振りかけああいった状態を保っているのか ....。よく考えていただきたいと思います。外国から輸入した飼料を食べている家畜には身体的な異常が多く発生しています。それは、恐らく大量の農薬やホルモン剤が使用されているからでしょう。動物だからいいというものでもありません。人間もこれを自らの問題として考えなくてはいけません。本来の生き方を自分たちが守っていかなくてはいけないのです。

アイヌの精神文化は、まわりに存在するもの全てが神です。動物だからといって、人間より下ではないのです。人間と対等です。人間と同じように地球上に存在するもの全てが大切なんです。そうあってほしいなと思います。

（1999年、九州芸術工科大学にて〈現・九州大学〉）

二風谷プロジェクト

1999年、二風谷ダムを望む貝澤耕一氏の敷地内に、彫刻台座制作、設置作業を行う。制作中は納屋に寝泊り。参加者は午前中は農作業を手伝い、午後に制作をする。Web（今ほど普及していなかった）を通じてよびかけたところ、さまざまな方が応じてくれた。二風谷の空気を吸い生活することから、ダム問題を考えたかった。近代の中で構造としての差別が残っていくのはなぜなのか、また、メディアで流れてくる情報内容と当事者の実感がこれほどかけ離れていくようになったのはなぜなのか。私たち日本人が「考えること」を後回しにしてきたものの重みを感じ、問い直したかった。問いかける力、新たな認識の呼び水になる力が芸術に残存していることを期待している。　碑文には**「遠い昔から、この豊かな大地で生活してきた先住民族アイヌの人々。その事実を誰が変えられるだろうか。貝澤耕一氏（父、正氏）と共に、受け継ぐ文化の大切さを訴えた人々にこの像を捧げる。」**と記している。

「回想ー二風谷ダム」大理石

農作業の手伝い

納屋での夕食

像に水で洗う貝澤氏

右が二風谷ダム

平成 19 年度現代 GP「地域環境・農業活用による大学教育の活性化
～ネットワーク型農学校が大学と地域社会の未来像を創造する～ 」とは

本取組では，九州大学と糸島地域が有機的連携を図り，農業を基盤とする地域の持続的発展と調和した新しい学生教育学習基盤の形成を目指す．すなわち，糸島地域に分散する農地や畜舎等の生物生産基盤，森林･ため池･河川等の環境資源，歴史的・文化的資源等を集約したネットワーク型農学校を創設し，これを核に参加型・体験型学生教育・地域活性化プログラムを構築する．具体的には，①農業体験実習プログラム，②農村留学プログラム，③小中学校体験学習受入プログラム，④シルバー世代受入プログラム，⑤教育研究のための地域資源有効利用プログラムから構成される．体験学習や世代間交流を通して，学生の食・環境・地域文化に対するセンスや学生自らの課題設定・解決能力を養いつつ，同地域との人的交流の深化によりコミュニケーション能力，マネージメント能力，ファシリテーション能力を育成する．得られた成果は同地域に還元し，地域社会の活性化を促す．

公式ホームページ　http://itoshima-gp.bpes.kyushu-u.ac.jp/

＊「大地、生命、農業と芸術の融合による教育プログラム　～未来につづく道」はこの補助事業として実施されました。平成 21 年度の新規全学教育科目「命のあり方・尊さと食の連関」（中司敬教授、中野豊助教、知足美加子助教）における知足担当部分の参考資料としてこの報告書は制作されました。

2009 年
編集　知足美加子
http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/
発行　九州大学現代 GP